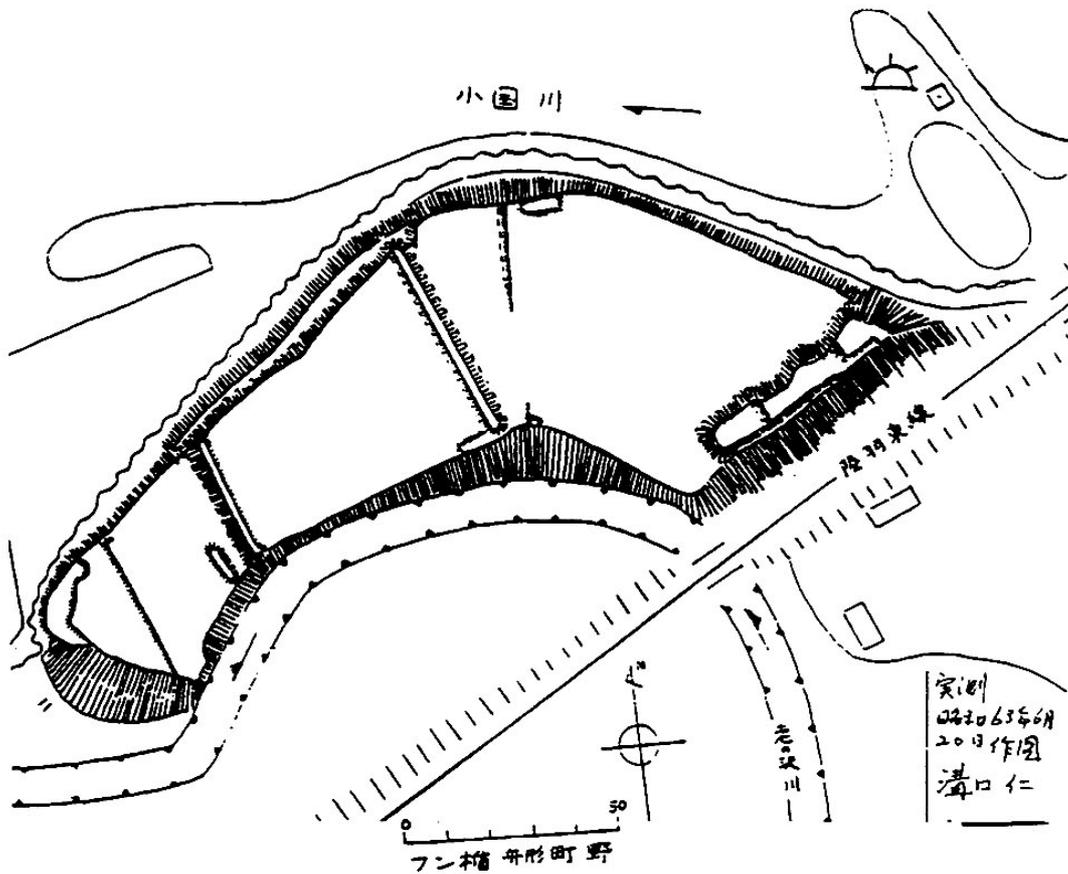


3 史 跡

フ ン 楯

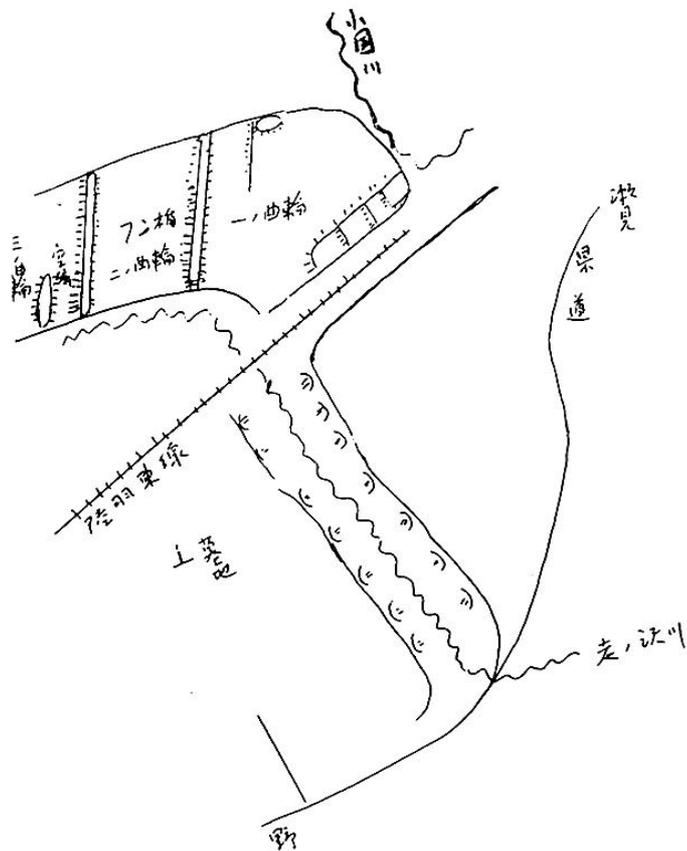
【所在地】 野

野集落の墓地の北方、老ノ沢川に沿って築城されている。陸羽東線瀬見長沢間の工事によって楯の最も重要な基部が破壊されたことは惜しまれる。築城年代は不明。瀬見^{キョウコク}峡谷の開口部にあり、対岸に瀬見街道が走っている。また、野集落より村山に通じる糸桜越（アケビ越とも云う）があるなど、地形的に重要な位置にある。ここからはニラ楯、古楯^{フルクテ}が一望され、長沢楯の一翼をなしていたと思われる。楯は平坦な段丘上にあつて、幅2m余長さ50m高さ1m位の直線の土塁を築き、2つの^{フルフ}曲輪を形成している。西方の曲輪の西端に土塁を築き、段差を大きくしている。三の曲輪の南端に^{カラギ}空堀りの一部と土塁の一部が残っている。二の曲輪に沿って空堀りがあったと思われる。規模は小さいが堅牢な楯である。





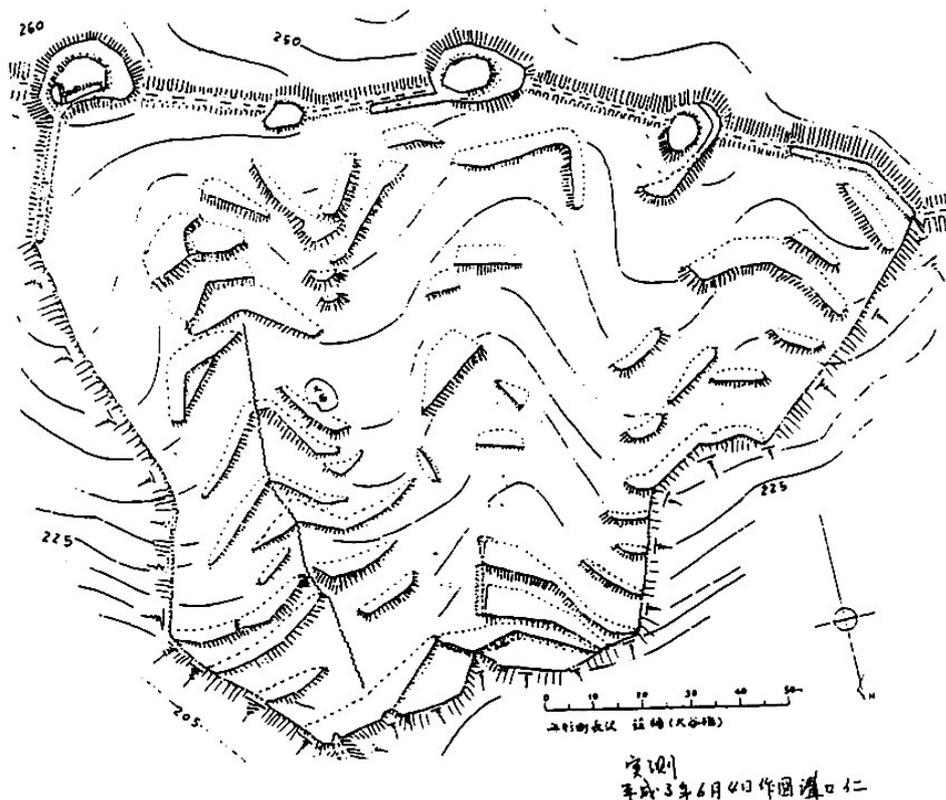
写真中央の細い一直線の積雪部分が楯跡である。陸羽東線北側台地より撮る。平成3年3月19日撮影



ニラ 葎 ^{ダテ}楯 ^{ダイヤ}(大谷楯)

【所在地】 幅 (大谷)

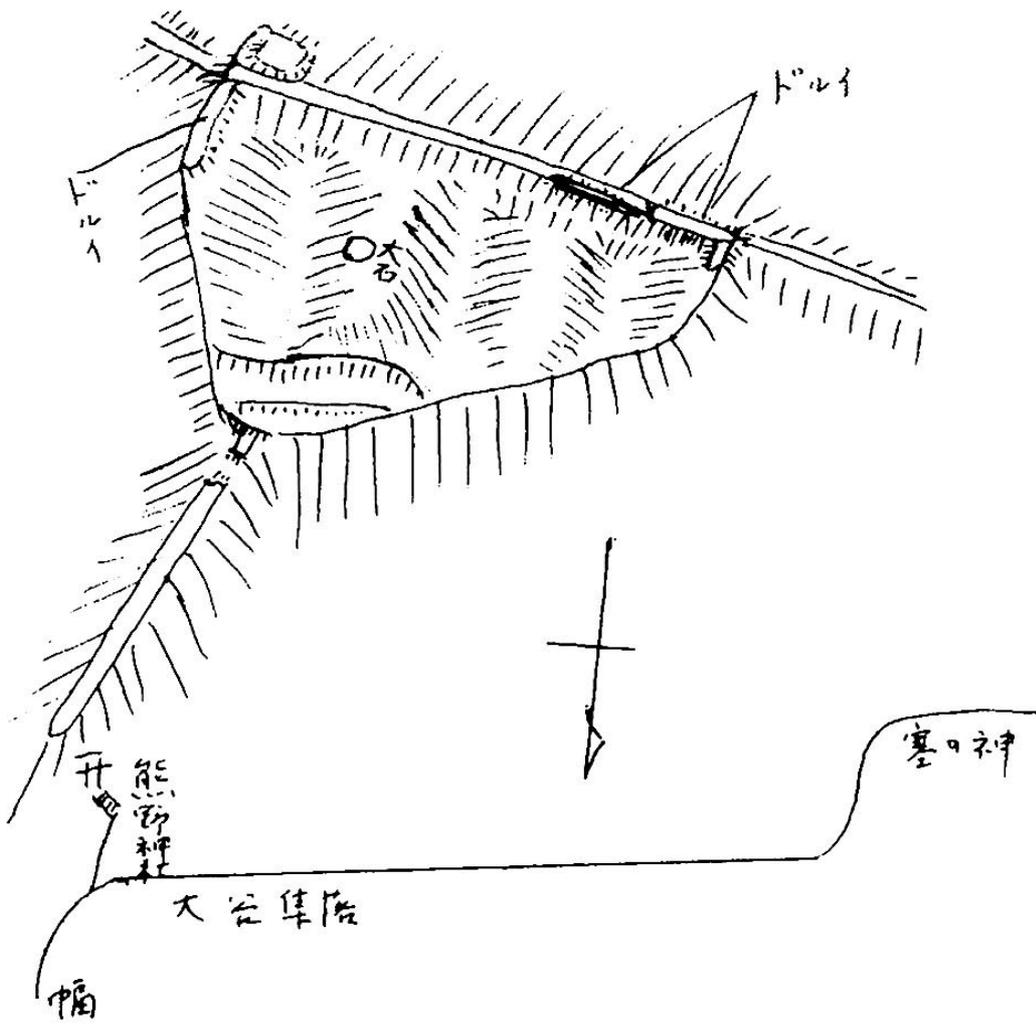
葎楯は、大谷集落の南標高260mの高い所にある。東西にのびる尾根筋にあって、楯の北下縁は絶壁をなし、南面が急斜面をなしている。長沢地区にある楯の中で最も高い所において、見張り場的な存在である。尾根筋両端に土塁を築き、他と分断している。楯は3つの窪^{クボ}地^チからなっていて、東方の窪地に曲輪が集中している。曲輪の大きさは幅が狭く全般的に小さい。主郭(本丸)と思われる曲輪が見あたらない。楯の東方に村山地方に通じる「アケビ越」(糸桜越)の道があって、軍事的にも重要な位置にある。楯の規模は小さく実戦用の楯とは云えない。ニラ楯の呼び名は、楯の尾根筋の東端斜面の中腹に大面積にわたって生えているニラによるものと考えられる。このニラは自生とは考えられず、敵に攻められ難くするため植えたと考えられる。窪^{クボチ}地の曲輪が雨水によって僅かに壊れているだけで、保存状態は良好である。



矢印が葦橋跡



平成3年3月19日撮影



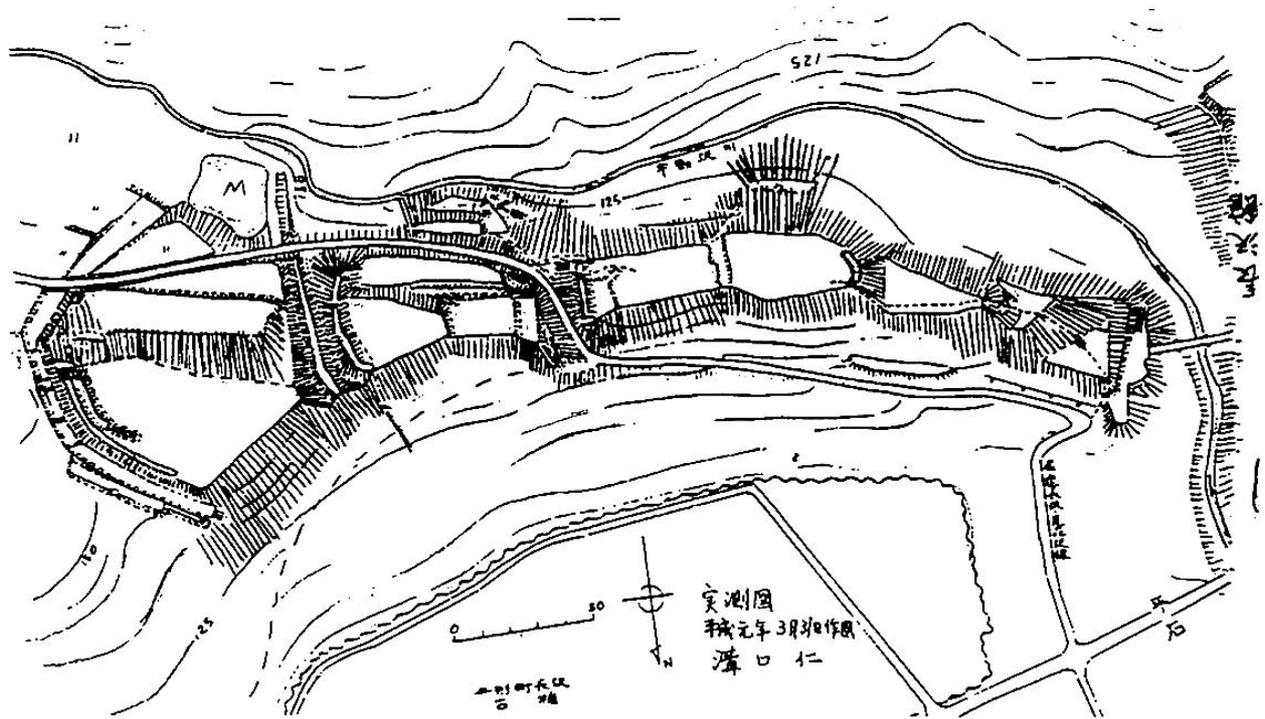
古 楯

【所在地】 長沢（平石）

築城者・築城年代とも確かな文献がないので不明である。長沢楯の東方不動沢川の対岸に東西にのびる山頂尾根筋に築城され、その全長400余mに及ぶ。楯の南北は急斜面で堅牢な楯である。まず楯東方基部は、大空堀を以て他と分断している。曲輪には空堀に沿って土塁を築き、段差を大きくしている。また、この曲輪の西端に巨大な二重空堀を設け、主郭（本丸）としている。これより西の曲輪に二重空堀に沿って巨大な土塁を施し、更に段差を大きくして二の曲輪とし、（本丸とも考えられる）次の三の曲輪との間に二重空堀を設けている。この部分が僅かに残っている。三の曲輪にも大きな土塁を築くなど、実践的で難攻不落の楯として構築されている。この楯西端より不動沢川の対岸約30余mの近距離に長沢楯がある。しかも、この楯は古楯より見おろす位置にあって、ニラ楯、フン楯が一望出来ることから長沢楯の出城と考えられる。県道長沢尾花沢線の道路が二の曲輪と三の曲輪の間を掘削し、更に楯に沿って東へ開通し、基部の大空堀を埋め立てたことは何としても惜しまれる。また、平石より七夕神社という石仏から尾根伝いに道がある。この道は塞の神から芦沢へ通じる道ではなかろうか。道路によって一部破壊されたが、現在残っている楯跡は中世城館跡として貴重な資料である。



古楯山頂である 平成3年3月19日撮影



長沢楯（鶴楯、曾我楯）

【所在地】 長沢

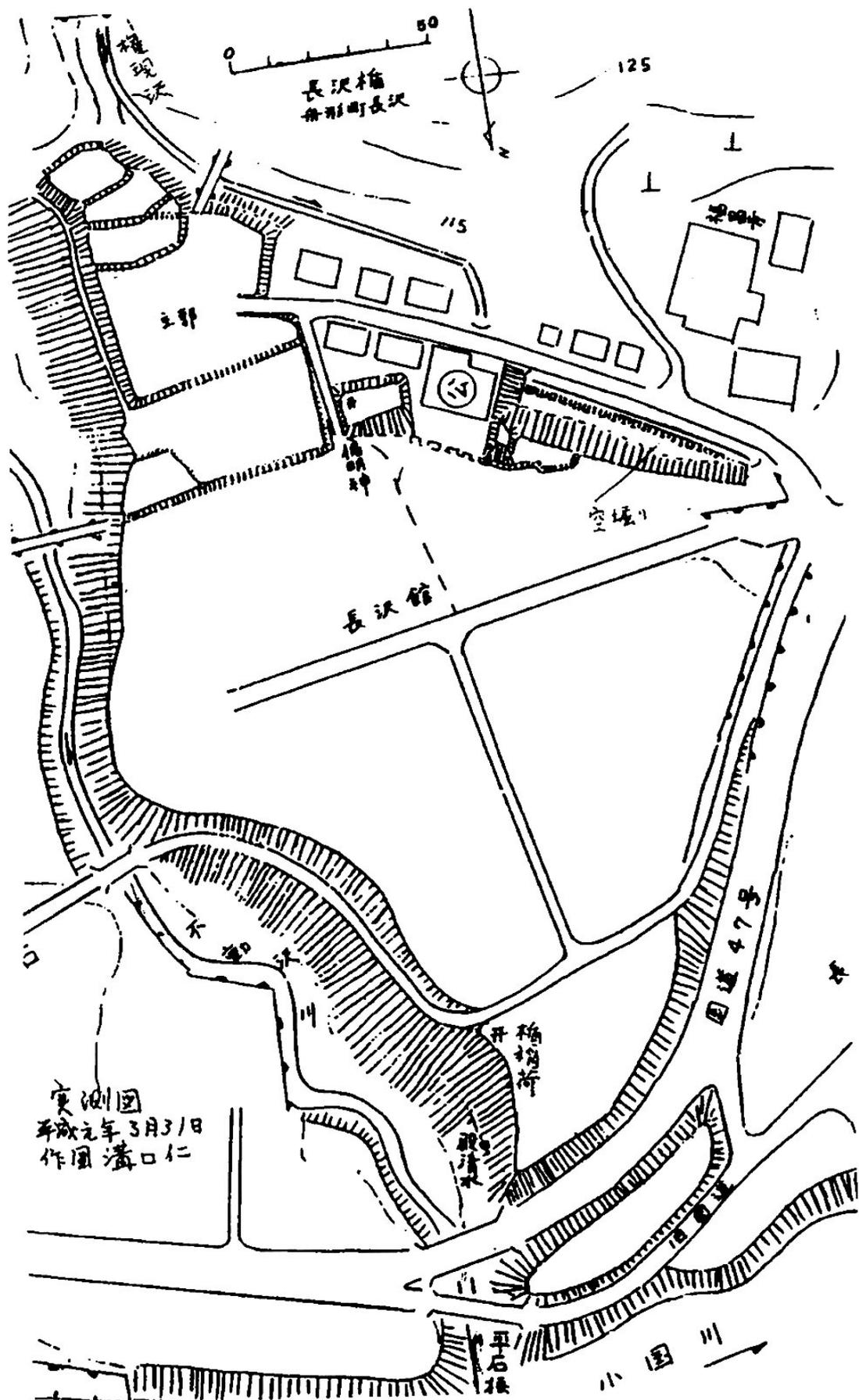
長沢楯は鶴楯とも、また、曾我楯とも呼ばれる。権現山^{ゴンゲン}から北にのびる舌状張出丘陵に築城された楯である。築城者は曾我十郎祐成の子孫長沢監物祐種^{ケンモツスケタネ}と伝えられているが、築城の時期は文献がなく不明である。楯主は長沢監物祐種から長沢常陸^{ヒタチ}へ、次いで長沢仁兵衛尉^{ニヘエノジョウ}へと引き継がれた。長沢常陸は最上氏に属していたが、跡継ぎがなく、最上義光^{ヨシアキ}の斡旋^{アッセン}で羽黒山衆徒を貰い子した。これが長沢仁兵衛尉で、長沢家最後の楯主である。元和8年（1622）、最上氏が改易となり、廃城となった。現在長沢監物の寄進と伝えられる応仁3年（1469）3月銘の鰐口^{ワニグチ}がある。長沢楯の基部は幅は狭く、東は不動沢川、西が権現沢で、その幅は約10数mである。楯の東方は絶壁をなしているが、西方権現沢は比較的浅いため、これに沿って空堀が施されている。主郭（本丸）と伝えられる曲輪近くに2m余の堅牢な土塁の一部が残っていて、ここに楯明神の小さな祠がある。楯の遺構は基部より5段の曲輪が残っているが、近年に至って、旧国道により楯の先端部分を掘切り分断された。更に楯西側に幾つかの曲輪があったというが、今はない。また、部落形成により破壊されてしまった部分もある。空堀も埋まって浅くなり、公民館から北に一部残っているに過ぎない。



対岸内山から鶴楯を望む



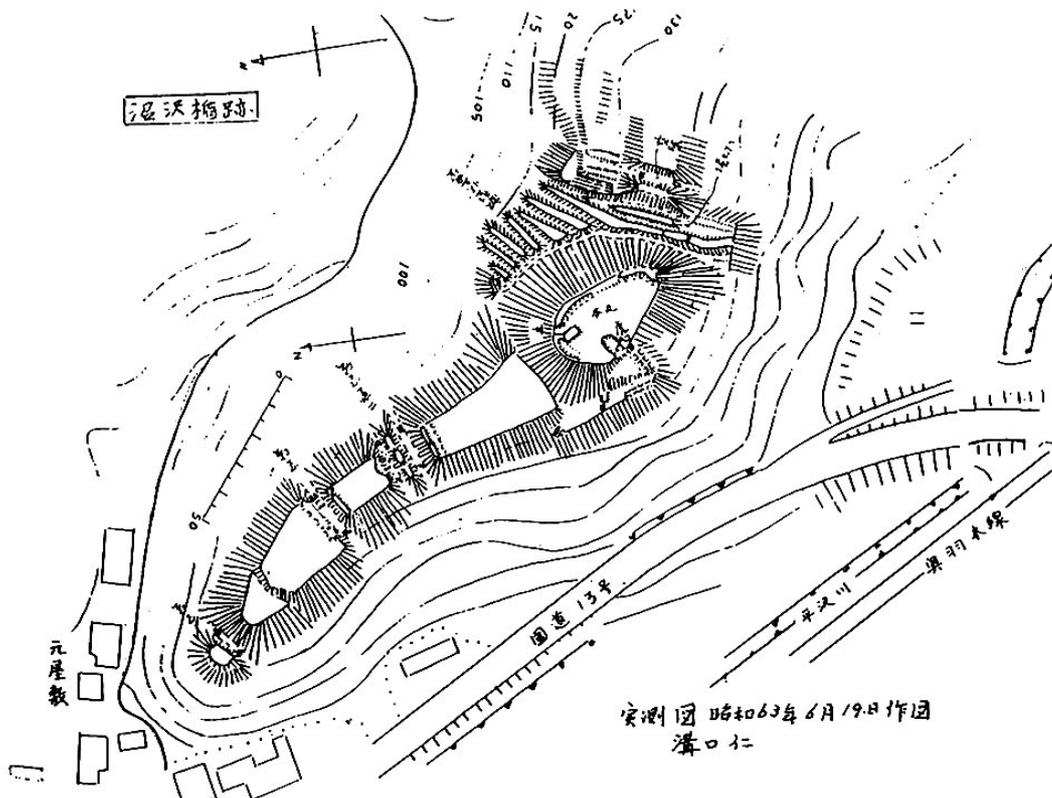
公民館より空堀跡を望む 平成2年4月撮影



沼 沢 楯

【所在地】 舟形

標高130mの北西にのびる西側急峻な尾根筋に築城されている。楯北端麓には元屋敷がある。楯主は沼沢新左衛門という。清水時代には清水氏に属し、「清水大蔵大輔分限帳」には、5,808^{カリ}疋を有する馬上衆と記されている。慶長19年（1614）、清水氏滅亡後は山形最上氏に属した。楯の存続期間は文明8年（1476）～慶長19年後と考えられる（『舟形町史』）。楯の基部は浅い空堀を施して屋根筋を分断し、更に大きく堀切られ、底部に二重空堀を施し、また、敵型状に北東に6本の土塁を設けるなど執拗な造りである。主郭（本丸）はこの上にあり、堀切り沿いに土塁を築き、落差を大にしている。主郭南西に虎口^{コッコウ}を設け、二ノ曲輪に通ずる。また、二ノ曲輪と三ノ曲輪との間に二重空堀を設けている。曲輪の数は6ヶ所で、楯としての規模は至って小さいが、実践的で堅牢な楯といえる。



主郭



猿羽根山随道上より望む、写真右山頂に植林されている部分は本丸である。

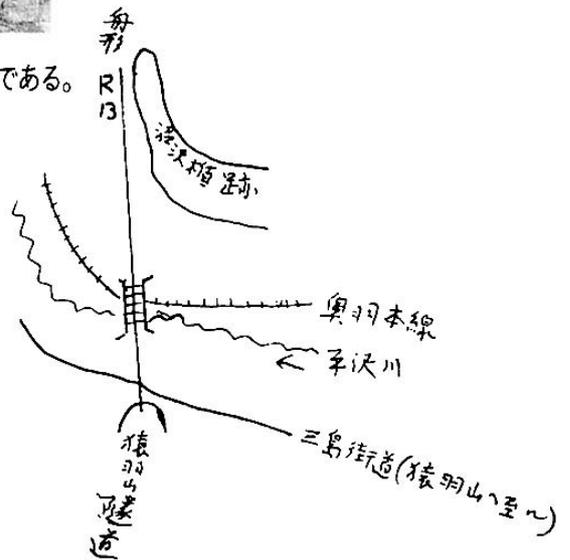


堀切底部の二重空堀り左側が本丸

畝形状の土塁が並列している。最下端に一部壊れているのが、半円形に盛土されている部分がある。その下方に湿地性植物が自生している。半円形の中央部分を掘ったら水が浸み出ている。二ノ曲輪北東端より4～5m下方にあり、湧水の地とも考えられる。



当町に現存する楯八ヶ所で畝形状土塁があるのは沼沢楯だけである。
平成2年4月撮影



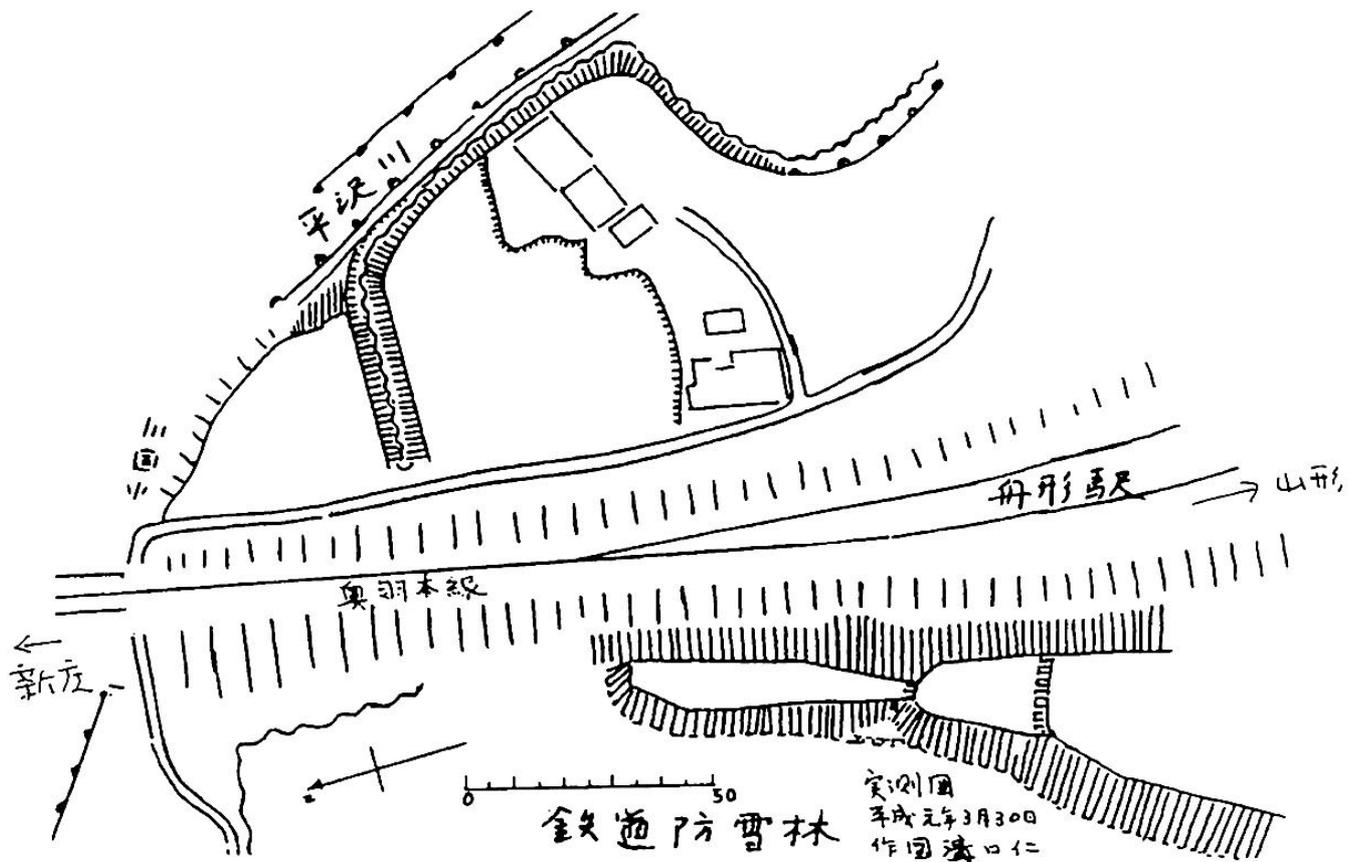
ナラ 榎 サワ 沢 楯

【所在地】 舟形駅周辺

舟形駅一帯が榎沢楯と伝えられる。楯の遺構と思われるのは、右写真左側防雪林内に曲輪と思われるのが部分的に3カ所見受けられるだけである。楯東方は宅地化によって、また、明治36年鉄道敷設によって壊されてしまった。前記の曲輪も鉄道敷設の文献を調査しないと断定出来ないが、ほぼ曲輪に間違いないと思われる。当地区は長沢監物の領地で、築城者は、長沢楯主の家臣榎沢出羽守と伝えられる。榎沢楯について『増訂最上郡史』に次の様に記されている。「内屋敷、榎沢楯という二ヶ所あり、楯跡・古井・庭石等存ずと雖も住居せし人詳ならず、沼沢氏の別邸なるべしというも証なし」と。しかし現在では、古井戸・庭石等も見あたらない。平成5年に西ノ前内屋敷を発掘調査した際に東西に真一文字に空堀の一部が発掘された。



昭和63年 4 月撮影



サ 猿 羽 根 楯

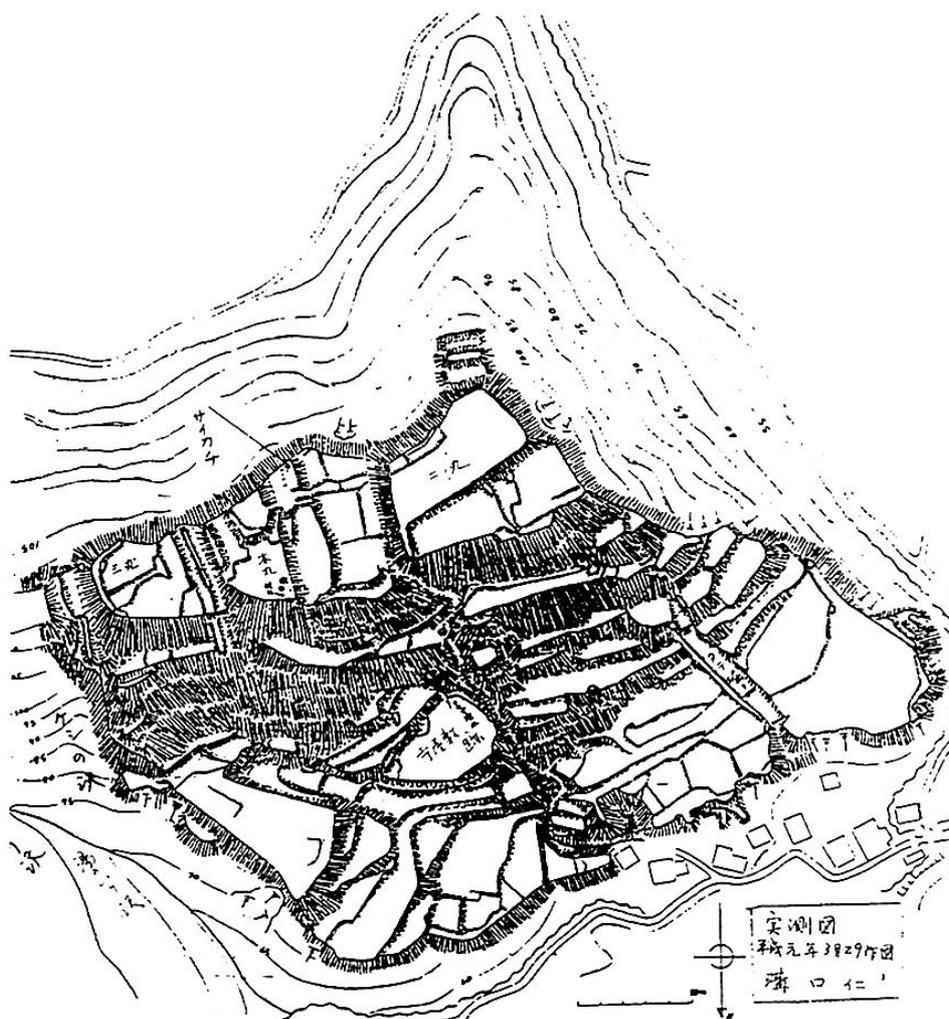
【所在地】 富田

楯の周囲は急斜面で崩れている所があるが、人為的にはほとんど破壊されていない。北面は比較的^{カンシキメン}に緩斜面で南西は断崖である。楯は東西にのびる尾根筋を巧みに利用した築城で、楯の基部は深い堀切りによって分断している。底部の北斜面に二重空堀りを施している。堀切りに沿って土塁を築き、落差を更に大きくして三ノ曲輪としている。この西端に二重空堀りを施し主郭とし、この空堀りに沿って土塁を築いている。主郭（本丸）南面に^{ヤグラ}櫓台を設けてある。主郭北方に楯主お手植えと伝えられる町指定天然記念物の親杉がある。胸高囲7mある。また、主郭とその西方に幅50mの大空堀りを設けて二ノ曲輪（二ノ丸）としている。この空堀南東端に、サイカチの古木がある。大空堀南側に二ノ曲輪に通じる道と思われる部分がある。二ノ曲輪南西隅に尾根筋があるが、ここには深い二重空堀りを設けて二の曲輪と分断している。また、二ノ曲輪北斜面に大きな縦堀りがある。楯の規模は約10町余、曲輪の数も80余、楯の規模は大きい。楯主は源次郎義高とされている。彼は延文5年（1360）、轟に築城し、その後貞治元年（1362）、これを猿羽根に移した。以来8代光義が楯主になったが、天正13年（1585）、19歳で病没。父^{ヨシズミ}義舜が再び楯主になったが、山形最上氏と対立し、天正17年（1589）6月17日、長瀨に於いて切腹、猿羽根家は断絶した。富田の町並みは城下町として区割され、今なお当時をしのばせる。

楯一帯植林されて居り、しかも北斜面は緩斜面であり、杉伐採時に林道が開設される恐れが充分にある。貴重な文化遺産として後世に伝えるべきである。



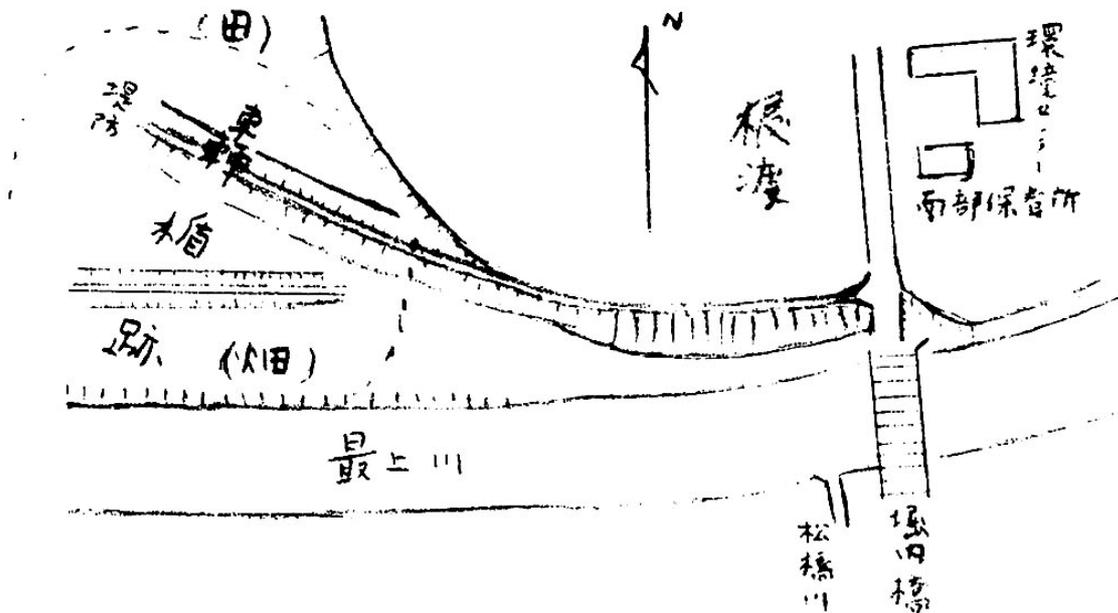
猿羽根楯跡 祈禱塚より猿羽根楯を望む 平成4年12月6日撮影



トドロキ
轟 楯 跡

【所在地】 富田字轟（根渡）

写真中央に残雪一直線になっている場所に轟楯跡があったという。最近まで楯跡の一部が残っていたというが、昭和40年、小国川が最上川水系として1級河川になった折、築堤され完全に消滅してしまった。富田義高家文書によれば、源義家9代の孫源次郎義高は、延文5年（1360）この轟に要害を構え、2年後の貞治元年（1362）、これを猿羽根に移したとある。写真左集落に張り出した手前の山は猿羽根楯である。また右の建物のある所は根渡である。





轟
楯
跡

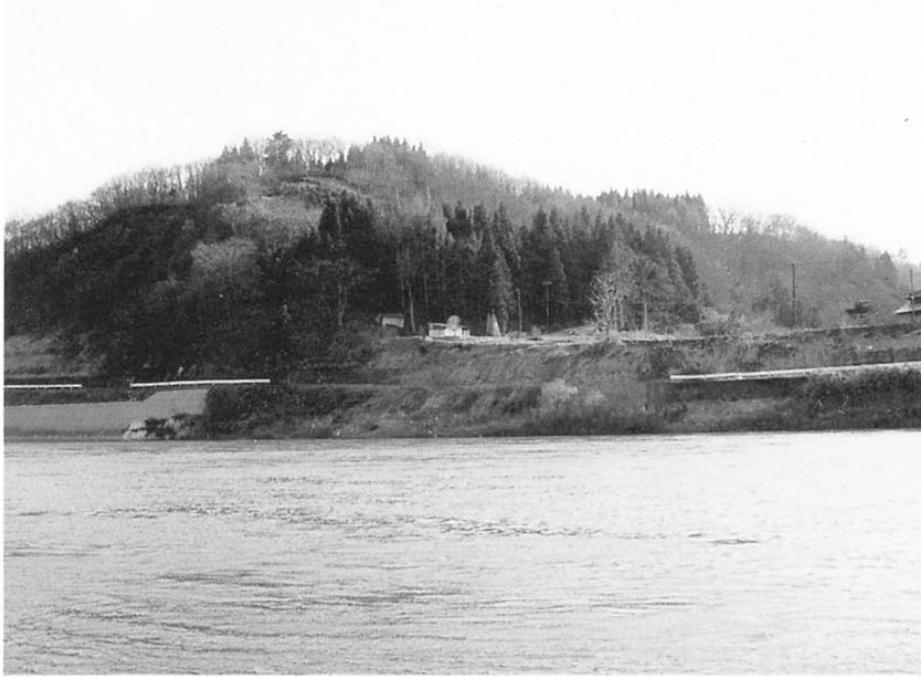
瀬脇より轟楯を遠望する。手前は最上川。 平成7年3月29日撮影

手 倉 森 楯

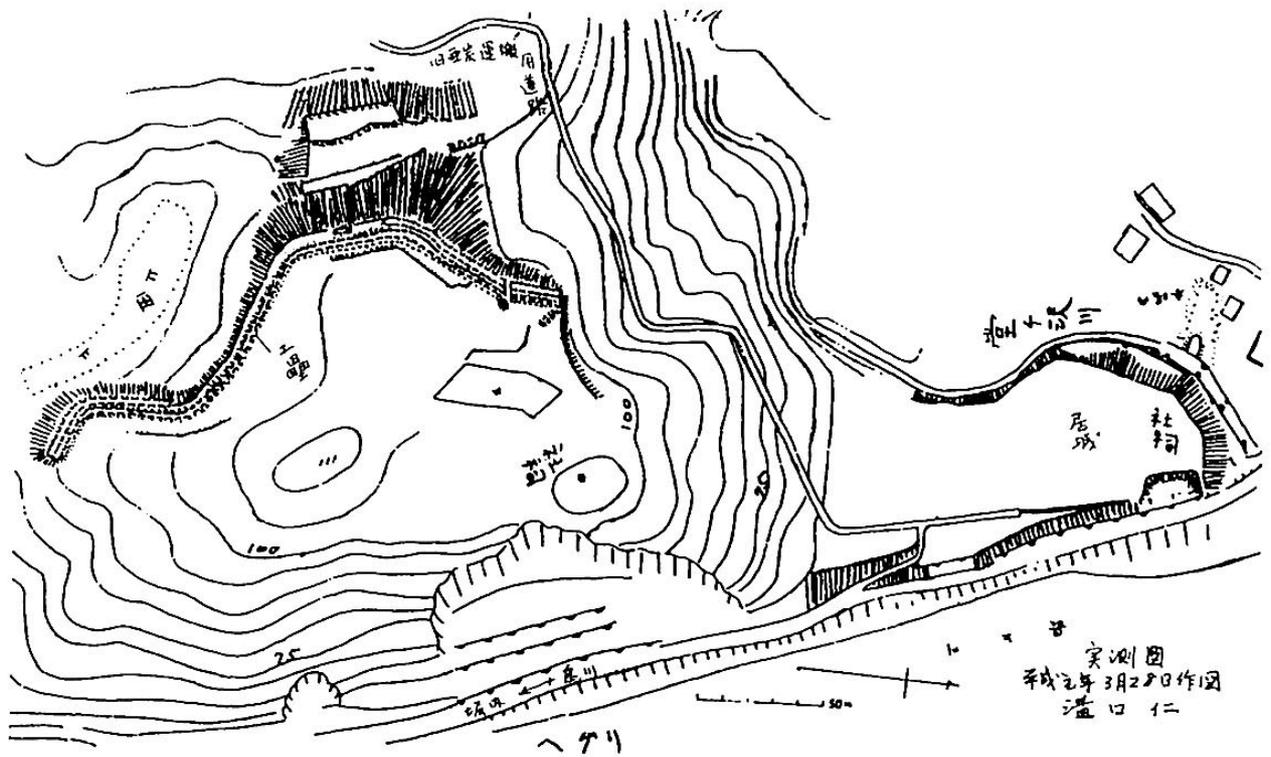
【所在地】本堀内

手倉森山頂の南山裾の窪地^{クボチ}を空堀りとし、更に手倉森を囲むように土塁約180m築き、この土塁に沿って空堀を設けたとみえ、その一部が残存している。しかし、山頂には曲輪らしきものが見当たらない。又北西部に張り出した河岸段丘上に居を構えたと思われるが、この地は屋敷地と畑地と化して遺構は消滅した。この楯は、猿羽根楯主2代義満が、永和2年(1376)、3代元安に跡を継がせ、自分はここに隠居して、仮の楯を築いて居住した所という。彼はこの後、元安の病死に伴って再び猿羽根楯に移動したので、当域は以後廃城となった。

〔段丘上に縄文中期の土器が出土する。〕



最上川と小国川の合流地点より撮る。平成元年12月撮影



戸 沢 藩 境 界 碑

【所在地】 猿羽根山 地藏堂下

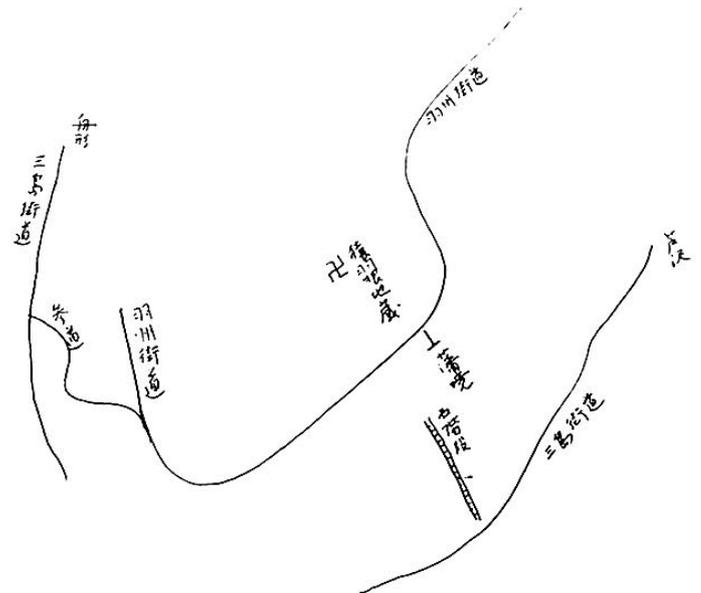
猿羽根山地蔵堂下羽州街道脇に「新庄領」と刻んだ碑が建っている。藩境標識の碑である。碑の頭部は欠落しているが、欠損部分に「從是北」と陰刻されていたものと思われる。歴史資料として、貴重な碑である。



地藏堂下 羽州街道東方に向かって撮る



平成 5 年 11 月 25 日 撮影



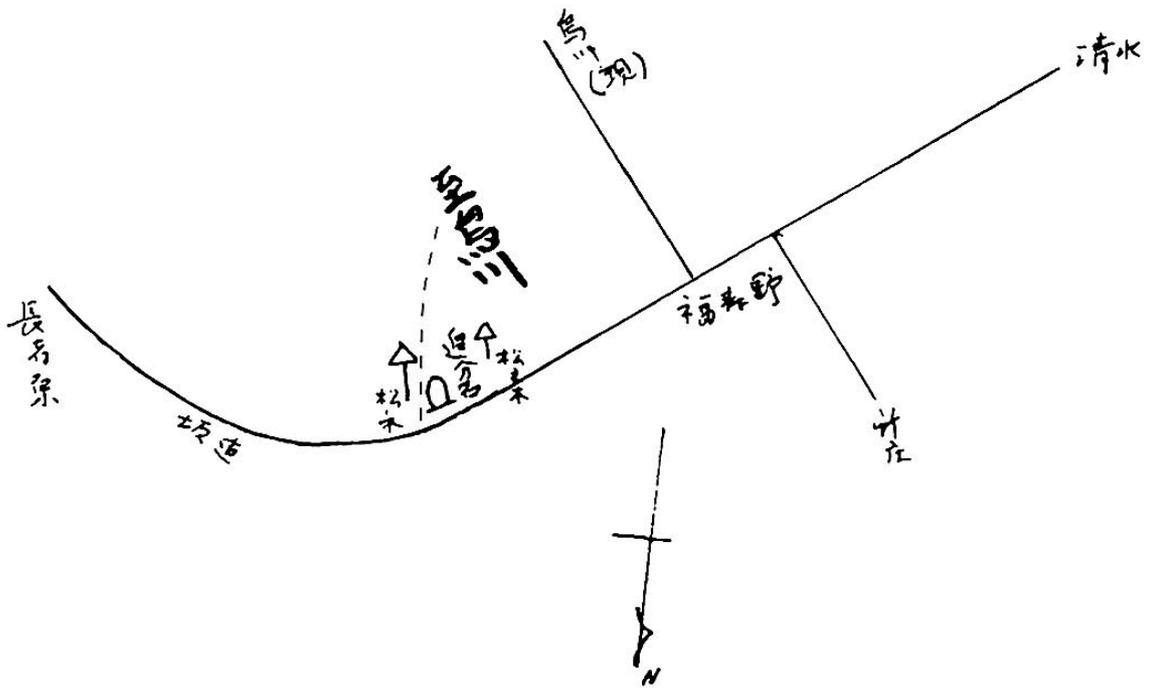
福寿野の追分石

【所在地】 福寿野

福寿野の追分石は再三移されたが、現在は最初にあった所に近い福寿野東方入り口の松の木の下に建っている。この地点は舟形清水街道と烏川新庄街道の交叉するところであった。碑文は「向左 湯殿山肘折口 いまがみゆもと 道」と陰刻されているが、風化が進み解読に苦勞する。湯殿山は出羽三山の総奥の院であって、大日如来を本地仏としている。古来女人禁制の山で、男子15歳になれば先達の案内で出羽三山参りをした。登山口は八方七口といわれ、最上郡に肘折口と戸沢村角川口の2カ所しかない。この追分石は道者の道しるべと云ってよい。烏川の阿吽院（片見家）は湯殿山肘折口の別当の地位にあって、道者の先達をつとめた。ちなみに宝永6年（1709）6月14日～6月27日迄の月山参詣者は、阿吽院の先達による肘折口登山者が12,015人であるが、上方から舟運によって肘折口より参詣する道者も多かったと思われる。この道しるべを利用した道者も多かったに違いない。また、角川口は36,305人に達したと『増訂最上郡史』は記している。この追分石は当時を知る貴重な資料である。



平成 4 年 12 月 6 日 撮影

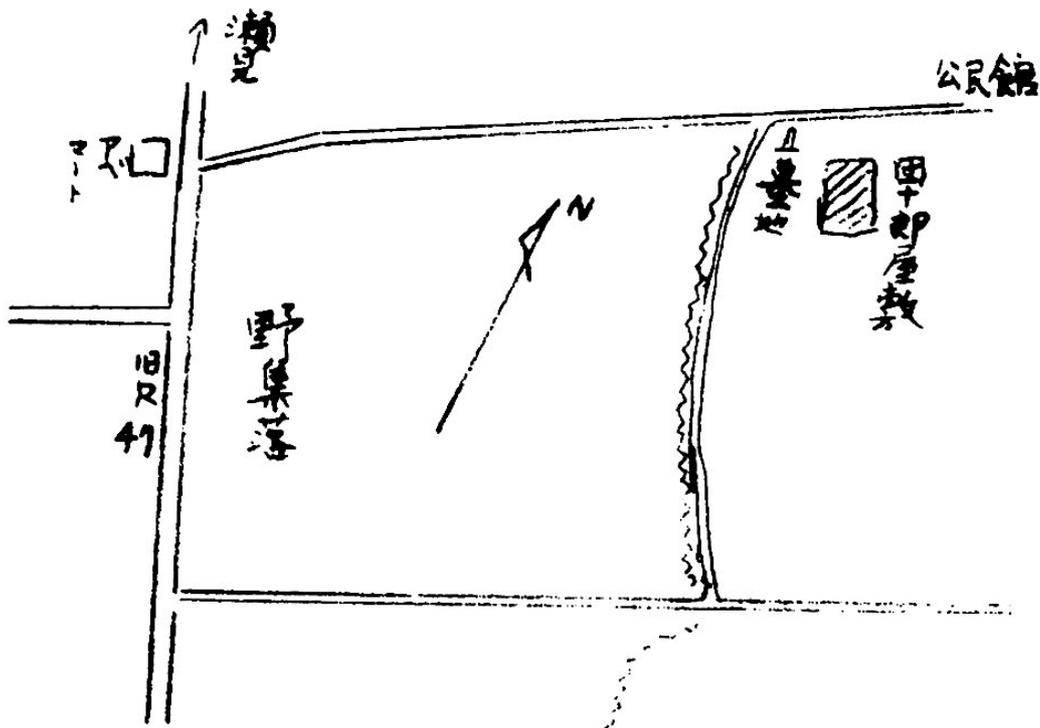


伝説 団十郎屋敷

【所在地】 野

江戸時代の名優市川団十郎は、野村の権四郎という人の子として生まれたといい、小さい頃、江戸にのぼって市川団十郎と名乗ったと伝えられる。その屋敷跡は、写真の墓石の右側の空屋敷の部分と伝えられている。(野在住 伊藤吉彦氏の案内による)

〔参考文献『ふるさとの歴史散歩』〕





平成5年5月撮影

瀬見街道の集落跡

【所在地】 長尾裏手山（現、射撃場敷地内）

右写真の下部に平坦な部分がある。集落跡という。長尾・八鍬富美男氏によれば、大正末期まで5軒ぐらいの集落があったという。当初は籠^{カゴ}かつぎ道の瀬見新庄間の道であったが、その後瀬見佐藤十太夫という人が馬車道に改修した。それ故、長沢衆はこの街道を十太夫道と、よんでいた。この道は物資輸送の重要路線であった。その頃には茶屋も開業され、往来はにぎやかであったという。集落の人たちは茶屋、炭焼き、竹細工、山菜採り、養蚕等の仕事で生計を立てていたという。また、墓地もあったというから長期にわたって生活していたと思われる。大正6年、陸羽東線の開通によりこの道もさびれ、大正末期頃まで居住していた人々も他に移住した。残る1軒は昭和初期までであったが、老婆1人となり、彼女が生家の休場に帰り、廃村になったという。



平成7年4月28日撮影 位置図は瀬見街道の頁参照

瀬見街道 峠の茶屋跡

【所在地】 長尾裏手山（現、射撃場敷地内）

写真中央部に2人の人物が小さく見える。その手前僅かに笹の葉の生えているところが茶屋跡である。以前は籠かつぎ道であったが、馬車道に改修されてから開業したものであろうと、長尾の八鍬氏は云っている。陸羽東線開通により、この街道はさびれ、廃止されたという。その後野村の人たちが、この辺一帯で牧場経営した際に茶屋跡も破壊されてしまったという。茶屋跡の清水だけが当時の面影をとどめている。

〔「峠の茶屋」について大場直義氏の『ふるさと聞き書』（1986）がある（未発表）〕

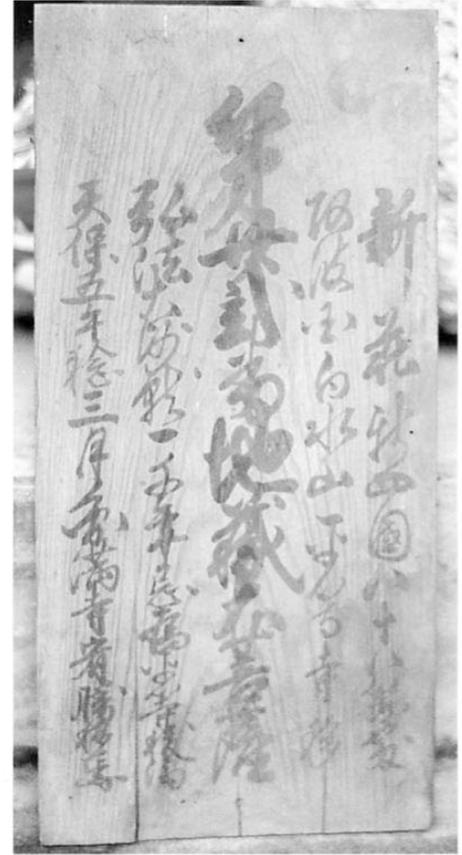


手前瀬見街道より峠の茶屋跡を望む。左は斜面になっていて右は沢である。 平成7年4月28日撮影
位置図は瀬見街道の頁参照

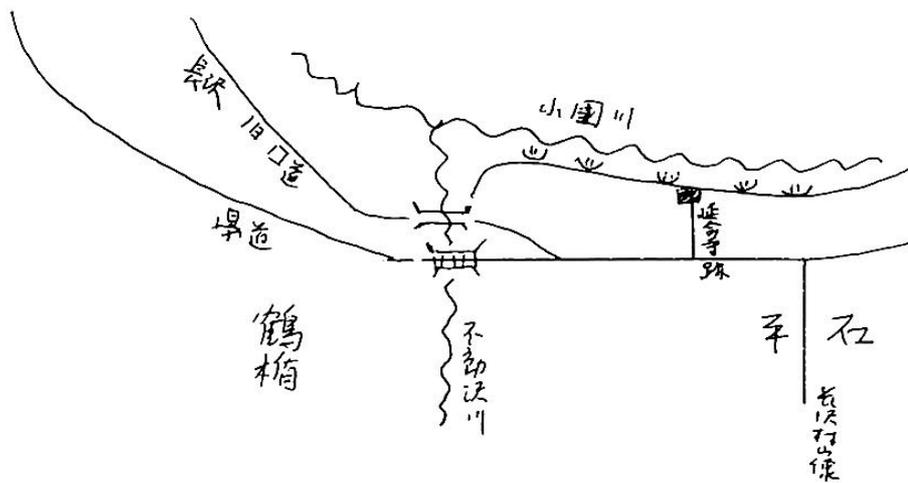
延命寺跡

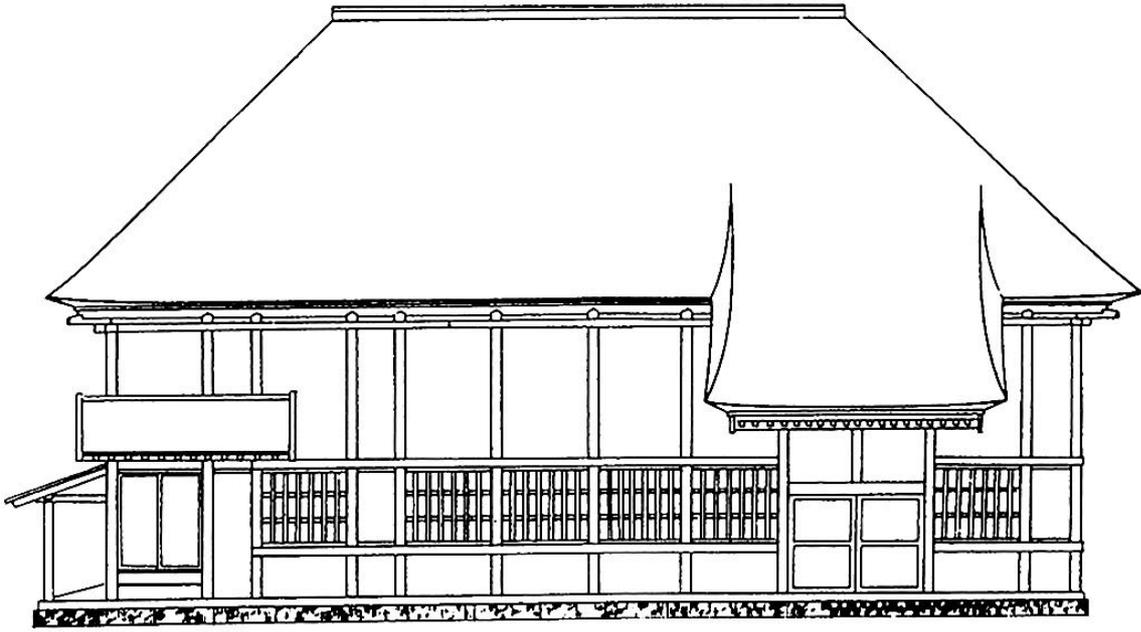
【所在地】 長沢（平石）

平石に長尾山延命寺という^{キトツ}祈祷寺があった。本尊は地蔵菩薩。開基は不明であるが、新庄市小月野にある真言宗円満寺の末寺であるといわれる。しかし、異説によれば長尾にあったものを長沢楯主長沢仁兵衛尉が信仰し、ここに移したともいう。長尾裏手の^{ヘイタン}平坦部の北西隅に延命寺跡と伝えられているところがある。平石地蔵堂に納められた木札に「新庄新四國八十八箇處、阿波國平等寺移、第廿貳番地蔵大菩薩、弘法大師就一千忌為被満、天保五年稔三月円満寺宥勝移焉」と記されている。縁日は旧6月24日で、^{スコフ}頗る賑やかに行われたという。



平成 5 年 6 月 28 日 撮影





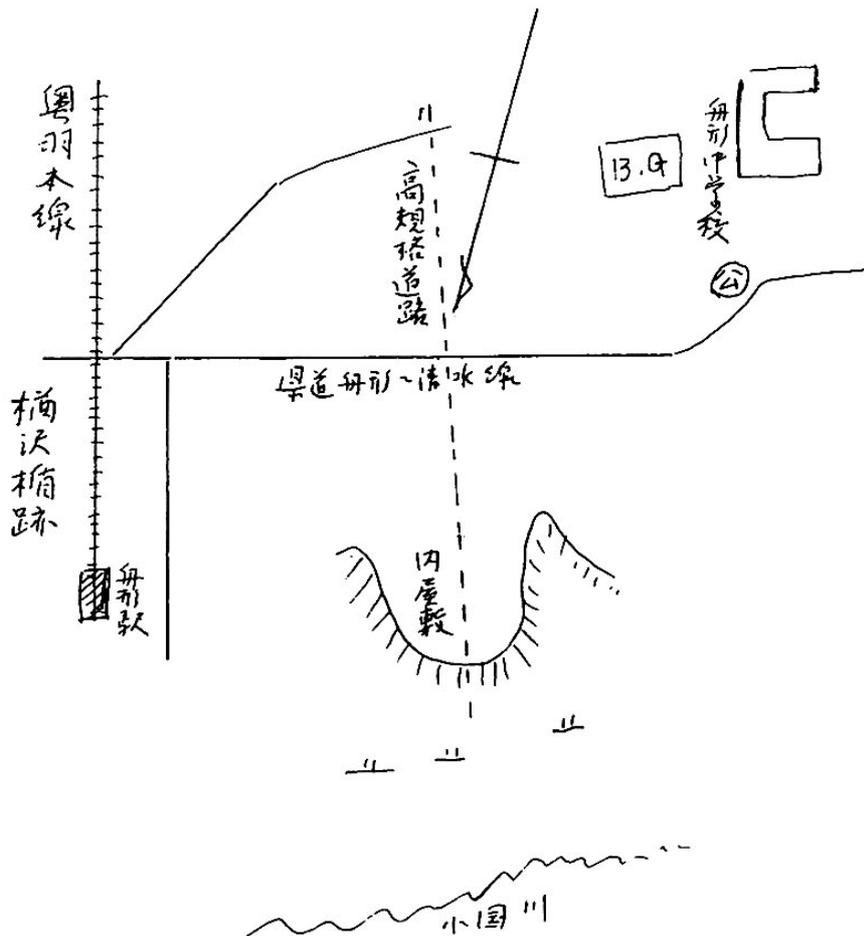
明治初年、代官屋敷を借り受けて開放した舟形尋常小学校建物図



内屋敷

【所在地】 西堀（西ノ前）

右の写真は対岸沖の原より撮ったものである。この地は檜沢楯郭^{ナラサワ}に位置し、昔から内屋敷跡と伝えられている。張り出し段丘に一直線の空堀跡と考えられる両端V字型の凹地がある。しかし、この外、土塁等の遺構は見当たらない。内屋敷に高規格道路が作られることになり、県文化財課が埋蔵文化財の有無を調査した。その際若干の縄文土器破片が見つかった。これにより、平成4年6月8日から10月6日まで、大がかりな発掘が行われ、膨大な土器が収集された。この中に全国でも珍しい土偶があった。復元の高さ45cmのすらりとした姿の土偶で、日本一の八頭身美人土偶と名付けられ、新聞一面記事に報道された。縄文中期（4500年前）の土偶である。県で制作した実物大のレプリカ3体の内1体は町歴史民俗資料館に展示されている。





内屋敷

沖ノ原より内屋敷を望む
写真中央部の張出し河岸段丘が内屋敷である
平成3年3月19日撮影



高規格道路敷地となるため、平成5年6月から10月まで発掘調査が行われた

長者屋敷跡の土台石

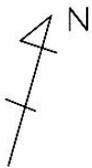
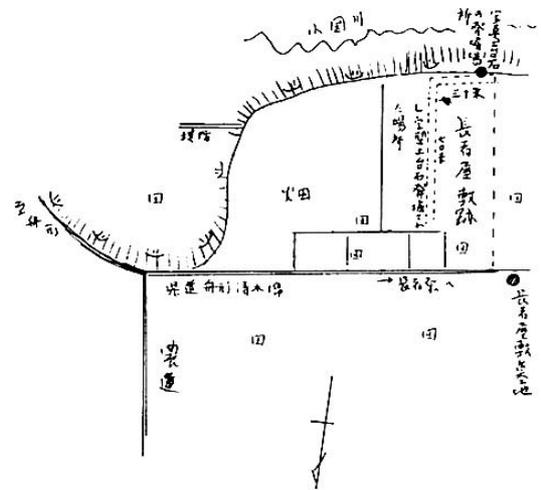
【所在地】 長者原字原田

右写真の土中の石は、昔の家屋の土台石と考えられる。この石の下に栗石が敷かれていた。この付近一帯は昔から長者屋敷と伝えられているところである。昭和36年、この地の中鉢氏所有地を開田したところ、地下に9尺程の幅で南に70m、その地点より西に約30mにの長さの場所に大きな石が6尺間隔で両側にL字型に並んでいたという。右写真の石は、西端に新たに見つかった石である。この西側は所有者が違うのでわからないが、このような遺構があったと思われる。屋敷跡と伝えられる位置の南東崖に清水があったというが、崖崩れで今はない。また、「羽陽仙北伝記」によれば、南北朝時代にこの地に北畠中納言^{アキハ}顕家の二男 北畠中将教忠より教行迄5代にわたって居住したと云われる。一方、顕家の弟顕信は、正平2年(1347)、東田川郡立谷沢に居城を構え、南朝の支えとなった。しかし長者屋敷住人は5代を以て、永享9年(1437)4月11日最上義定に攻め亡されたと記されている。^ナ因みに県道山手側に長者墓地と伝えられる盛土があったという。開田によって破壊されてしまったが、開田の際、石地蔵と五輪塔「火輪」の部分と思われるものが出土した。これを近年になって埋めたという。地蔵は30cm前後の大きさで完全なものであったが、心ない者の仕業により、頭部を壊してしまった。現在、相馬家の墓地に立てられてある。

〔『舟形町史』『羽陽仙北伝記』第六集『立川町の歴史と文化』〕



土地所有主に何か出土したか知らせて欲しいといっていたので、この土台石を発掘出来たのである。
昭和55年 5月19日撮影



昭和62年、長者屋敷跡を対岸高倉山より撮影する
○印は土台石出土場所
△印は数個の土盛りがあり、墓地跡と伝えられ、別掲石地蔵並びに石造物破片出土した場所

沢口集落跡

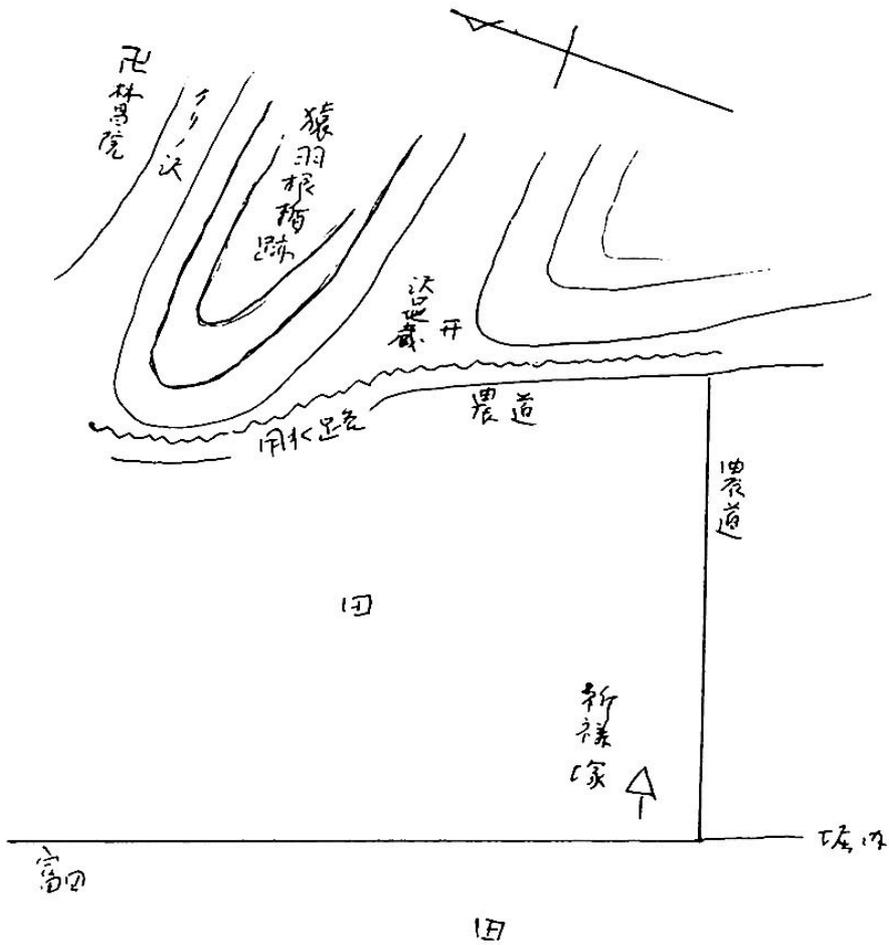
【所在地】 富田

沢口は猿羽根楯南の楯下の沢をいう。昔は10数戸の村落があったというが、現在は開田されていてその面影はない。この村落は、天保4巳年（1833）の飢饉の折全滅したといわれる。地藏堂だけが建っている。沢口地藏菩薩は、新庄地廻り地藏24ヶ所の札所5番であった。且つては猿羽根山地蔵堂の奥の院と称し、子育て地藏として信仰されたという。現在は地藏菩薩が盗難の危険から富田・早坂氏が大切に保管している（『ふるさと歴史散歩』）。

沢口村は延享3年（1746）の絵図面（致道博物館所蔵）にも記載されているから古い集落であろう。地藏尊については、沢口地藏尊の項に書いてあるので参照されたい。



平成5年4月撮影



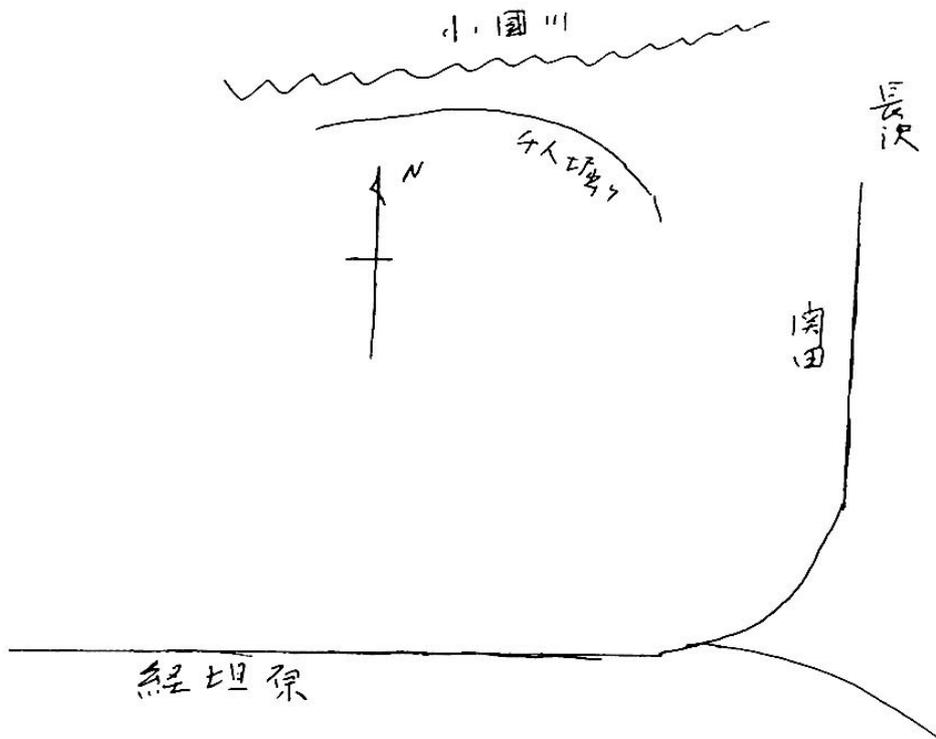
千人掘り

【所在地】 経壇原

確かな文献がないので着工及び完成年月は不詳である。千人掘りの名は、用水工事人夫1000人を要したことに起源するといわれる。この用水工事がどんなに難工事だったか窺える。『町史資料集』No.2によれば、戸沢藩は小国川左岸から取水による水田の増反を計画し、関田からの流れを変えて取水口を延命地藏下付近とし、不動沢川を渡し、現在の大堰より関田を通水し、経壇原の川辺を迂回しようとしたが、土質が脆く失敗した。その時百姓喜右エ門（星川芳太郎先祖）の進言により別方法によって施工されたが、これは掘削に人夫1000人を要した難工事だったが、ようやく通水に成功したという。喜右エ門は、その褒賞として西ノ前地区400疇を賜ったという。当時の人たちは、この堰を殿堰といていたが、その後御堰と呼ぶようになった。現在千鳥袋、下野田、舟形の水田を潤し、更に平沢川を懸樋によって西ノ前まで通水している（『舟形町史』昭和34年7月『町報』）。



この千人堀も現在崖崩れによって使用していない。ヒューム管を埋設して通水している。平成5年4月撮影



瀬見街道（舟形廻り）

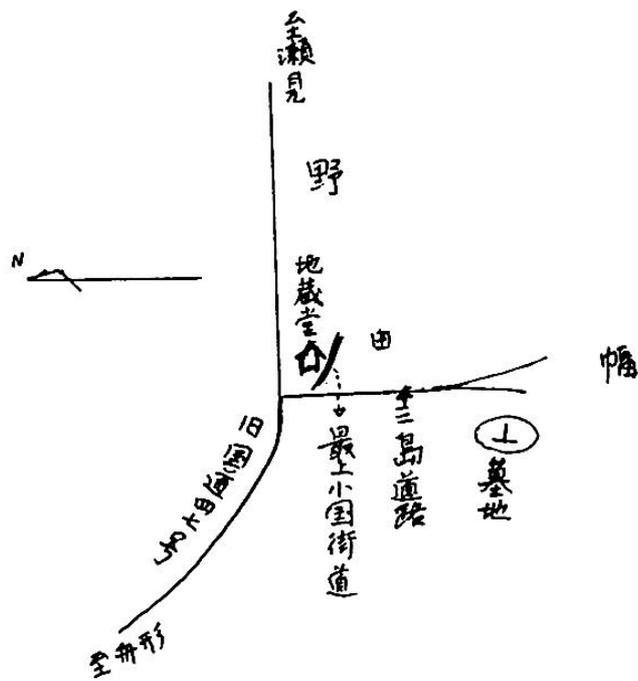
【所在地】 野

地藏堂の前に古道の瀬見街道の跡が残っている。写真手前は明治10～13年に開通した三島道路である。側に旧国道47号が通っている。この街道は、記録によれば奥州街道を吉岡宿で分かれ、中新田－岩出山宿を通り、^{シトマエ}尿前の関を経て出羽境田に至る道で「中山越出羽街道」と呼ばれたという。山形県の『歴史の道調査報告書』は最上小国街道としている。この道は、酒田から最上川の舟運によって清水河岸に陸上げされた荷が舟形を經由して仙台方面に運ばれた道である（『東北の街道』）。また、『最上町史』上巻によれば、小国郷と城下町新庄と結ぶ道は舟形廻り、新庄峠越、亀割峠越、内山廻りの4道であったが、このうち舟形廻り（瀬見街道）は公的な交通路とされていたという。しかし、舟形廻りは距離的に遠廻りになるので、常には他の道が利用され、冬期間だけこの道が利用されたという。



川流れ地蔵と祀っている祠堂である。お堂手前の雪のある部分が瀬見街道の一部である。

平成11年3月18日撮影



カゴ 籠かつぎ道 (旧瀬見街道)

【所在地】 長尾裏手山

右頁上写真の人が立っている箇所の右側、山を削り取った部分が昔の籠かつぎ道である。道幅は1間もあろうか、ほんの一部分残っているに過ぎない。幸いに長尾の八鍬氏の案内を得て、この道路の存在を知ることが出来た。この道は瀬見～新庄休場へ通じる道であった。長尾熊野堂の裏の道がこの籠かつぎ道に通じる。また、この道は小国川対岸に中世の遺構フン楯跡があることから考え、既にこの頃からあったものと思われる。

位置図は、瀬見街道の頁参照



籠かつぎ道の上に改修道路がある。改修の際旧道に沿って新道開削したため旧道が破壊されたと八鍬氏は云っている。



写真中段より下に判然としないが籠かつぎ道がある。山の斜面を開削し、路肩に草が生えている。平成7年4月28日撮影



平成7年4月28日撮影

車が通れる道幅である

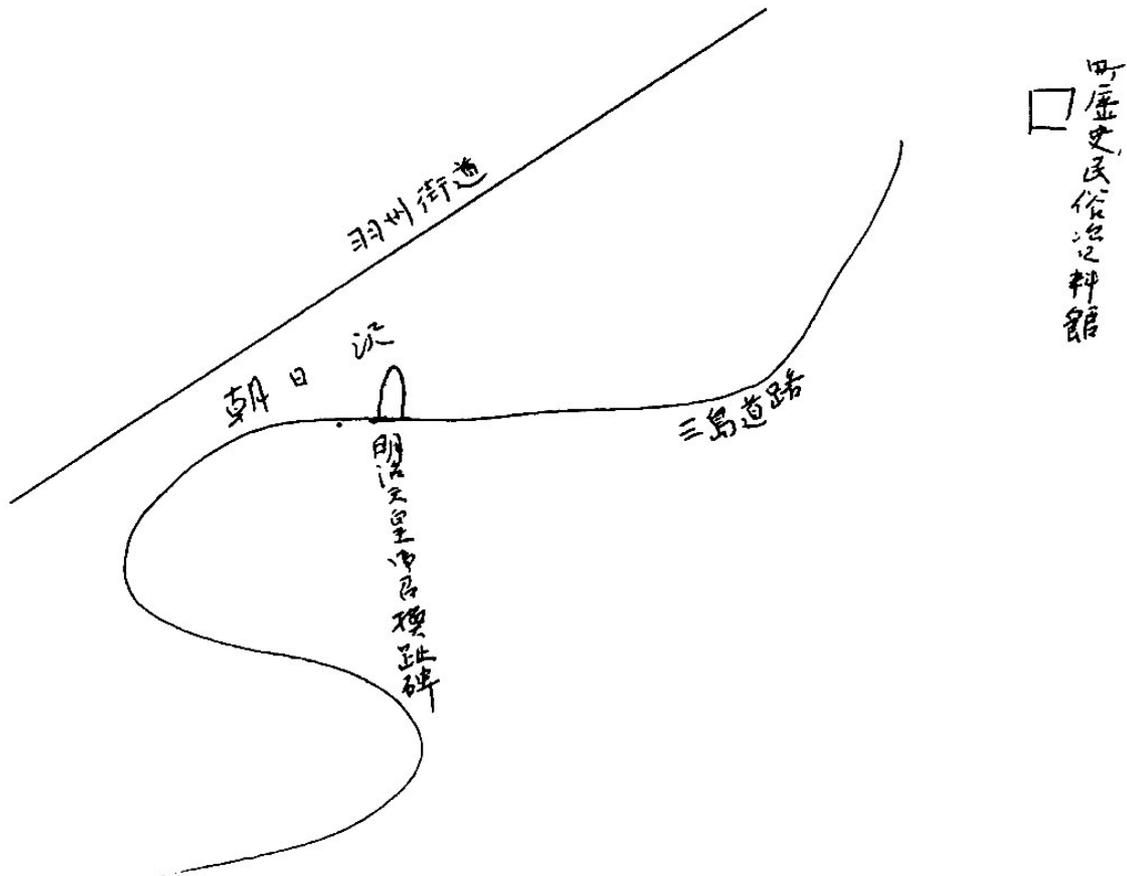


改修後の道路、人が見える所に石垣積みが見える。若葉の立木はブナの木である。

朝日沢羽州街道

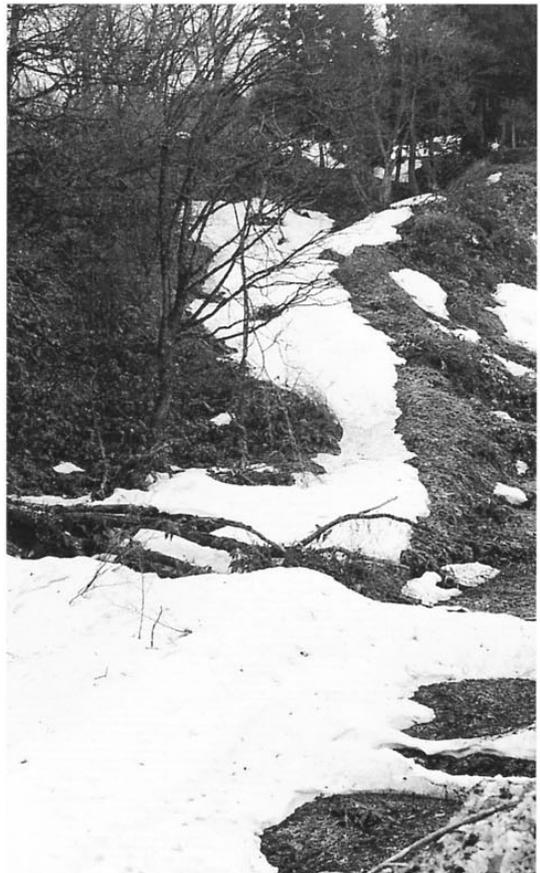
【所在地】 猿羽根山

明治天皇御召換所跡の碑東方に朝日沢と云われる場所がある。この地の急坂を開削して羽州街道が作られている。写真（上）中央部に残雪が左右一直線に写っている部分が街道跡である。さすがに名だたる急坂である。この街道を登りつめた所に一里塚が左右に盛土されて築かれている。1個は手入れもなく、盛土中央に朽ち果てた松根がある。写真手前に明治天皇行幸のため鬼県令と呼ばれた三島通庸の開削した三島道路がある。





明治天皇御召換所跡の碑より街道跡を望む 平成7年3月29日撮影



急坂であることが残雪によって分る

清 水 街 道

【所在地】 福寿野東坂下

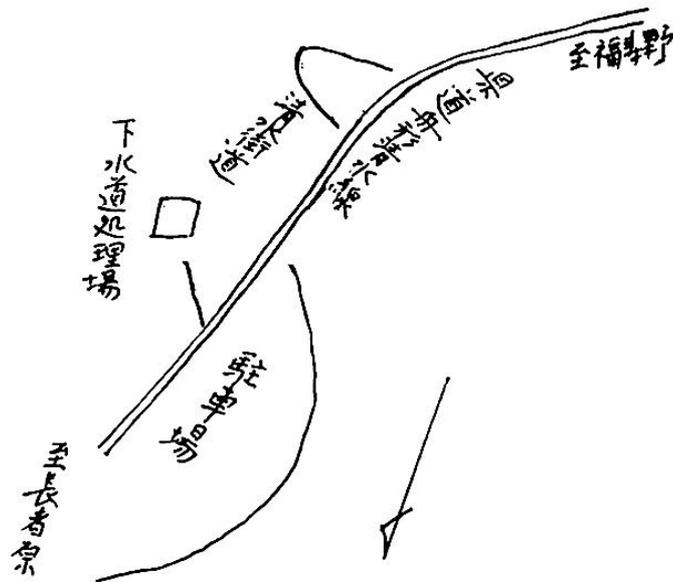
当町に昔、清水街道があった。清水（大蔵村）では舟形街道とっている。この道は、羽州街道紫山（四ツ屋）から沖ノ原に上り、トモの坂を下り、長者原・福寿野を経て清水に至る道である。また、この道は、庄内酒井侯などの参勤交代の道でもあった。

日本海側の庄内・本荘・矢島・亀田・松嶺の諸藩が、最上川をさかのぼって清水河岸に上陸し、この街道を通り、羽州街道に出て江戸へ向かった。また、公用の幕府役人や将軍の代りに派遣される巡検使も、尾花沢・名木沢を経て、猿羽根山を越えて舟形に至り、ここから清水街道を利用した。また、酒田から最上川をさかのぼってきた、にしん・干物等が、清水に陸上げされ、舟形・野の川流れ地蔵堂前の小国街道を通り、仙台方面へも運ばれて行く道でもあった。

現在、清水街道として残っているのは、福寿野坂下、県道左手の一部と、沖ノ原戊辰戦争死者の墓の前の坂道だけである。



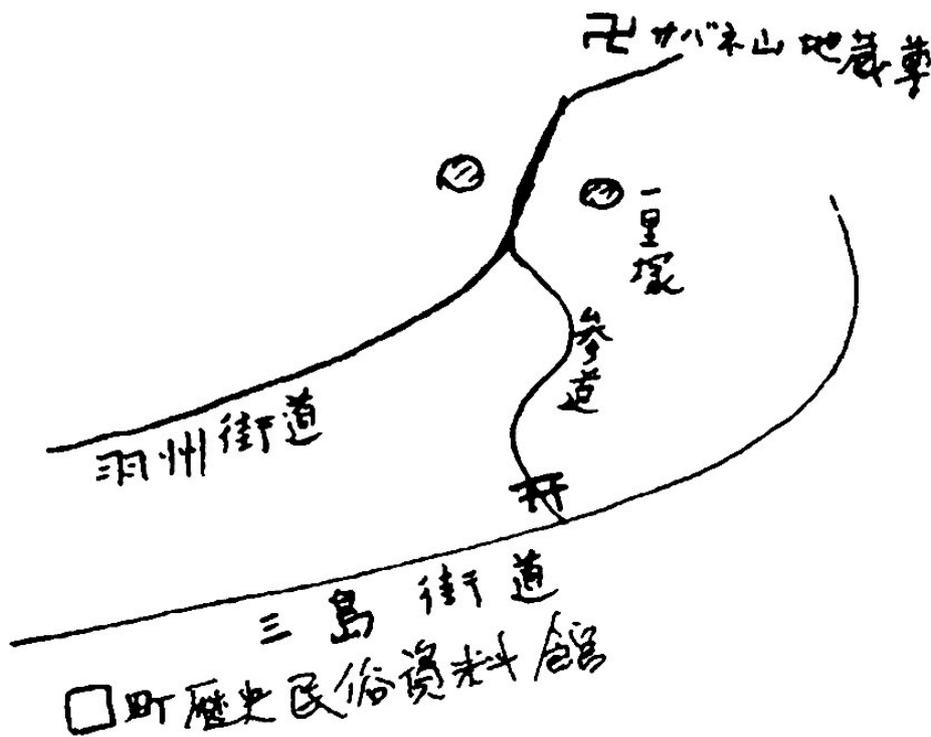
点線を施した部分は、道の中心部である。右上のガードレールは県道舟形-清水線
平成11年3月30日撮影



猿羽根山の一里塚

【所在地】 猿羽根山

当町に一里塚は2カ所ある。猿羽根峠の頂上近くと紫山地内（道路拡幅のため1個消滅）の2カ所である。羽州街道は青森から秋田・新庄・山形・上ノ山を経て七ヶ宿に至る道である。参勤交代のため、当地内の羽州街道を通行する大名は、北から津軽氏、佐竹氏、岩城氏、六郷氏、生駒氏、酒井氏、戸沢氏、保科氏、土岐氏の諸侯であった。羽州街道は慶長以前は^{ヤツナイ}役内を通っていたが、その後、雄勝峠を越え、及位、院内を通る道筋になった。寛永13年（1636）頃、名木沢、芦沢間が整備されたといわれる。また、天童付近から一直線の街道が完成したのは慶長年間と伝えられ、秋田街道とか佐竹道路と呼ばれたという。『みちのく街道史』によれば、元和8年（1622）6月、秋田藩は桑折宿から七ヶ宿街道を通り、金山峠を越えて山形城下に至るまでの羽州街道の道程を測定している。羽州街道の宿駅は58次を数え、このうち山形県内には17次、最上郡内は、舟形・新庄・金山の3次であった。





平成 5 年 11 月 25 日 撮影



左右の盛土が一里塚である 平成 7 年 3 月 29 日



盛土上部に枯れた松の根が残っている

紫 山 の 一 里 塚

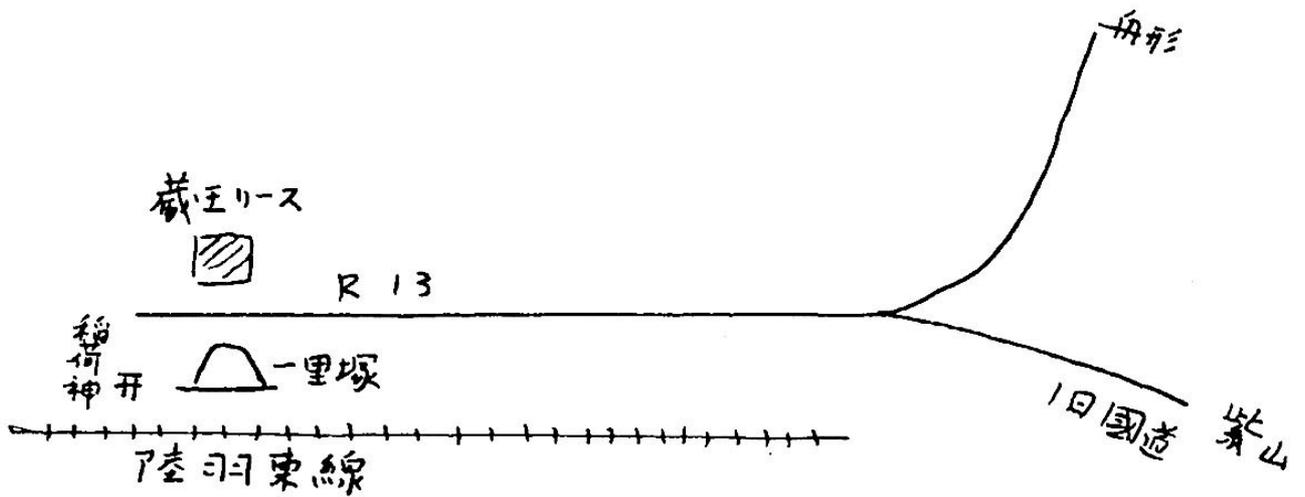
【所在地】 紫山

羽州街道が宿駅を備えた街道として整備されるのは江戸時代初期である。

江戸幕府は、慶長9年（1604）諸道に一里塚を築くよう命じた。「当代記」に「…一里塚五間四方也。関東奥州迄右の通りナリ云々」とある。郷土研究家大沢豊年氏は、鳥越一里塚より測り、紫山にある土盛り2つ（現在国道拡幅により破壊）を一里塚と断定した。更に猿羽根山の土盛り2ヶ所も一里塚であることがわかった。現在、紫山と猿羽根山の一里塚には町で建てた石柱がある。



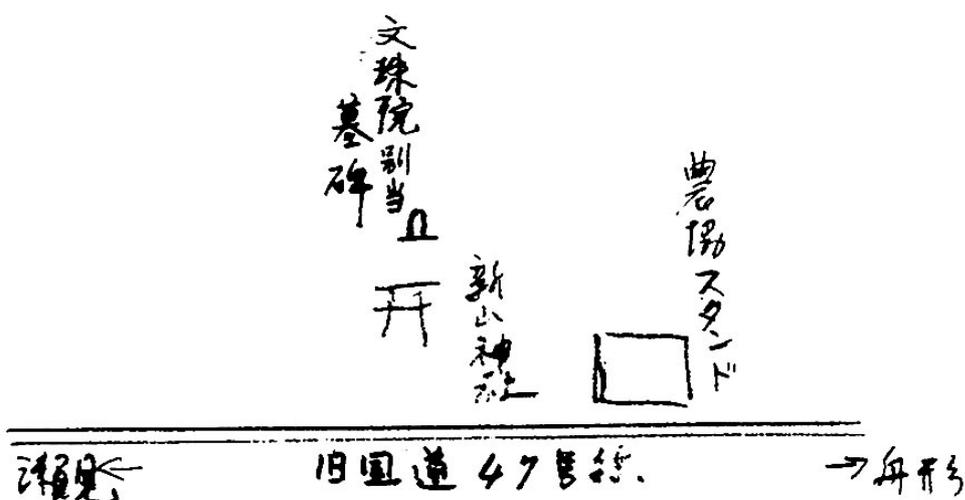
盛土の上部に腐蝕した松の根がある 平成6年4月29日撮影



文殊院別当墓碑

【所在地】 長沢

長沢新山神社の裏手に数基の石碑が建っている。その一基に「権大僧都一僧祇震盛、帰郷早著禪男、安永二癸巳（1773）三月廿一日」とある。また、碑の上部に梵字大日如来（アーソク）が刻まれている。新山権現別当文珠院^{モンジュイン}は、葉山系修験と云われているが、葉山は古い時代出羽三山の1つであった。月山、羽黒山、葉山そして三山総奥ノ院として湯殿山が祀られていた。いつの時代からか葉山は分離されてしまった。『町報』昭和33年3月号によれば、新山権現は、以前権現堂^{カンジュウ}といい、月山、羽黒の両所を勧請したもので、文珠院はその別当であったと記されている。葉山の本地仏は薬師如来であるから梵字は薬師如来のベイと考えられるが、ここには胎藏界の大日如来の梵字が刻まれている。月山、羽黒山の勧請が事実とすれば、大日如来の梵字を用いても不思議でない。従って文珠院は、以前は羽黒派修験であったとも考えられる。





平成5年5月5日撮影

戸澤藩 ^{ボ シン} 戊辰戦死者の墓

【所在地】 舟形（定泉寺）

当地における戊辰戦争は、慶応4年（1868）7月13日早朝より小国川原を戦場として夕暮れまで激戦が続いたという。戊辰戦争は、15代将軍徳川慶喜が江戸城を無血開城し、恭順の姿勢をしめした。しかし、薩摩・長州の諸藩は、倒幕運動の延長として、会津・庄内を「朝敵」と仕立てて攻めのぼり、東北地方全域を巻き込んだ戦いである。

当時、会津藩は京都守護職として、一方庄内藩は江戸市中警備としての任に当たり、治安を守っていた。そのためにおこった池田屋事件、蛤御門の変や、薩摩藩邸焼き討ち事件などにより、薩・長の怨嗟の的になっていたのである。

奥羽諸藩は、この戦いを、「薩・長の私怨をはらすもの」と受け止め、奥羽列藩同盟を結び、会津・庄内を助けるべく、官軍方（薩・長軍）と戦った。戦火は東北地方全域に広がった。

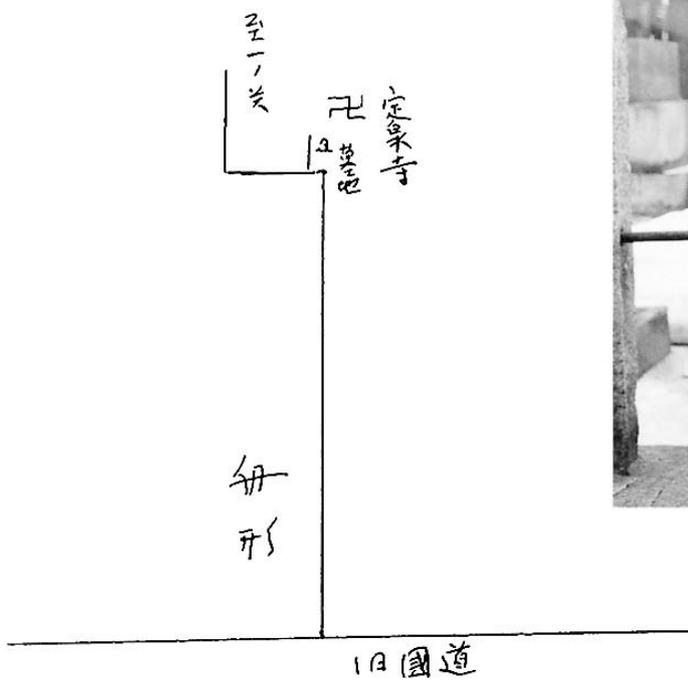
新庄藩も、はじめは同盟軍として戦っていたが、その後の状況の変化によって、同盟軍より離脱し、官軍方に加わり、庄内軍にむかって逆襲した。これに対し、庄内軍の反撃は早く、白河方面に援軍として出発させていた一番大隊（約1,000名）二番大隊（約950名）を途中より、呼びもどし、小国川をはさんで対陣、この激戦となったのである（戊辰戦争とうほく紀行参照）。

この河畔に「いろはや茶屋」があったが、庄内軍の将酒井吉之丞はここに陣を敷いて、茶屋の屋根にのぼって全軍を指揮したという。この激戦の最中、庄内軍の酒井治部右衛門と高橋金蔵の挺身斬込隊が長沢口の小国川の浅瀬を渡って官軍の背後を突いた。そのため官軍は総崩れになり、新庄方面へ退却した。（昭和35年8月号『町報舟形』より）

この激戦での官軍戦死者は、新庄藩は、堀彦右衛門、小屋春五郎、伊藤亀助、斉藤竹蔵、白塚藤吾、河上雅右エ門の6名、長州藩は大野坂次郎1名といわれている。負傷者は、士分では加々尾台次郎、足軽岡田作太郎、佐藤友治、出野孫助、平民では中鉢多吉の5名で、中鉢は櫟坂にて銃弾に当たり、翌25日関屋で死亡した。薩州兵は負傷7人（氏名略）、長州7人の内、岡田兵槌、戸倉音五郎は重傷で、共に湯沢で死んだ。戦死者の堀、小屋、伊藤の3屍体は舟形へ送られ、定泉寺に埋葬された。一方、白塚、河上、斉藤、大野の4人は共に首を刎ねられ、死体は柏木台旧道上り口の所へ埋葬された。その後、伊藤亀助は士分のため定泉寺より移し、白塚と斉藤と一緒に沖の原の墓に埋葬し、交換に河上を舟形の定泉寺に移したと伝えられている（『新庄藩戊辰戦史』）。（戦死者名次頁墓標参照）



平成7年3月29日撮影



長州藩士 大野坂次郎の墓

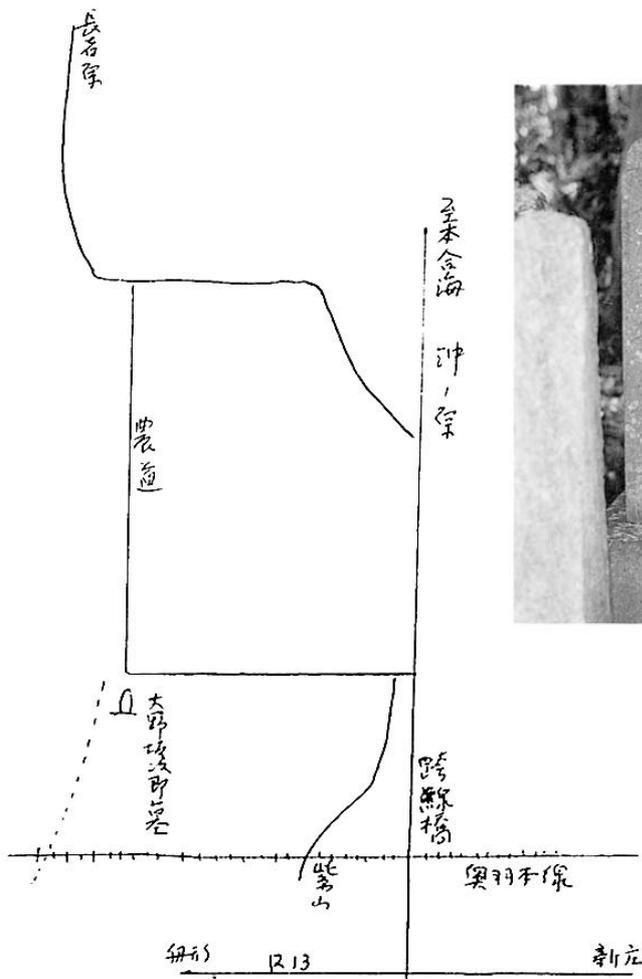
【所在地】 沖の原

旧舟形・清水街道の四ツ屋（紫山）への下り口に墓地がある。この墓は慶応4年7月13日、舟形口合戦で戦死した長州藩士の墓である。石碑右1基には、「官軍長州大野坂次郎俊剛墓」とあり、その左側面に「于時慶応4 戊辰7月13日於羽州最上郡船形戦死行年22歳」とある。左側のもう1基には「白塚藤吾・伊藤亀助・斉藤竹蔵墓」と3名の名前が記されている。明治8年11月に建てられたものである。石灯籠^{イソドロウ}2基は明治17年8月19日に建てられた。今なお清掃され供物等がある。この墓地は、杉林の中にあるので人目に触れることも少なく、墓のあることすら知らぬ人が多いと思われる。

沖の原、長州藩士の墓



平成5年12月1日撮影



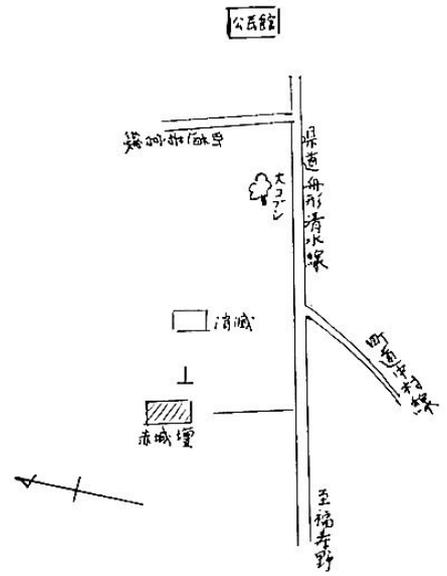
赤 城 壇

【所在地】 長者原

長者原公民館より、福寿野に向かって約100m右手奥まった小高い所に、村共同墓地がある。墓地西側に底辺10m×14m、上縁7.5m×10m、高さ約1m、北側に長い台形の大きな壇がある。伝えによると、この壇は、猿羽根楯主の家臣赤城新左衛門の墓といわれている。壇の北側の畑より古銭が出土するという。また壇の東方に、これより小さいが、高さ約1mの長方形の壇があったが、この壇は、近年になって壊されてしまった。以前、この2つは比翼塚と呼ばれていたという。また、この墓地内に町指定天然記念物大こぶしの木がある。林昌院住職加々美椿嶺氏は、富田には猿羽根家の墓が見あたらないといっているが、当地区の通称キツ坂に猿羽根楯主の墓と伝えられる高春壇（以前盗掘され、また戦後の開田によって破壊され、いまは一部分残っているに過ぎない）がある。



西側より撮る



壇の北側より撮る 平成7年4月6日撮影

八 森 山 の 甕 棺

【所在地】 本堀内

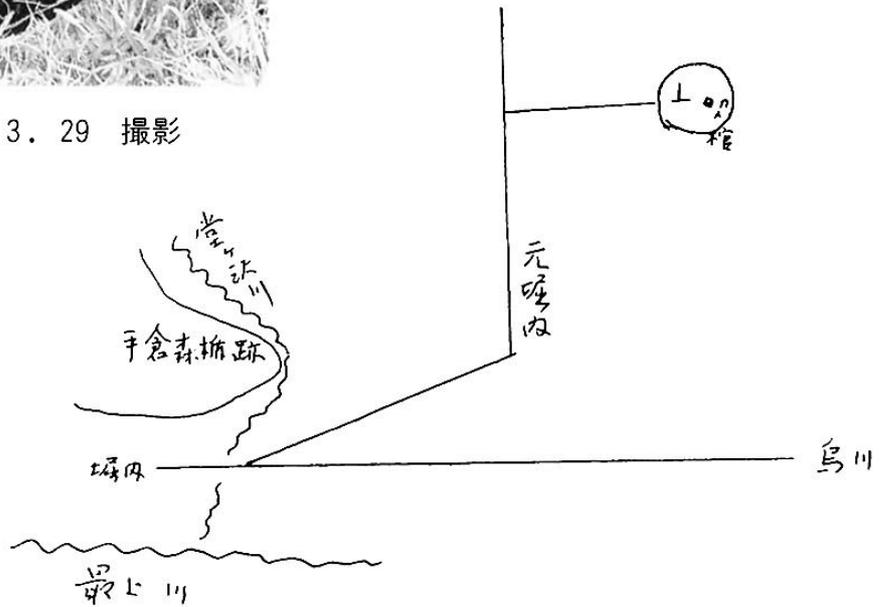
本堀内に八森山と呼んでいる小高い丘がある。現在は墓地になっている。丘の上に以前2個の甕カメが現れたという。死体を葬ホウムった甕棺カメといわれる。堀内の人カメが甕棺とは知らずに掘り起こし、1個自宅に持っていったが、その家では余り悪いことが続くので占ってもらったら、甕棺カメの祟フツりと云われて元の地に戻したと云われる。現在1個しかない。甕棺カメ（右下写真参照）の大きさは外径52cm内径45cm深さ64cm、甕カメの中央部は大きく膨フツらんでいる。北東側の口縁部は欠けている。



平成 5 年 3 月 28 日 撮影



甕棺真上ヨリ H7. 3. 29 撮影



伝説一の関々所

【所在地】 一の関

一の関集落は、「一の関七軒」といわれ、古くから開けた村である。鎌倉幕府を開いた源頼朝は、自身に背いた弟の義経や平氏の残党を探すという理由で、全国に守護と地頭を置くことを朝廷に願い出て許された。追われる身となった義経は、北陸を経て奥州藤原氏のもとに落ちついたが間もなく、3代泰衡^{ヤスヒラ}に攻められ衣川で死亡した。31才であった。室町前期に著された『義経記』によれば、義経一行は、合海の津（現本合海）につき、新田川をさかのぼり、休場を通過して亀割峠を越え、瀬見に出たという。しかし、本町に残る義経伝説では、一行は合海の津を更にさかのぼり、絹縫村（堀内村川向かい、現在廃村）に泊まったという。北の方がここで産衣^{ウツギ}を縫ったことから、絹縫村の名がついたと伝えられている。一行は最上川をさらに登り、折渡の付近で背負っていた笈^{オイ}で川を渡り、ぬれた笈を松の木にかけて干した。それで地名を笈渡（折渡）、松（老松にて枯死、昭和38年伐採）を笈掛けの松と呼ばれるようになったという。その後、義経一行は平沢川添いにさかのぼり、長沢を経て瀬見へぬけるつもりであったが、「一の関」という所があるときいて、関所なら事めんどうと、舟形村で小国川を渡り、大平村から地獄道^{ジゴクミチ}を通過して休場へ出たという。しかし、現在、一の関地内には関所跡らしい跡はどこにも見当たらない。

〔伝説と思われるが、関所という言葉が出たのは義経伝説から出たものと思われ、時代は不明だが最も古い村の一つと思われる。〕



一の関大橋より一の関を望む



若あゆ温泉より一の関を遠望



平成11年7月26日撮影

佐藤充夫氏は自費を以て一の関大橋の袂に写真の碑を建立した。碑文には次の様に記されている。

史跡一の関

南北朝建武の頃（1334年）世は大いに乱れ奥羽の地も戦乱が打ち続き民百姓は塗炭の苦しみを強いられていた。

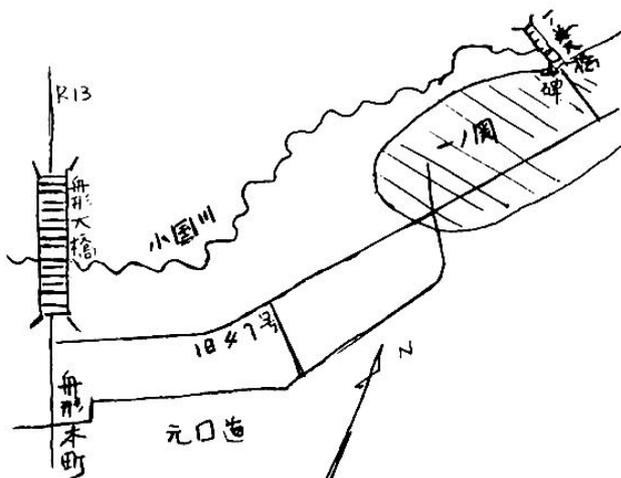
これを案じた時の朝廷は北畠顕家^{アキエ}を鎮守府大將軍として陸奥国多賀城に派遣する。

赴任した顕家は治安維持のため各所に関を設けたが此処一の関にも関所のあったことが代々の古老たちにより言い伝えられている。

確たる文献もなくその真偽の程は定かではないがここに碑を建て往時を偲ぶよすがとするものである。

平成11年5月

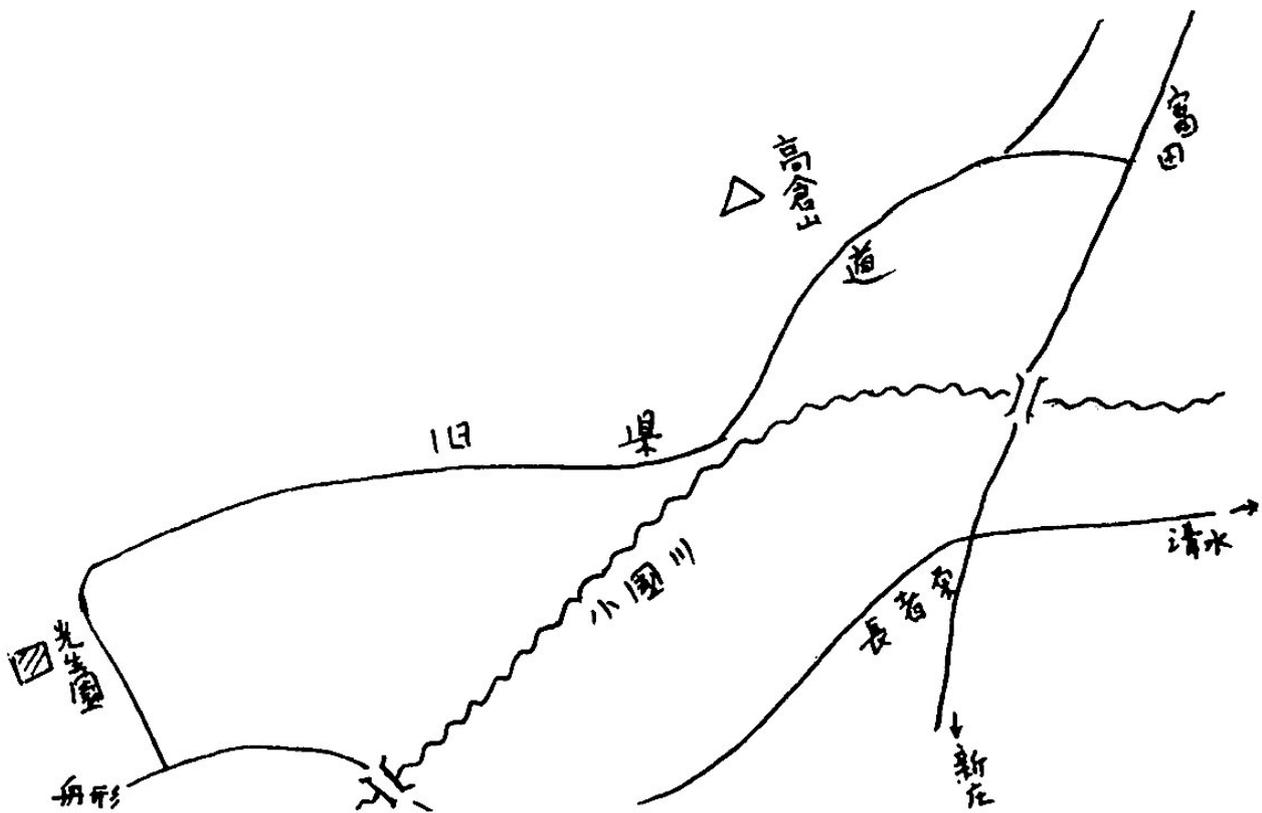
佐藤充夫



高倉山旧県道

【所在地】 富田 高倉山

この道は、堀内・富田方面から舟形へ通じる旧県道で、高倉山中腹を掘削して作った道路である。昔、堀内炭山より産出した亜炭や、高倉炭山の亜炭等は、この道を馬車で運搬された。トラック普及後はトラックで運搬された。その後、富長橋並びに長者原橋（ともに木橋）が完成して、この道は廃道となった。





長者原橋下より旧県道を望む 平成7年4月5日撮影



長者原橋下より望む

川流れ地蔵

【所在地】 野

この地蔵は、矢野時男氏（現在、山形市に移住）の先祖が、昔老ノ沢川の用水路から拾い上げた地蔵という。地蔵と子供はよく戯れたりするが、この地蔵は子どもと戯れるようなことはなかったという。

縁日は、旧暦12月24日

御詠歌「すくわれて いまはいのちを長沢に だいしだいしとおがめ人々」は、地元の地蔵講中の人作り、奉納したものである。



川 流 地 蔵



念佛用の数珠

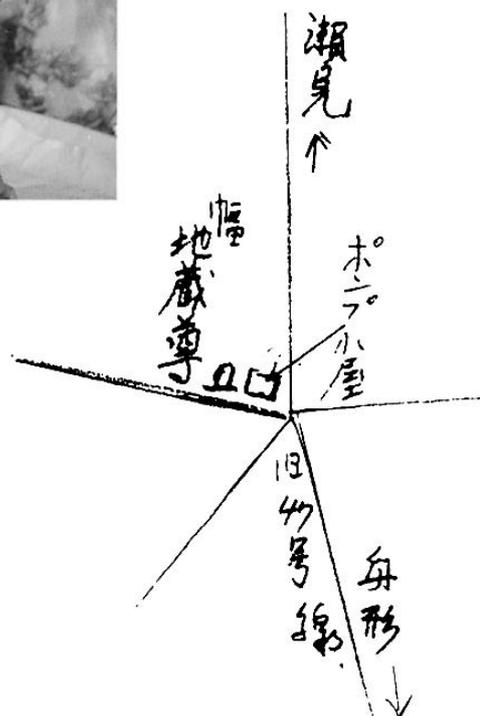
位置図は瀬見街道（舟形廻り）の頁参照

幅の地藏尊

【所在地】 幅

幅のポンプ小屋の側に建っている。国道47号線改修の折、五叉路東角にあったのを現在の所に移転したものである。堂は2 m 15cm四方、屋根はトタン葺、中に高さ38cm横28cmの石の地藏尊が祀られている。

別当伊藤政男氏によると、鉄道工事に来た石屋さんが納めたものという。それ以前は「三五郎地藏」と呼ばれていたという。



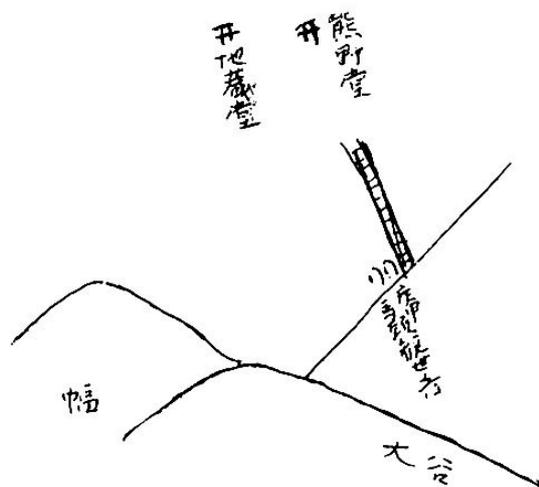
大谷の地藏尊

【所在地】 幅（熊野神社境内地内）

熊野神社北側の地藏堂内に祀られている。高さ約45cm、巾23cm、舟形光背を有し、合掌している石地藏である。天部に地藏の梵字 𑖀 (カ) が陰刻されている。天部に梵字のある地藏尊は当町ではこの尊像只一体である。地藏の語源は「大地、胎で自蔵する」という意味で、地藏十輪経に「よく善根を生ずることを大地の徳の如し」とあるように、大地の徳を擬人化したとされている。地藏菩薩は僧形をとっているのは、衆生にもっとも親しみやすい姿であるからで、もともとは名のとおり菩薩形をしていたのである。



平成7年8月9日撮影



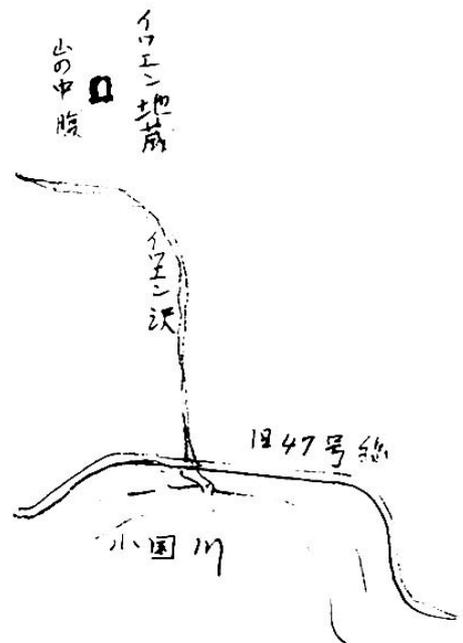
イワエン地蔵

【所在地】 幅（大谷）

イワエ沢^{サカノガ}を遡ると、中程南の山腹に大きな半洞窟がある。誰が祀ったのか、以前ここに地蔵尊が安置されていた。この地蔵を誰云うとなく、岩淵地蔵と呼ばれて有名になった。ところが、この地蔵様は不便なためかお詣りする人もなく、供物もないので、いつのまにか「ケガツ地蔵」と呼ばれるようになった。地蔵様は今ではどこにいったのか見当たらない。洞窟の岩には「諸願成就」などと刻まれている。



昭和42年11月長沢・平石地区の人が発見。
高さ20cm巾12cm。天保6年未年2月吉日。頭部が欠けている。蓮の花に紅色があった。



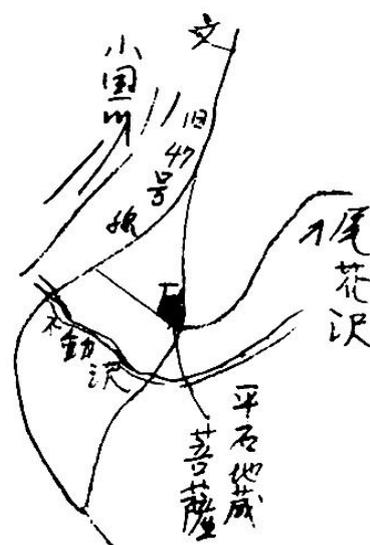
平石の地藏菩薩

【所在地】 長沢（平石）

この地藏は延命寺の山門にあったと伝えている。年代的に古いのではなかろうか。地藏堂内の2体の地藏尊の頭が欠けている。頭が欠けているのは、この例だけでなく、方々に見受けられる。地藏は釈迦入滅以後弥勒菩薩^{ミロクボサツ}の出世まで無仏の56億7千万年の間、釈迦^{シヤカ}の依頼を受けて六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）の衆生を教化する菩薩である。地藏は僧形をとっているのは、衆生に最も親しみやすいからである。わが国に地藏信仰がもたらされたのは奈良時代といわれるが、平安時代に入って貴族社会に信仰された。室町時代からは庶民の間に広がり、江戸時代になって庶民信仰にとり込まれ、種々の形で人々の間に浸透^{シントウ}していった。延命地藏、子安地藏等がある。



平成7年9月8日撮影



大平の地藏尊

【所在地】 大平

大平村南、旧長沢・新庄街道大平入口庚申塔と並んで祀られている。高さ約45cmの木造地藏尊である。お堂は、茅葺き屋根で、昔の堂を覆っているさや堂である。顔面はかなり風化しているが、一見して素朴な感じの地藏尊である。地元の人々の云うには、以前はこの地藏に頭部がなかったが、近年さる人が地藏に頭がないのはおかしいということで、彫刻して頭部をつけたという。

位置図は、大平旧長沢口の庚申塔の頁参照。



平成7年8月9日撮影



一の関の地藏尊

【所在地】 一の関

この地藏尊は以前は等身大木造の座像で、蓮台レンダイに座していたという。この地藏尊は子供が好きという云い伝えから子供達の遊び道具となり、現在はほとんど壊コボされてしまって、首だけが祀られている。額には白毫水晶ビヤクゴウスイショウが嵌め込まれていて柔和な面ざしである。壊されることなく、保存されていたら貴重な文化財だったろうと誠に惜まれる。

位置図は一の関の柝の木の頁参照。



平成7年8月9日撮影

猿羽根山地蔵尊

【所在地】 猿羽根山

猿羽根山地蔵尊は、新庄節に唄われているように、縁結び、安産、延命の神として信仰されてきている。峠に地蔵が祀られた年月は判然としないが、宝暦年間（1751～1763）の『新庄領村鑑』に地蔵猿羽根山と記されている。天保5年（1838）新庄の円満寺が出した、「新庄領新八十八ヶ所巡礼記」に第20番猿羽根地蔵尊とある。猿羽根峠は、新庄藩と尾花沢を分かち峠である。このような境界には外界から侵入する悪霊を防ぐ峠の神が祀られる。いわゆる塞の神である。猿羽根山の地蔵は、まさに、峠の地蔵である。「御巡見使御案内帳」に縁起書がないと記しているが、舟形の大沢与治右エ門家に次のような縁起書が伝えられている。同家には「決して開けてはならない」と云われている古い行李があった。40年ほど前開けてみると地蔵、薬師、観音の仏像と長さ3mほどの巻物が出てきた。それには、次のように記されていた。「昔舟形郷に大沢鞆負定景という人がいた。信心深い人で、地蔵、薬師、観音を同家の氏神として祀っていた。藩境の猿羽根峠は名たる難所で旅人は難儀した。鞆負はこれを深くうれい、自ら信仰していた地蔵、薬師、観音の3仏のうち、地蔵、薬師の2仏を猿羽根山峠に祠を建てて祀ったのがその開基だという。その後、尊像が盗まれたため、村人たちは浄財を寄進して尊像をつくり、これを祀った。宝永6年（1709）5月24日のことである」。当初祀られていた場所は、明治天皇行幸記念碑の東向い（羽州街道）であるという。大沢家では現在も三尊を氏神として奉祀している。以来猿羽根山地蔵は数百年もの間広く信仰されてきた。猿羽根山地蔵尊御詠歌「ふだおさめ めぐりてここに きりくもの ふかきさばねにおがむらいこう」

〔舟形町史1237頁〕

位置図は戸沢藩境界碑の頁参照



平成7年8月29日撮影

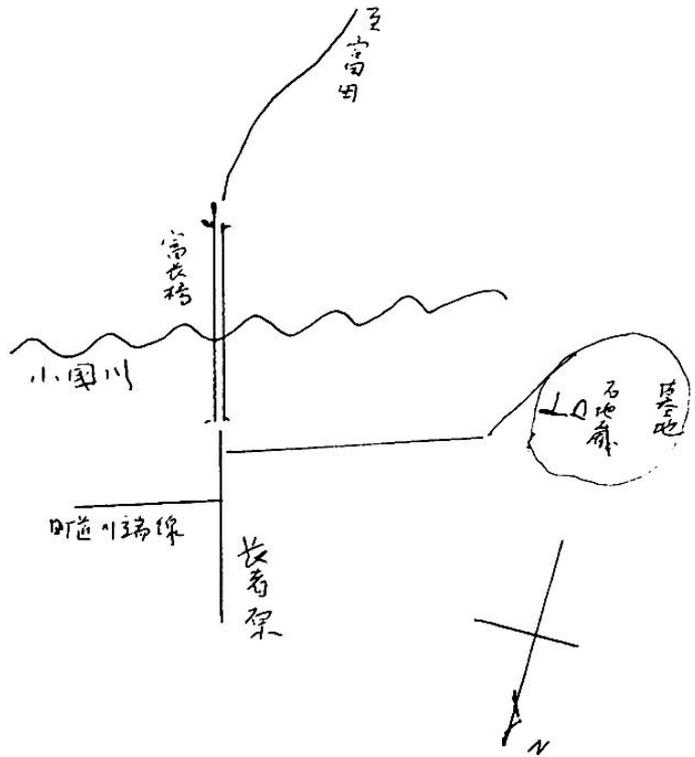
長者原の地藏尊

【所在地】 長者原（長者屋敷出土）

この地藏は長者屋敷の北側の相馬氏所在地を開田した折、出土した石の地藏尊である。出土した当初は、完全な石仏であった。相馬氏の墓地に安置していたが、近年になってから心ない何者かが頭部を破壊してしまった。誠に惜しまれる。これと同時に加工された石灯籠か五輪塔の破片も出土したといわれるが、近年になってから墓穴に埋めてしまったという。これら出土したところは数箇の土盛りがあって、ここは長者の墓地であるからその上に登ったりしないよう、よく注意されたものだと言われている。この地は稲干場とされていたという。開田の折、これら石造物が出土したことは、古老の話は単なる言い伝えではなかったことを物語っているように思われる。重機で開田したものでないから発掘すれば何か出土すると思われる。



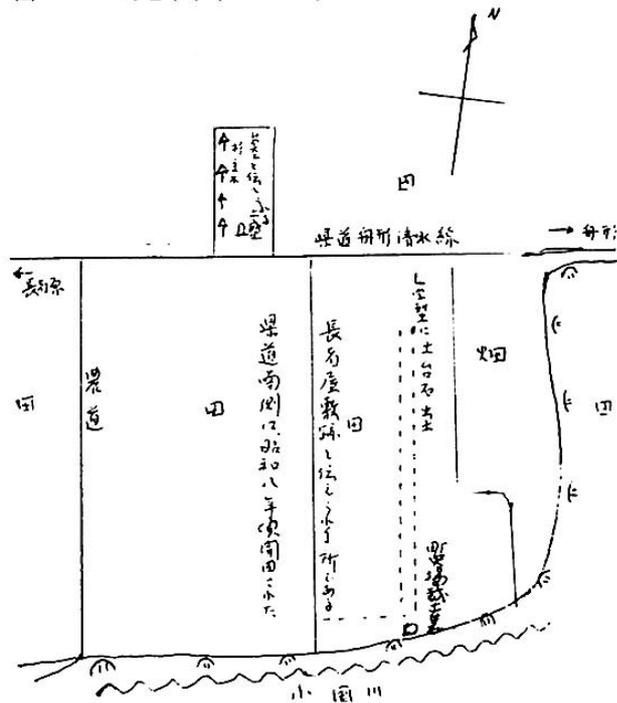
(石地藏のある現在地)



合掌の地藏尊である 昭和55年7月撮影

相馬春治氏は、山三郎からこの地を譲り受け、明治34～35年頃開田。その際、地藏が発掘された。この地に杉立木10本位植えられていて数個の盛土があった。これが長者屋敷墓地であると古老から聞かされていたと故豊岡喜久松、小国清男の両氏がいついた。

(昭和45年頃両氏より聞き書きした見取図である)



七助地藏尊

【所在地】 長者原

木造彫刻の約30cmの大きさである。顔の部分は損耗して判然としない。この地藏を七助地藏と呼んでいる。また、米搗き地藏ともいっている。現在80余才になる一氏にいわれを聞いたところ、真夜中になると、不思議にも米を搗く音が聞こえて来るといふ。この音が聞こえる年は上作で、不作の年は米搗く音がしないと伝えられている。大正末期か昭和の初め頃精米機が導入されたが、それ以前は臼（2斗入）に玄米を入れ、杵でついて白米にしたものである。

また、この地藏に願をかけ、満願の日に、この地藏を抱き上げると、願いが叶うときは軽く持ち上げられるが、そうでない時はとても重く感じられるという伝えもある。以前は若宮神社の裏側に祀られていたが、七助地藏といわれていたことから一氏屋敷に引っ越して祀られたという。



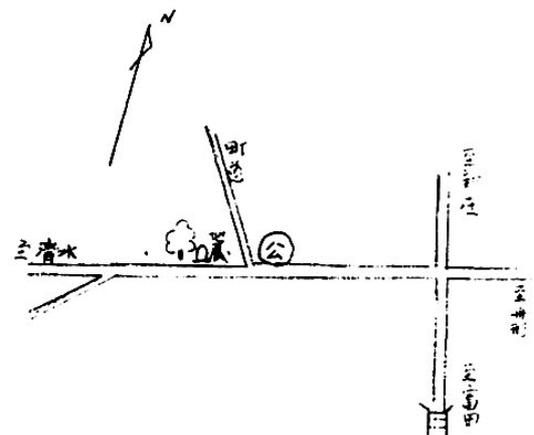
平成7年8月10日撮影



おなご 女子地蔵尊

【所在地】 長者原

昔から女子地蔵と呼ばれ信仰されている。以前は小さな木造の祠ホコラに祀られていたが、近年の、道路拡幅により、現在地に移し、コンクリートの祠にした。そばに樹齢800年ともいわれる大コブシ（町指定）があり、僅か離れた所に猿羽根家々臣赤城新左エ門の墓地と伝えられる壇があることからしても、この地蔵の年代は古いと考えられる。女子地蔵について次のような伝説がある。その昔、門前に1人の老婆が暮らしていた。この老婆は極貧のうちに亡くなった。村人はこの老婆を哀れみ、石地蔵を刻んでこれを祀り供養したものであるという。それ故女子地蔵と呼ぶのであると伝えられている。大コブシの木、並びに女子地蔵の祠のある所は現在墓地の一部となっている。



平成7年8月10日撮影

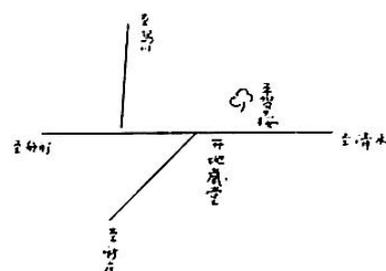
福寿野の地藏尊

【所在地】 福寿野

奥山惣助は、我家の守り本尊である石地藏を村山藤助新田（現、東根市）より福寿野村へ移住する時、最上川を舟で運んできたものであるという。安政元年（1854）のことである。この石地藏は、石の蓮台^{レンダイ}に安置され、左手に蓮^{ハス}の花を持っている。右写真左耳の所が大きくふくらんでいるのが蓮である。地藏がまとっている衣類を見ても分かるように、この地藏は安産の神として近郷近在から厚く信仰されている。この地藏の祭りは4月24日行っている。地藏は釈迦入滅^{シヤカニユウメツ}以後弥勒菩薩^{ミロクボサツ}の出世までの無仏の56億7千万年の間、釈迦の依頼を受けて六道の衆生を教化する菩薩である。我国に地藏信仰がもたらされたのは奈良時代といわれ、平安時代に入って貴族社会で信仰された。室町時代から庶民の間に広がり、江戸時代には、庶民信仰にとり込まれ種々な形となって広まった。延命地藏、子安地藏などである。



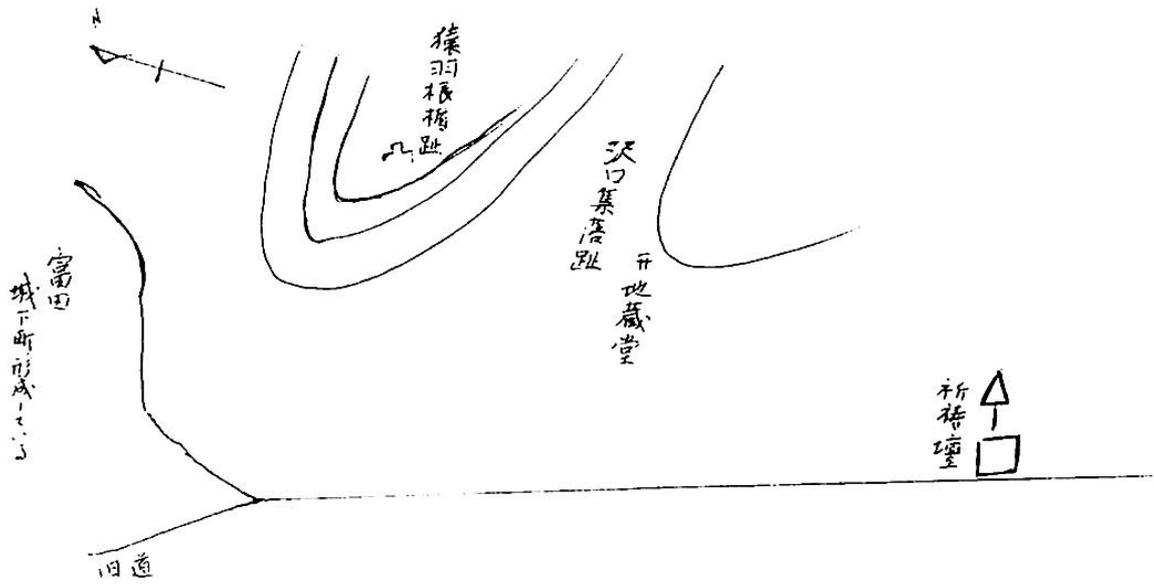
地藏堂 平成7年4月28日撮影



沢口地蔵尊

【所在地】 富田

本地蔵尊について別当早坂光義氏宅を訪問し、聞き取り調査を行った。現在早坂氏宅に安置されている地蔵尊は、高さ約24cmの木造の仏像で、額に白毫ビョクゴウがついていたと思われる穴がある。また、下部が腐食しているが、黒光りのする立派な地蔵尊である。早坂氏の語るところによれば、往時、早坂家は沢口近くにあった。ある日、田を耕していた所、鍬に赤い血がついてきた。驚いて更に掘ってみると、地蔵尊が出てきた。今でもここを「み屋敷」と呼び、そこはどんな日照りでも水が潤カれることがないという。また、沢口地蔵尊は、猿羽根山地蔵尊の奥の院とも伝えられている。子育て地蔵として厚く信仰されている。このためか、子宝地蔵とも云われている。地元では子供が病気になると、この地蔵を借りて行って朝夕拝み、病気が治ると、地蔵に着物を着せて早坂家に返すという風習がある。例祭日は7月24日地蔵堂で祭りが行われ、昔は近隣から大勢参詣に訪れ、出店が出る賑わいだったというが、現在は地元の人達の参拝がほとんどであるという。12月23日お年越し、同24日祭り、年2回の祭りという。逸話として堰で子供たちが代かきだといって地蔵をもて遊んでいたのを、村人が見とがめてやめさせたところ、その家が厄ワザワイに逢ったという。沢口地蔵の御詠歌は「沢口の沢行く水は浅けれど恵みは深きぼさつなりけり」。



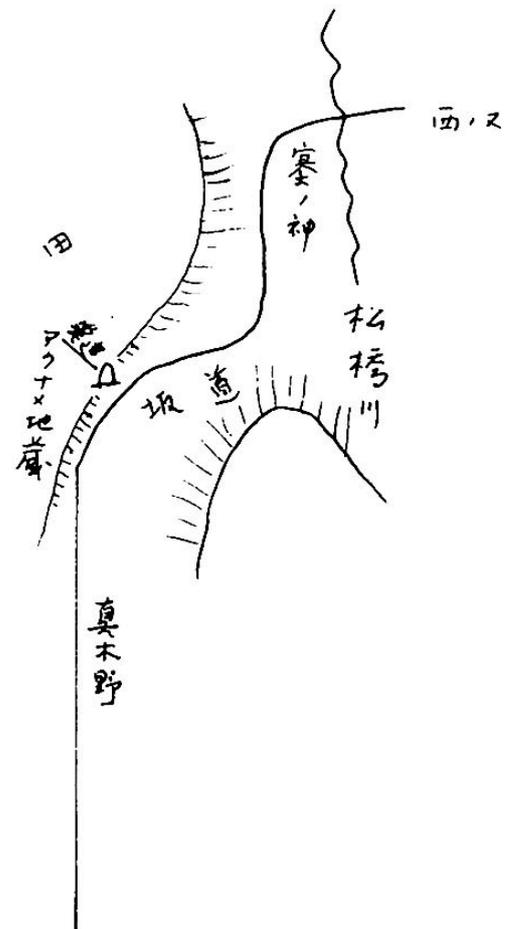
アクナメ地蔵尊

【所在地】 真木野

真木野から西又へ行く途中、下り勾配の曲がり角の左側に何の変哲もない自然石が祀られている。これがアク（灰）なめ地蔵である。百日咳にかかると、薬つとにアクと賽銭サイゼンを入れて参詣すると治るといわれ、近郷の人々に厚く信仰されている。現在も写真でも分かるように、賽銭とロウソクが上げられている。



平成4年12月6日撮影

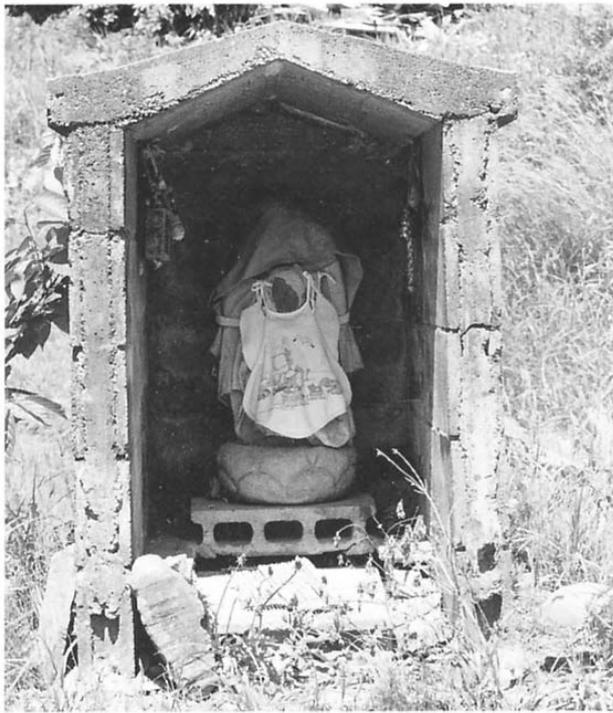


西又の地藏尊

【所在地】 西又

西又の村南はずれに祀られている。

建立年は不明であるが、顔面が損耗しているところから、西又が立村した頃に祀られたものではなかろうか。西又、松橋地区は、葉山参詣の道筋にあたるが、これらの村々は松橋の薬師如来座像からもうかがわれるように、かなり古く開かれたことが推測される。



平成7年6月10日撮影



六 面 幢^{ドウ}

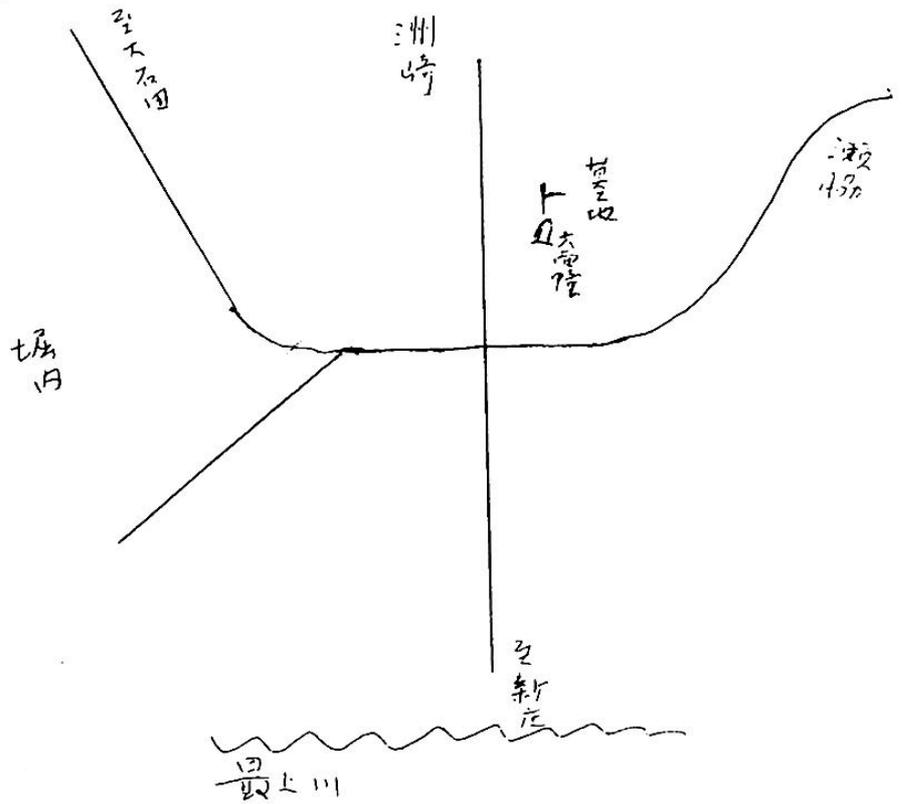
【所在地】 堀内

六面幢は現在堀内の墓地の片隅に立っているが、以前は本堀内にあったという。この六面幢は堀内の阿部清兵衛という人が建てたものであるという。清兵衛は娘を富田の沢口に嫁にやっていた。娘は神楽が大へん好きであったので、村祭りの当日、神楽見物に娘を呼んだ。娘は最上川を小舟で渡る途中、帆掛船に衝突し、落合というところで水死してしまった。阿部家では、娘の霊を慰めるためにこの碑を建てたと伝えられている。現在、頭部の笠の部分が落下している。石幢の「幢」はホコハタの意で六面幢幡の形を利用して六地藏を表そうとしたものである。名称も起源の幢を継承して六面幢である。幢面の一面に1体ずつの六地藏を刻み、その下に年記や造立者の氏名、造立の趣旨などが刻まれた。

〔『ふるさとの歴史散歩』〕



平成4年12月6日撮影



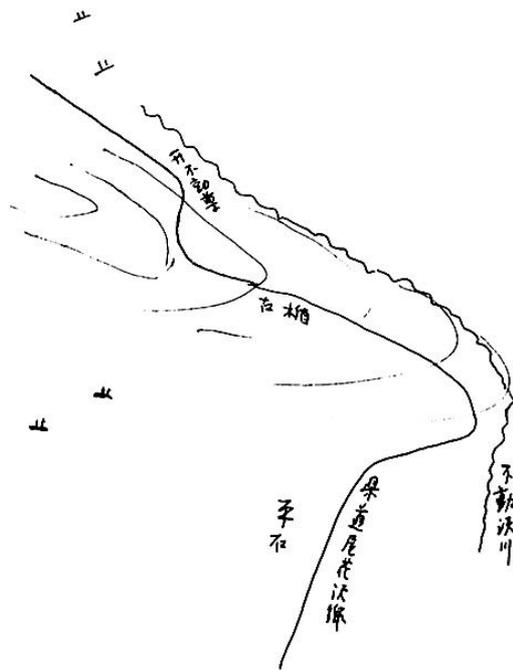
不動沢の不動尊

【所在地】 長沢

古楯に沿って流れる不動沢川の上流に瀧がある。その右岸に、2 m×2 mの不動尊の堂宇が建っている。地元の人には山田の不動尊と呼んでいるようである。別当は、内山の山崎氏が勤めており、例祭日は旧3月28日で、眼の悪い人がよく参詣するという。別当山崎氏は、元長沢楯に居住していた高橋多七氏の曾孫に当たる人であるが、後に、高橋家は内山へ移り住んだ。氏の孫娘が山崎竹松氏と一緒に山崎姓を名乗るようになったという。不動尊についての由緒書はないという。この瀧の岩に不動尊が刻まれているといわれるが、確認していない。



平成7年9月8日撮影



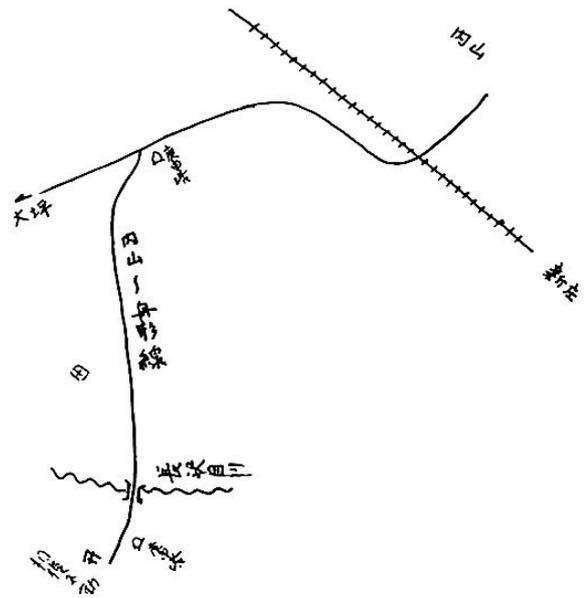
相模不動尊

【所在地】 内山

相模不動尊は、長沢目川の下流、内山・舟形路線の長沢目を越えた所に鎮座している。長沢目は長沢地名の発祥の地との説がある。『新庄領村鑑』によれば、境内地は、縦12間、横5間とあるが、現在はそれ程大きくない。その昔、長沢監物種佑の家臣鬼王、団三郎が鎌倉から落ちのびる時、曾我家の守護神として持ってきたものをこの地に安置したと伝えられている。縁日は旧暦10月24日で、内山の氏子達は赤飯を炊いて祝ったものだという。不動明王は不動尊ともいい、「動かざる尊者」と云う意味で、明王というのは密教の尊格を表す語である。また、大日如来の使者ともいわれ、悪魔煩惱オンノクを調伏するため、恐ろしい大忿怒フシヌの形相をしている。不動尊は空海が中国から請来した仏といわれる。平安時代には、修験道の主尊となり、さらに中世以降は火伏せの神として広く民間に信仰された。



平成 7 年 3 月 29 日 撮影



相模不動尊堂

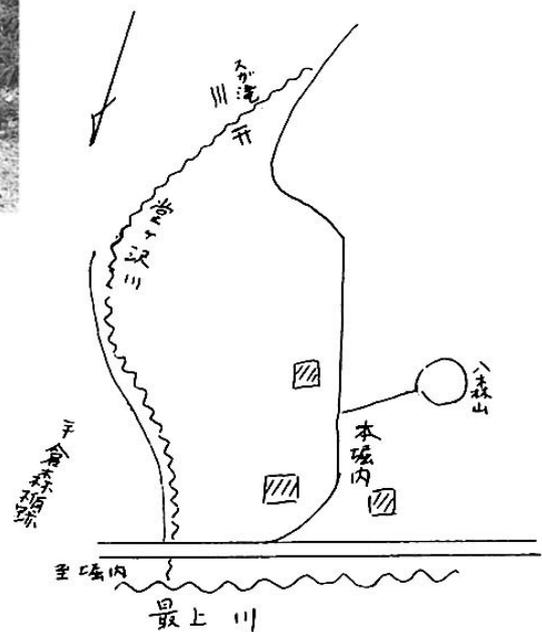
スガ滝 不動尊

【所在地】 本堀内

滝の名称の由来は不明である。滝の流量は少ないが、落差が数メートル。堂ヶ沢川に落ちる。朽ちかけた鳥居が建ち、不動尊像は見えないが、滝そのものを不動明王として拝している。滝の水が枯渇することはなく、古来より本堀内村32戸の飲料水として利用されていたという。



平成10年4月16日撮影



野の庚申塔^{コウ シン トウ} ①

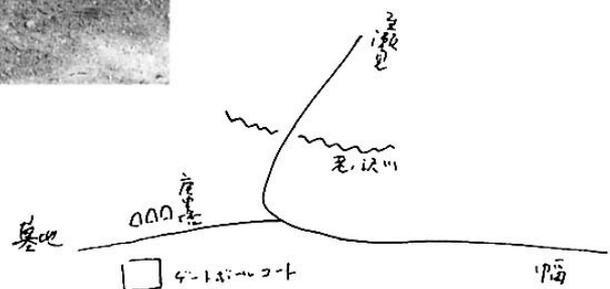
【所在地】 野

建立年は宝暦13年（1763）未9月6日と刻まれている。同所へ庚申塔2基、彫刻の青面金剛1基が建てられている。庚申信仰は、中国道教の説に人間の体内に三尸虫^{サンシ}と称する霊物がいて、常にその人の行い、善悪、過失を監視し、庚申の日の夜に天に昇って、このことを上帝に告げる。もし、その人に罪過があるときは、上帝は当人の命を奪うというのである。この信仰が日本に伝わり、平安期の頃から、庚申の夜は三尸虫^{サンシ}の昇天を防ぐため、その夜は徹夜して起きていることになった。これが庚申待である。江戸期に入り、庚申の申は猿に通じ、猿は山王の神使であることから山王権現、青面金剛を祀るようになった。同所に庚申の上部に青面金剛の種子（梵字）卍^{マン}が刻まれている庚申塔1基、彫刻の青面金剛1基が建てられているのはその故と思われる。

〔『庚申待と庚申塔』〕



平成5年5月8日撮影



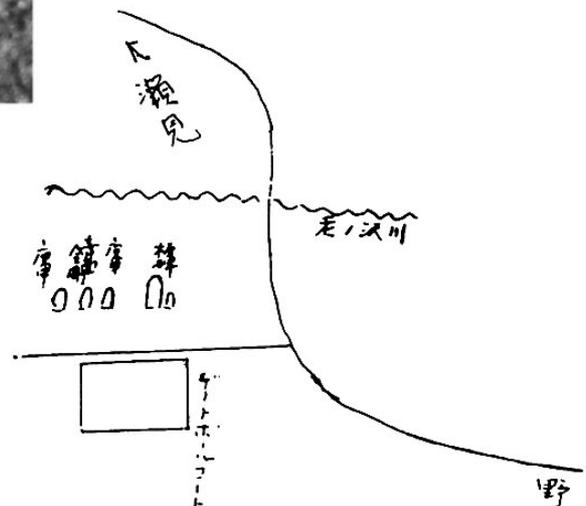
野の庚申塔 ②

【所在地】 野

建立年は不明である。庚申塔の上部に青面金剛の種子吽（ウン）の梵字が陰刻されている。庚申塔に梵字が刻まれている碑は、経壇原、松ノ木坂、富田の3カ所しか見当たらない。同じ場所に庚申塔2基、青面金剛陽刻1基、計3基の石仏が建っている。



平成5年5月8日撮影



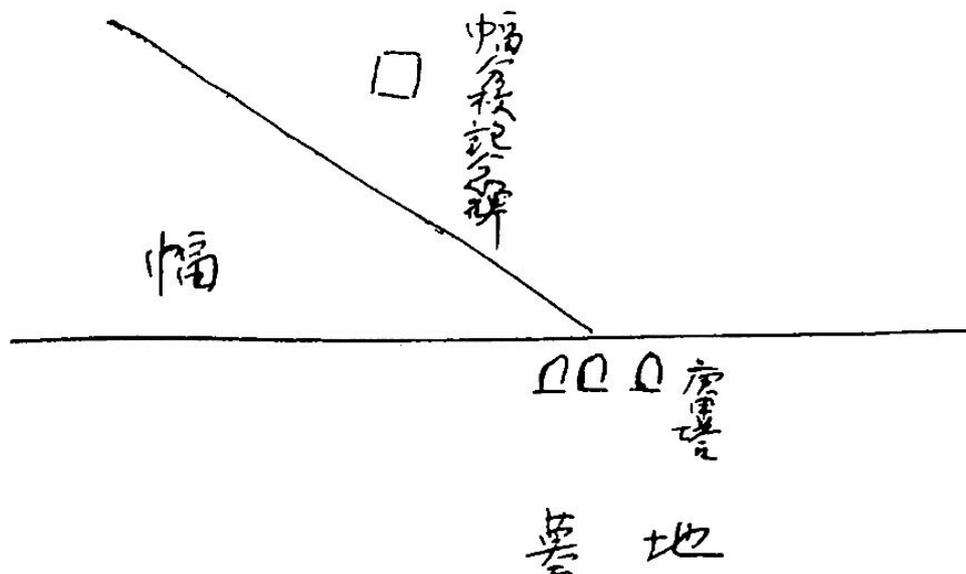
幅の庚申塔

【所在地】 幅

県道沿いに建てられている。向かって右側の塔には宝暦4甲戌（1754）と刻まれている。中央の庚申塔は、天保14卯年（1843）7月19日建立されたものである。左の碑は建立年月日不明。



平成5年5月8日撮影



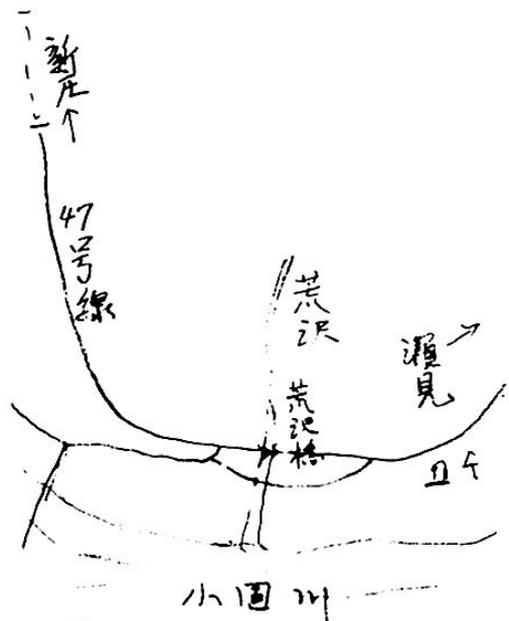
念仏の松の庚申塔

【所在地】 長尾

この庚申塔は、明治33年8月21日に建立されたものである。旧瀬見街道筋の念仏の松の側に中ノ山開田有志者たちが建てたものである。中ノ山開田は、細梅九左エ門の養子細梅寛六が紫山地区の開墾を進めた時、これに従事した人々が後年中ノ山を開墾して造成した水田である。開墾の成就と安全を祈願したものであろう。



亀割バイパス新庄へ向かって左側、念仏の松の樹下に祀られている。平成7年4月5日撮影



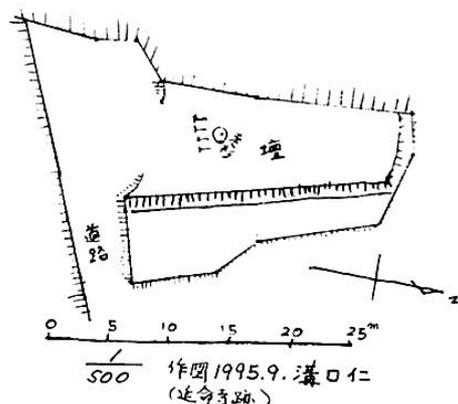
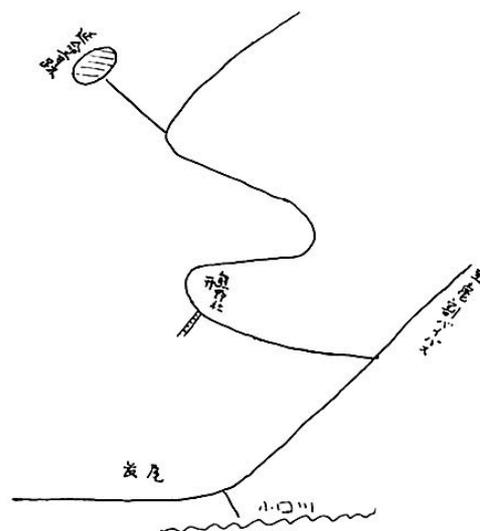
延命寺跡の庚申塔

【所在地】 長尾

長尾集落裏手の延命寺跡と伝えられている所へ建っている庚申塔である。「文政五年（1822）八月拾九日村安全」と陰刻されている。村安全と記されていることから悪疫調伏を祈願したものと考えられる。この外、最上三十三観音菩薩塔、馬頭観世音、不明石仏（地元では無縁仏でないかという）が建っている。この場所を平成7年9月9日測量作図した。これによると、延命寺跡として伝えられている場所の面積は約380㎡で、寺屋敷としては小さすぎるように思われる。



平成7年3月30日撮影



長尾の庚申塔

【所在地】 長尾

建立年月日は、文化8年（1811）8月14日と刻まれている。庚申塔は太平山三吉大神と並んで建てられている。以前は別の場所にあったのが、亀割バイパス開通にともない、ここに移転されたものである。

位置図は、延命寺跡の頁を参照



平成5年7月撮影

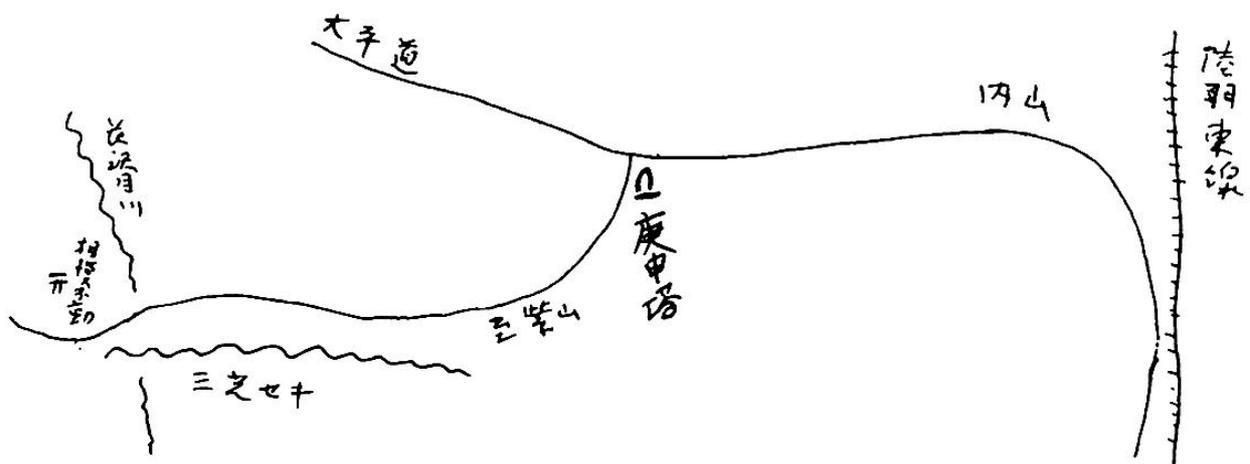
内山の庚申塔

【所在地】 内山

内山から大平に通じる道路と、舟形若あゆ温泉へ通じる道路が交わる三叉路に5基の庚申塔が建っている。このうち、建立年月日が分かるのは一基だけである。寛政5□（1793）5月28日と刻まれている。道路改修工事のため現在地へ移されたという。



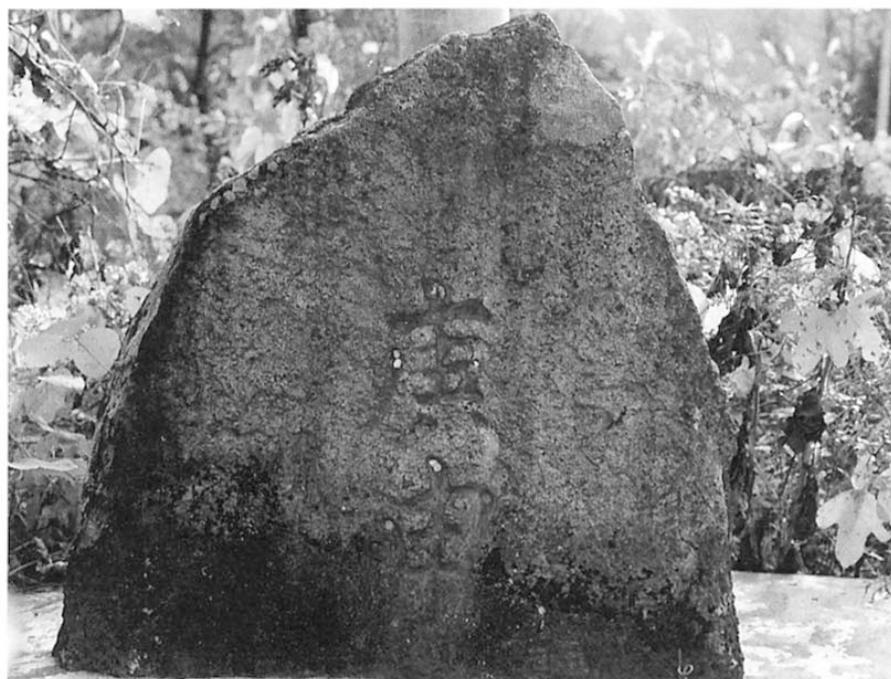
平成5年11月8日撮影



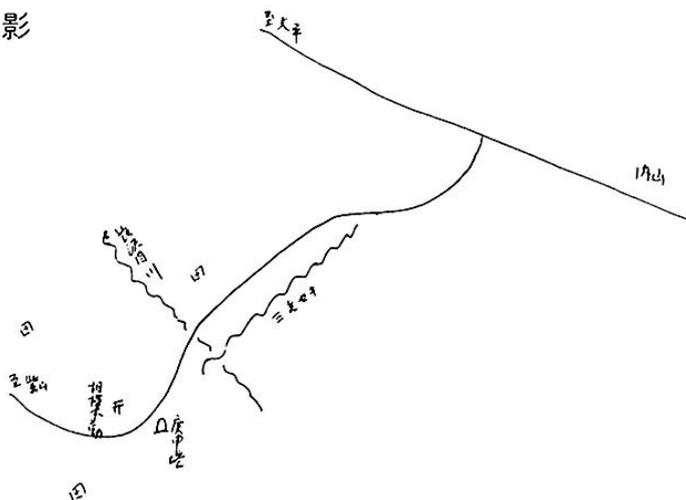
長沢目の庚申塔

【所在地】 内山

道路改修時に現在地へ移転されたといわれる。建立年月日は天保14年（1843）9月28日と刻まれている。旧新庄街道、内山から大平までの間、長沢目下り口1ヶ所、相模不動尊1ヶ所、三升田へ行く途中1ヶ所、大平入口に1ヶ所と、この区間4ヶ所に庚申塔がある。この外に、大平よりこの道を登り、長沢との境付近に文化年間の庚申塔が建っている。



平成5年11月8日撮影



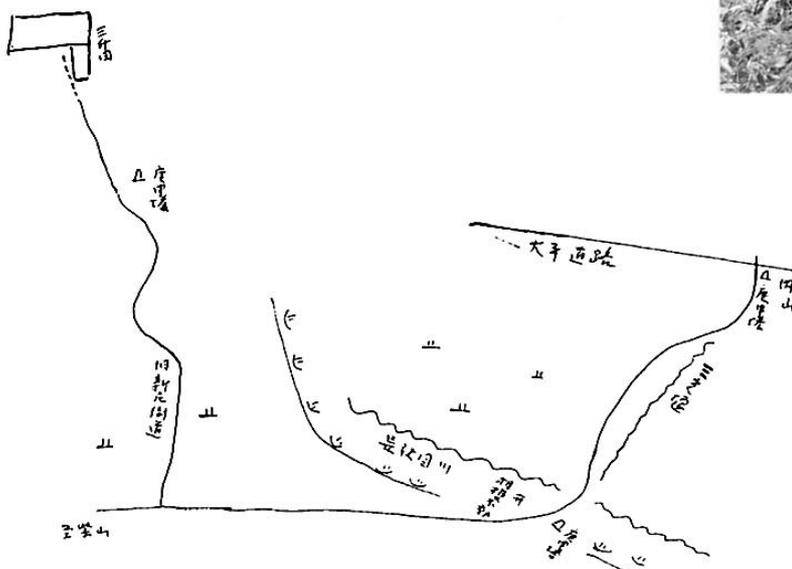
三升田の庚申塔

【所在地】 かつての長沢より大平へ通じる道路
にある（現、ゴルフ場敷地内）

下の写真、左のマッチ箱と比較してわかるように、かなり風化した小さい庚申塔である。
旧新庄街道の坂を登りつめた所の老杉の下に建っている。この奥に、「三升田」と呼ばれた
田んぼがあったが、現在、県営ゴルフ場敷地になっている。



平成5年11月8日撮影



日の出の庚申塔

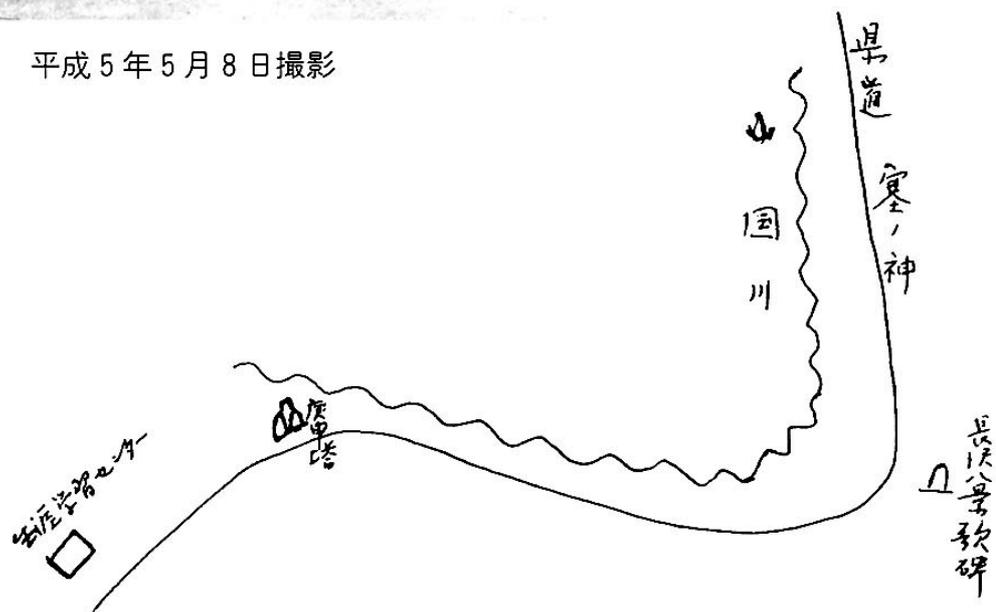
【所在地】 長沢

手前右の庚申塔の建立年月日は、天保（不明）7月吉日とある。その左は天保14癸卯年（1843）7月19日の建立である。後ろの庚申塔の建立年月日は風化して読みとれないが『ふるさとの歴史散歩』によれば安永9年（1780）4月24日とある。



大谷

平成5年5月8日撮影



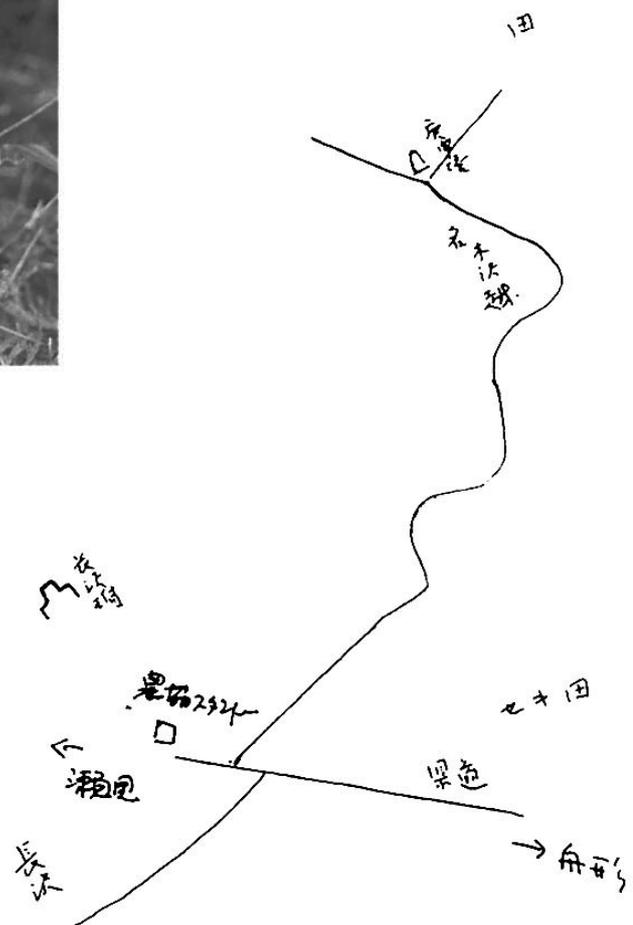
長沢平沢の庚申塔

【所在地】 長沢

長沢入口より南に武士道といわれる名木沢越（旧尾花沢領）がある。長沢より2 km近くもあろうか。曲がりくねった山道を登り、下り坂の中腹の道路が二股に分かれる所に建っている。建立年月日は不明であるが、『ふるさとの歴史散歩』によれば安政5年（1858）とある。



平成5年5月5日撮影



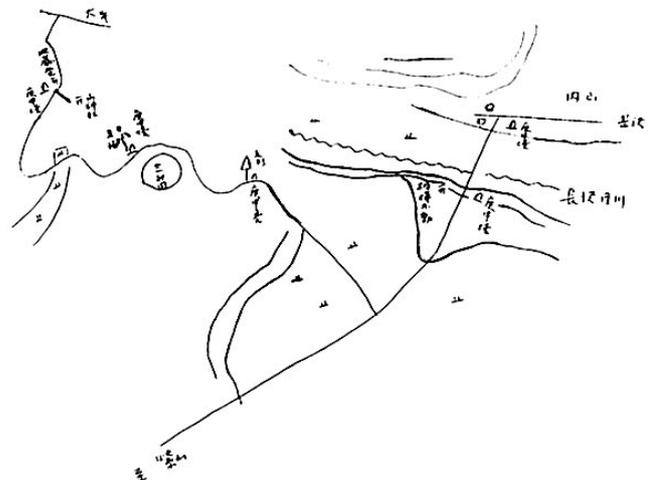
旧大平街道の庚申塔

【所在地】 旧長沢～大平街道

旧大平街道は、昔は頻^{ヒンバン}繁な往来があったという。この街道筋に三升田という字名の田があり、近年まで耕作されていたが、現在は県営ゴルフ場敷地になっている。その先、大平までは荒放題になっている。この街道筋に庚申塔が5カ所建っている。この碑は大平地蔵堂側に建っている碑である。高山栄一（大平）氏の案内によって荒れ果てた道を登りつめ、長沢との境界付近（大平寄り）に、老松へもたれかかった庚申塔を見ることが出来た。建立年は風化が進み、微^{カス}かに文化5年（1808）6月26日と読みとれる。高山氏は40年ぶりに見たといっていることから殆ど訪れる人はいないであろう。



平成7年8月29日撮影



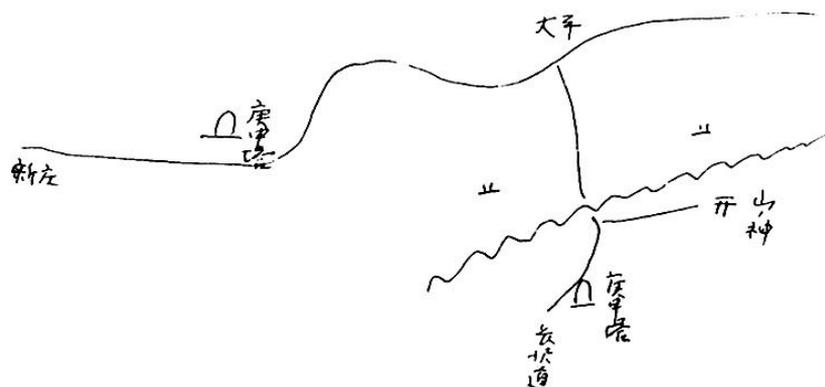
大平新庄口の庚申塔

【所在地】 大平

大平・西入口山手側に長沢八景句碑と共に建っている。建立年は安永9年（1780）4月12日と刻まれている。この庚申塔は村内安全、悪魔調伏の願いをこめて建てられたものである。大平には、旧長沢道の大平入口にも1基建っている。西入口庚申塚の句碑に「秋の風庚申塚の幾年ぞ 啓」と刻まれている。



平成5年5月5日撮影



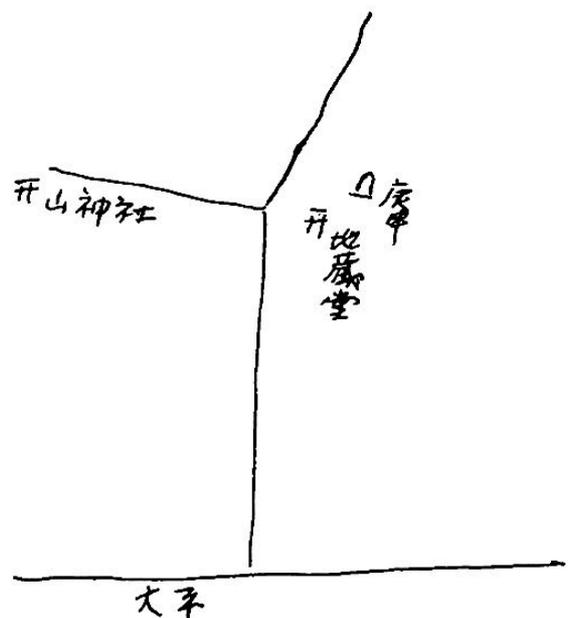
大平旧長沢口の庚申塔

【所在地】 大平

大平部落の山の神参道分岐点右側にある。ここは、昔の長沢・新庄道路であった。部落入口でもある。大平には、この地と西入口の2カ所に庚申塔がある。この庚申塔は風化によって建立年は分からないが、『ふるさとの歴史散歩』には、文政5年（1822）とある。大平、高山栄一氏の案内を得て、長沢道路「これより先長沢」の境界碑付近に文化5年（1808）の庚申塔が藪の中の老松の根元に建っていたのを見ることが出来た。年代的に見て、この庚申塔はその後に建てられたのである。



平成5年5月5日撮影



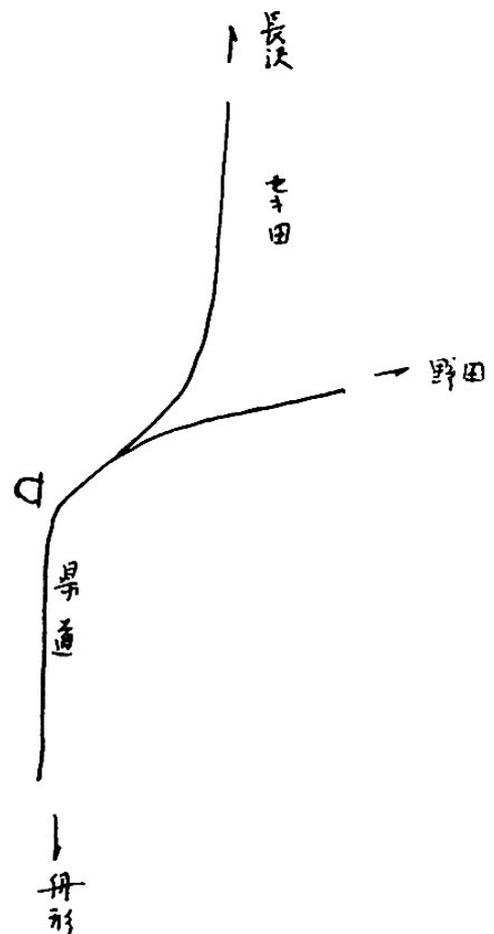
経壇原の庚申塔

【所在地】 経壇原

経壇原東端入口に建っている。碑は風化し、建立年代は不詳であるが、『ふながたの歴史散歩』によれば天保2年辛卯（1831）とある。天部に梵字が陰刻されているが、解読難解である。その傍に長沢八景の「狐狸も友祭りの包み取られけり」の句碑が建っている。



平成7年4月6日撮影



一の関の庚申塔

【所在地】 一の関地蔵堂境内

ここには2基の庚申塔が建っているが、建立年代はともに不明である。庚申塔は集落の入口に建てられるのが常である。一の関の庚申塔は、地蔵堂境内にあったという。一の関集落は、昔、「一の関7軒」といわれ、これより西方に長右エ門、四五右エ門、七右エ門、長七、与兵エ、長次郎、1軒は不明、の7軒があったという。庚申の夜は一晩寝ずに過ごす風習があった。従って、男女の契りは禁物、川柳に「庚申の夜は持ちのよい嫁の髪」「夕べ庚申かへと嫁へんな顔」などあるが、村内安全を祈って身を慎み、庚申塔を建てたことは間違いな

〔参考『庚申信仰』〕

位置図は一の関の柵の木の頁参照



舟形の庚申塔

【所在地】 舟形町八幡神社境内

ここには4基の庚申塔があるが、建立年月日が分かるのは左端1基だけである。「享保十年巳年（1725）五月二十三日 庚申供頼塔 大沢、佐藤」と刻まれている。当町内で建立年の判明している庚申塔の中ではこの塔が最も古い。



平成5年5月5日撮影

位置図は、舟形八幡神社の頁参照

猿羽根山の庚申塔・馬頭観音・光明真言塔

【所在地】 猿羽根山地蔵堂

建立年次は、『ふるさとの歴史散歩』によれば、1基は天保14年（1843）7月、他の1基は明和5年（1768）10月であるという。



平成5年5月5日撮影



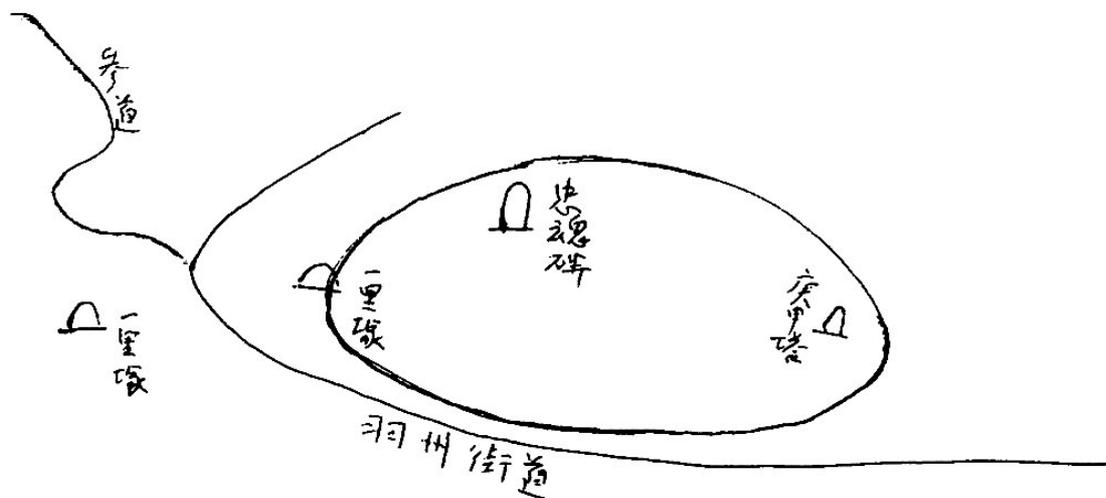
猿羽根山の庚申塔

【所在地】 猿羽根山 忠魂碑広場

建立年は不明である。



平成5年5月8日撮影



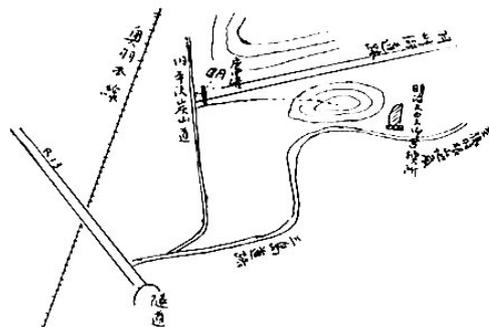
舟形平沢の庚申塔

【所在地】 猿羽根山々麓

猿羽根山羽州街道と旧平沢炭山道の合流地点東側の山麓10mほど登った場所に、2基の庚申塔が建っている。1基は、風化して碑の文字がうすれている。他の1基は建立年が風化して判読できないが、碑の文字は明らかである。猿羽根山地蔵堂境内と忠魂碑境内にも庚申塔が見られるが、庚申塔は一般的に村落の上はずれに建てられている。これらを考慮すれば、この庚申塔の下手に村落があったと推定出来る。現在は道路開削によって破壊され、碑の調査は不可能である。



「注」庚申塔前に白く見えるのは官製ハガキ縦折りしたものである。
平成10年4月13日撮影



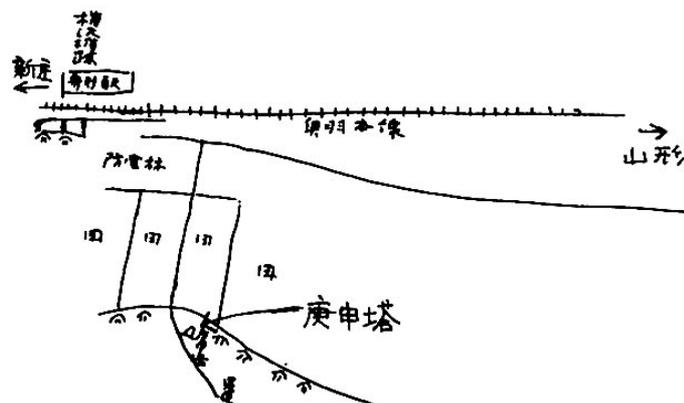
西ノ前の庚申塔

【所在地】 西堀（西ノ前）

舟形駅西方約150m離れた農道に建っている。開田の際移転されたものと考えられる。庚申とだけ刻まれ建立年代は不明である。近くに楢沢楯跡と伝えられる所がある。庚申塔の多くは集落入口に建てられている。この近辺に集落があったものであろうか。



平成5年5月5日撮影



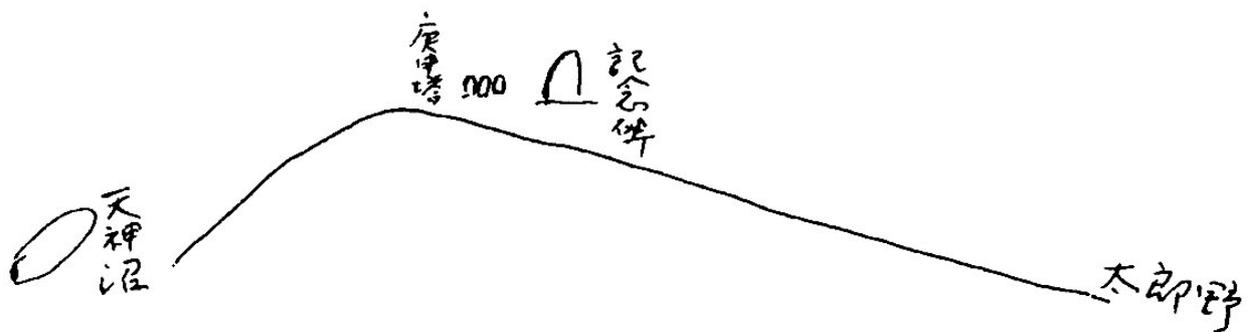
太郎野の庚申塔

【所在地】 太郎野開墾碑側

ここには3基の自然石が建っている。碑には文字はないが、地元では庚申とっているので、恐らくはこれを庚申塔として祀ったものであろう。



平成4年12月6日



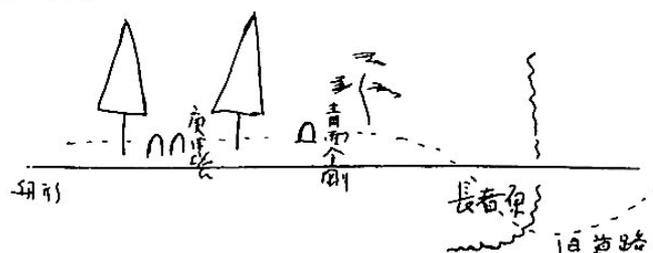
長者原の庚申塔

【所在地】 長者原

村の東の入口に建っている。昔は南向きに建っていたが、昭和9年、凶作救済事業として道路改修工事が施された折、北向きに建てかえられた。旧道路跡がこの裏側に残っている。2基の内1基は自然石で文字は刻まれていないが、他の1基には風化しているが、庚申安永2年（1773）とかすかに読みとれる。



平成4年12月撮影



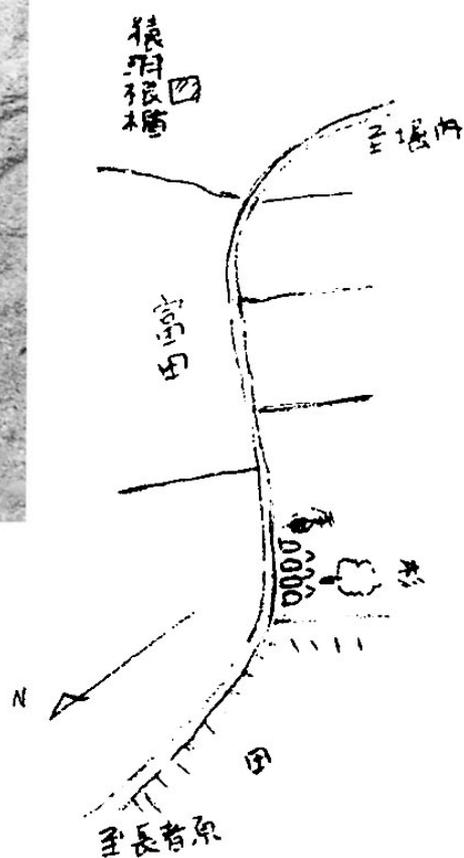
猿羽根の庚申塔 ①

【所在地】 富田 北入口

建立年月日は記されていない。



平成7年3月29日撮影



猿羽根の庚申塔 ②

【所在地】 富田 北入口

富田集落北入口に10基の石仏が建っている。このうち、写真中央右より2基が庚申塔である。建立年は不明である。



写真中央 平成7年3月29日撮影

位置図は前頁の猿羽根の庚申塔①参照

猿羽根の庚申塔 ③

【所在地】 富田 北入口

建立年は不明である。



平成 7 年 3 月 29 日 撮影

位置図は前頁の猿羽根の庚申塔①参照

猿羽根の庚申塔 ④

【所在地】 富田 北入口

梵字、建立年は風化により不明である。



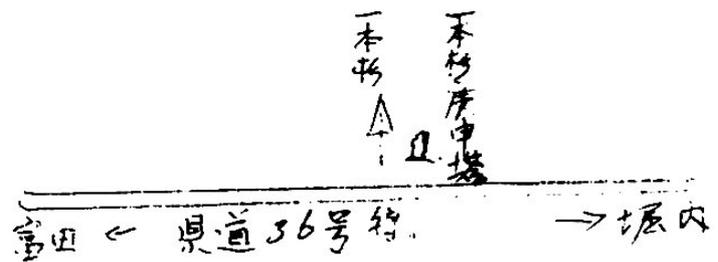
平成7年3月29日撮影

位置図は前頁の猿羽根の庚申塔①参照

一本杉の庚申塔

【所在地】 富田（祈祷塚）

同所に庚申塔が2基建っている。1基は風化が進み、文字は消えているが、他の1基（写真）に「明和二乙酉（1765）稔連衆八月吉辰 敬白」と陰刻されている。一般に庚申塔の種字は卍（ウン）^ニが多いが、富田の庚申塔には胎藏界大日如来（アーンク）の梵字が刻まれている。大日如来は、^{マンダラ}曼陀羅の主尊として真言、天台宗の密教で尊びあがめられている。猿羽根不動院は、羽黒派修験であることから、出羽三山総奥ノ院湯殿山の主尊である大日如来の梵字を冠したものであると思われる。



平成5年12月6日撮影

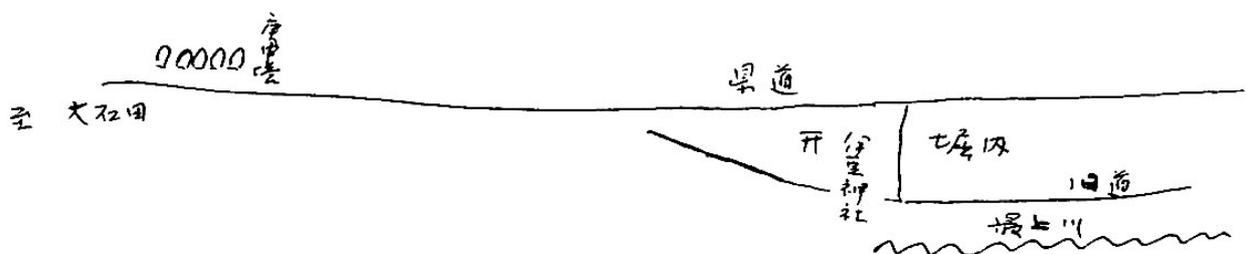
堀内の庚申塔

【所在地】 堀内

堀内東入口の山手側に5基の庚申塔が建っているが、建立年月日が分かるのは1基だけで、これには「安政四巳年（1857）八月」と刻まれている。4基は風化し文字は不明である。



平成5年5月8日撮影



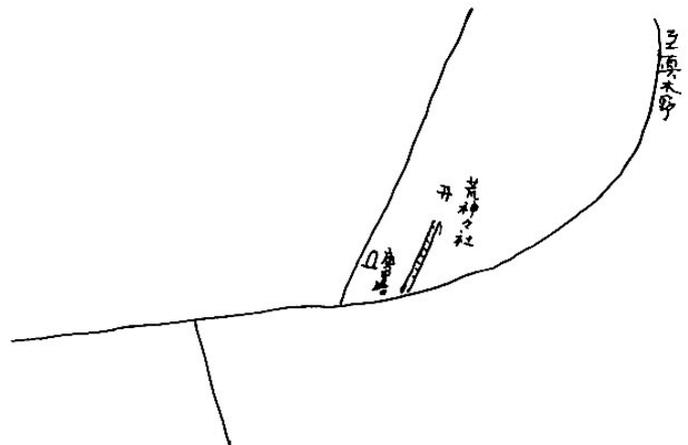
洲崎の庚申塔 ①

【所在地】 洲崎

「昭和46年8月七庚申の日再建」と刻まれている。七庚申について『庚申待と庚申塔』によれば、甲子の日から数えて61日目に再び甲子の日が還ってくるのである。この例のように庚申の日から61日目に再び庚申の日がくることになる。また、この例にならって年にすれば61年目に庚申の年が回ってくる。庚申とは十干、十二支を組み合わせることができる日と、年の一つである。庚申（カノエサル）は61日目で還ってくる。また最初の年を庚申とすれば、61年目に回ってくる。1カ年の庚申は6回であるが、13年目に7回の庚申を持つことになる。



平成7年3月29日撮影



□ 東老寺

洲崎の庚申塔 ②

【所在地】 洲崎

洲崎荒神々社階段下に建っている。風化により文字は消えている。碑の向かって左側に「昭和46年8月七庚の日再建」と陰刻された庚申塔があるので、それ以前の庚申塔があったものと思われる。

この石仏は、地元住民によれば庚申塔に間違いはないという。この碑は自然石で何も刻まれていないが、これと並び建っている碑は頭部破損して側に置かれ、これを接合してみると「明治十八〇〇年三月一日建立 □澤栄治」と陰刻されているのがわかる。この石仏に向って左側にも昭和四十六年八月七庚申の日建立講員一同（十名）と刻んだ庚申塔がある。上記の碑に「七庚申」とあるから、この年はこれに相当した年と思われる。通常、新旧2基並べて建てるが、道路拡幅のため離して建てたのだという。



平成7年3月29日撮影 位置図は前頁の庚申塔①を参照

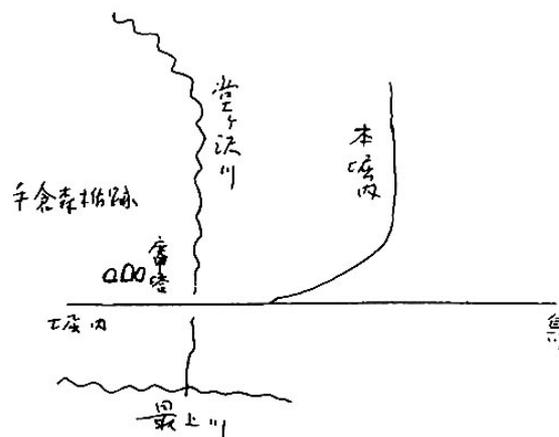
本堀内の庚申塔

【所在地】 本堀内

本堀内の東村入口道路沿いに3基建っている。建立年はかなり古いと思われる。今では風化が進み建立年は読みとれないが、『ふるさと歴史散歩』には、安政4年（1857）と記されている。



平成6年5月23日撮影



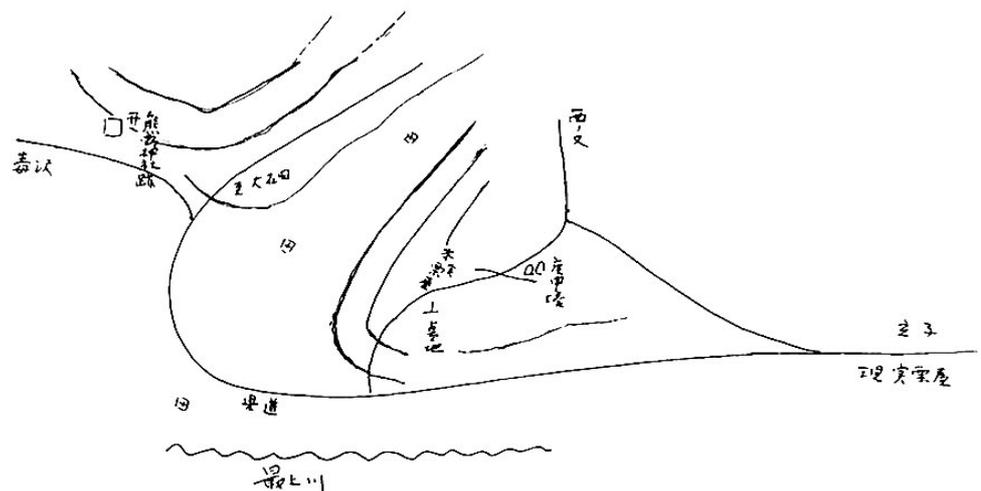
元実栗屋の庚申塔

【所在地】 元実栗屋

^{モト}元実栗屋の西又道入口に立っている。文字は風化によって消滅している。実栗屋集落は地滑り地帯に指定され、昭和51年全30戸立子地区に移転して廃村となった。墓地並びに庚申塔は移転されることなく残っている。



平成5年5月8日撮影



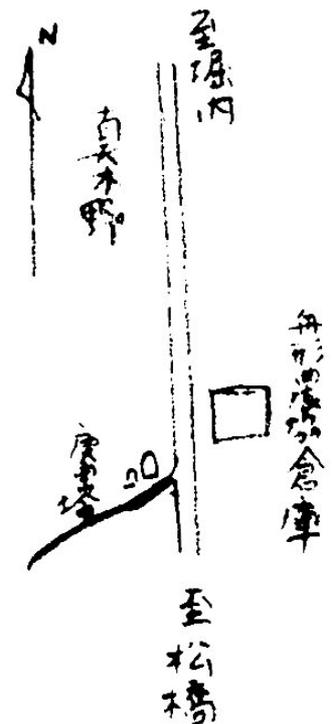
真木野の庚申塔

【所在地】 真木野

以前は、真木野農協倉庫前にあったが、道路拡幅工事のために道向いの現在地へ移されたという。2基ある内1基は、破損し文字は全く不明である。他の1基に、「明和元年（1764）申ノ十一月廿三日」と刻まれている。



平成4年12月6日撮影



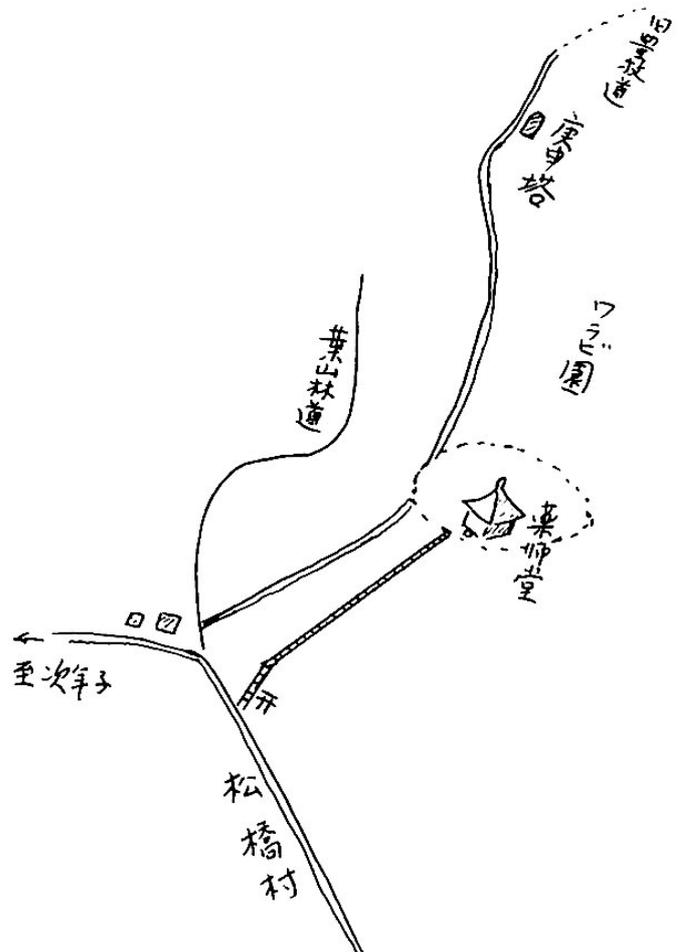
松橋の庚申塔 ①

【所在地】 (上) 松橋

松橋より大蔵村豊牧に通じる旧道に建っている。碑面に文字はないが、地元では庚申塔と
いっている。豊牧旧道は^{カス}微かにその形跡を残している。



平成10年 4月18日撮影



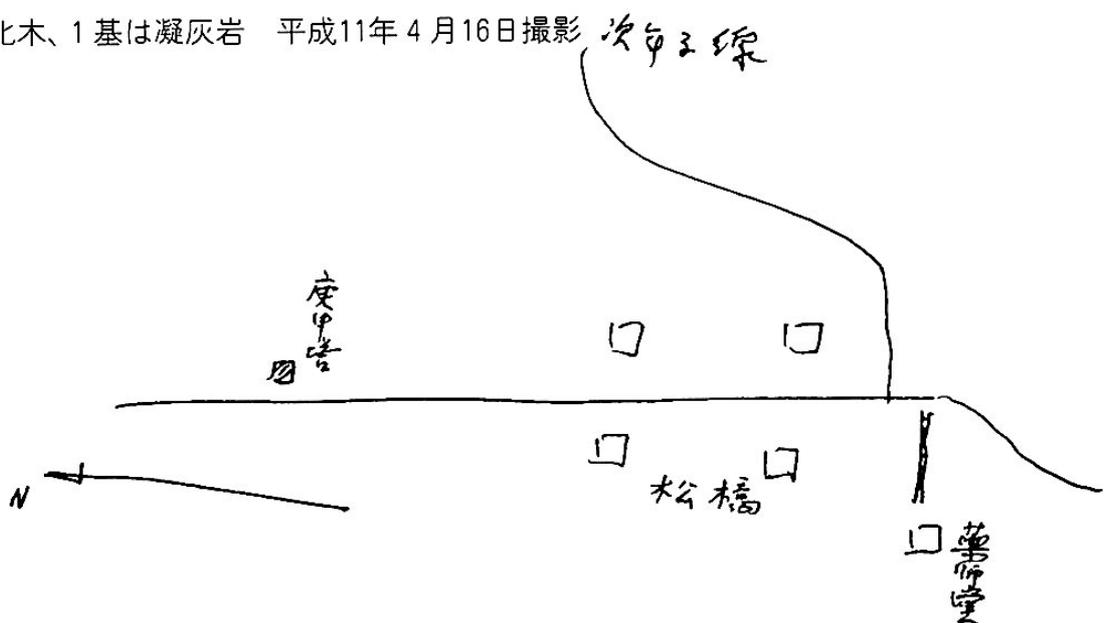
松橋の庚申塔 ②

【所在地】 (下) 松橋

松橋北入口道路改修工事によって、現在地の向側にあったものを移し祀ったといわれる。
碑名が刻まれていないので建立年は不明である。



1基は、硅化木、1基は凝灰岩 平成11年4月16日撮影



野の青面金剛

【所在地】 野

建立年代は、風化して不明であるが、4臂^ヒの青面金剛彫像は当町では只2基だけである。風化が進んでいるのが惜まれる。庚申塔に青面金剛の像を刻む風は、江戸時代の寛文、延宝（1661～1681）の頃から始まるといわれる。青面金剛が庚申待の本尊になった根拠について、『諸儀軌訣影』は、「青面金剛を庚申の本尊となすは、天台家より出し様なり。天台の事相にかよふの偽説多し」と書いているが、これが正しいと思う。「青面金剛像の儀軌に見ゆるは四臂像であるからこれを正式と見なし、6臂や8臂は正規ではないと云わねばならぬ」と『庚申待と庚申塔』に書かれている。



平成5年5月8日撮影



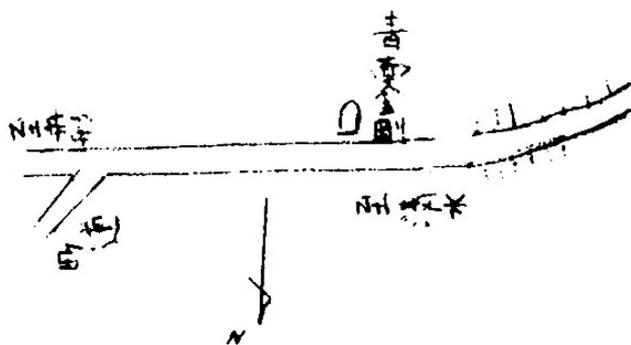
長者原の青面金剛王

【所在地】 長者原

長者原東入口にあり、建立年次は不明である。青面金剛の起源は、『庚申待と庚申塔』によれば、一説に印度の猿神ハヌマム神から変化したといわれる。ハヌマム猿神は、印度神話のラーマ王の^{キツキ}后シタを敵手から^{グッカン}奪還することに大功があった神で、今も印度の各地に安置祀されている。此の神は、猿身であるから庚申の猿と関係ありとして、青面金剛はこの神から出ているといわれる。庚申と猿が結びついたのは、室町時代末期からであり、その頃庚申待に比叡山の山王廿一社権現を信仰したので、猿が山王の使として庚申塔に現れて来たのであって青面金剛とは何等の関係をもたない。青面金剛と三猿と結ばれたのは江戸時代からである。第二の説は、青面金剛を以て、印度の戦闘神なるマカカラと同種の神であるという説である。マカカラは大黒天の原型であって、日本の福神である大黒天はこの神の変化したものである。悪魔降伏の^{イリツク}威力を示す日本の三宝荒神や青面金剛は、遠く印度の濕婆神から発すると云われる。庚申塔と青面金剛碑は、ほとんど村の^{カミ}上入口に祀られているが、これは村に侵入する悪魔の降伏を願って建立されたものと思われる。



平成4年12月撮影



猿羽根の青面金剛 ①

【所在地】 富田北入口

同所に石仏が10基建っている。この石仏は、かなり風化している。彫刻の六臂の青面金剛は、当町では野集落のもの^とこれと2基だけである。建立年は不明である。



平成7年3月29日撮影

位置図は猿羽根の庚申塔の頁参照

猿羽根の青面金剛^②（陰刻像）

【所在地】 富田北入口

富田集落北入口老杉の下に庚申塔が5基、青面金剛碑が4基、不明碑が1基、計10基の石佛が2列に並べて祀ってある。青面金剛碑の1基には、下写真のように、上部剥落しているが、6臂の青面金剛像が陰刻されている。『庚申待と庚申塔』には、「世間に最も多く流布し、庚申塔に彫刻されているのは6臂の青面金剛である。しかし「陀羅尼經」の正説に従えば4臂となるべきを、なぜ6臂像が普遍的に流布したか、その原拠として青面金剛と三宝荒神が混交して6臂像が出現した」と記している。この金剛像の建立年次は不明であるが、「六月十八日□□」とだけ読める。尚、陰刻の青面金剛像は当町では只1基だけである。



平成7年3月29日撮影 位置図は猿羽根の庚申塔の頁参照

猿羽根の青面金剛③

【所在地】 富田北入口

集落北入口に建っている。10基の中の1基である。天部に梵字大日如来  (アーンク) が刻まれ、その下に青面金剛と陰刻されている。建立年月日は、「延享元甲子（1744）天文月」と記されている。庚申塔や、青面金剛碑には、梵字の  (ウン) が多いが、富田の碑の梵字は殆ど大日如来のアーンクである。富田祈祷塚の庚申にもこの梵字が刻まれている。察するに、富田不動院は羽黒派修験であるためと考えられる。『山形県の石造物にみる梵字』によれば舟形町（但し猿羽根山周辺）には梵字が見当たらないとされているが、実際は所々に見られる。



平成7年3月29日撮影

位置図は猿羽根の庚申塔の頁参照

猿羽根の青面金剛⁴

【所在地】 富田北入口

天部の梵字は不詳であるが。青面と微かながら読むことが出来るので青面金剛を祀ったものと思われる。建立年は不明である。



平成7年3月29日撮影

位置図は猿羽根の庚申塔の頁参照

堀内の湯殿山 ①

【所在地】 堀内

伊豆神社前に10基のさまざまな石碑が建っている。このうち、湯殿山の碑は2基である。形は小さい。ともに風化が進んでいて建立年次は不明である。湯殿山と陰刻されている文字の上に、胎藏界の梵字（アーンク）大日如来が刻まれている。湯殿山の本地仏は、大日如来である。当町で、湯殿山碑に梵字が刻まれているのはこの1基だけである。



平成5年5月8日

位置図は堀内伊豆神社の頁参照

堀内の湯殿山 ②

【所在地】 堀内

堂々たる石碑である。「天保十四^{ミスノトウドン}癸卯年（1843）八月吉祥日」と建立年月日が刻まれている。



平成5年5月8日撮影

位置図は堀内伊豆神社の頁参照

舟形の湯殿山、秋葉山

【所在地】 舟形八幡神社境内

山の斜面にもたれ2基並んで建っている。建立年は不明である。



平成5年5月5日撮影

位置図は舟形八幡神社の頁参照

長者原の湯殿山、秋葉山

【所在地】 若宮八幡神社境内

以前は、公民館南東隅に建っていた。戦後マッカーサー指令により、小学校の側であるので、2つの碑が倒され放置されていたが、其の後、現在地へ移されたものである。湯殿山は、平安の昔、弘法大師が開山した真言秘法の山で大日如来を本地仏とする。御神体は靈湯が湧き出る巨岩そのものである。五穀豊穡の神として信仰されている。福寿野にある追分石に「向左湯殿山肘折口、ゆもといまがみ道」とある。出羽三山信仰は、東北のみならず全国的に広く広がっている。湯殿山の御縁年は^{ウツドシ}丑年で、この年は特に^{サンケイ}参詣する人が多い。郡内の登拝口は角川口と肘折口の2カ所である。肘折口の別当は、烏川の^{アウツイン}阿吽院である。長者原の湯殿山碑は高さ1,850cm、幅1,140cmで当町で最も大きい。建立年代は不明であるが、高倉山付近の立石地区からこの石を運んできたと伝えられている。一方、秋葉山は、文久3亥年（1863）8月吉祥日に建立されたもので、古峯神社とともに火伏せ、盗難除けの神として信仰されている。秋葉山は静岡県周智郡秋葉山頂に^{マツ}祀られている^{ツチノオホカミ}迦具突智大神が本社であるという。ここでは毎年12月15、16の両日盛大な火祭りが行われる。昔三尺坊と名乗る山伏が、この山を開き、頭に火の神の威徳明王をいただき、仏の衣をきて真言秘密の行を修し、ついに天狗になったという。秋葉山は修験の山でもあった。



平成7年3月29日撮影



長沢の湯殿山、^{ゾウズ}象頭山

【所在地】 長沢新山神社境内

新山神社境内東端に湯殿山と象頭山各1基の碑が建っている。湯殿山碑の建立は、文化9年（1812）7月吉日で、象頭山は、文化7年9月吉日の建立である。湯殿山は出羽三山の総奥ノ院である。昔は女人禁制の山で、男子15才になれば先達に従って三山参りをした。家人は精進潔斎^{ショウジンケツサイ}をし、無事を祈った。現在の成人式であろう。象頭山は四国讃岐琴平^{サスキコトヒラ}にあり、金毘羅大権現が祀られている山である。金毘羅様は、海の神、航海安全の神として厚く信仰されている。当地区には、渡舟によって内山と結ぶ往来があり、その安全を祈ったものであろう。また、藩の年貢米も舟によって酒田に運ばれた。



平成5年5月5日撮影



長尾の古峯神社 黄金山大神 他

【所在地】 長尾熊野神社境内

熊野神社境内の銀杏樹の側に3基の石碑が建っている。1基は古峯神社の碑で、明治22年7月吉日の建立である。1基は黄金山大神で、大正3年7月7日に建てられたもので、比較的新しい石碑である。残る1基は風化して小さくなっており、碑名は不明である。かなりの年代を経ていると思われる。



平成7年4月28日撮影

位置図は長尾熊野神社の頁参照

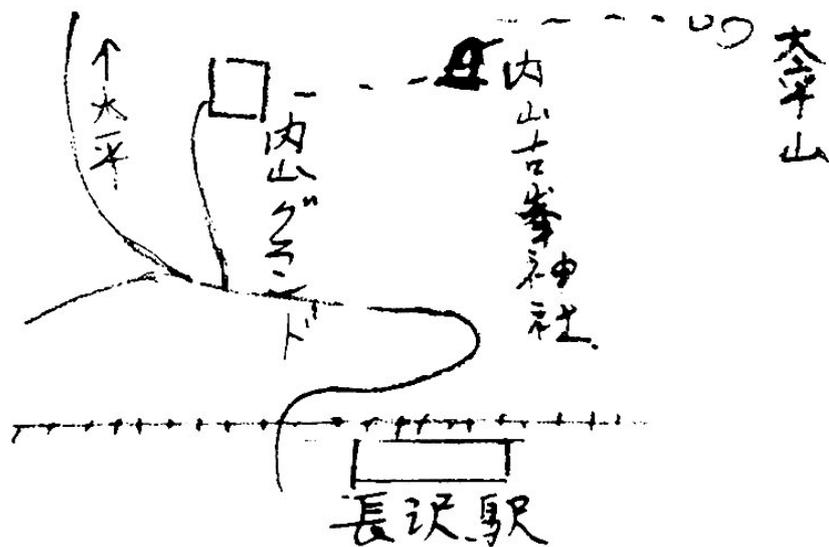
内山の古峯神社

【所在地】 内山

「明治四十年四月十三日建之」とある。



昭和62年撮影



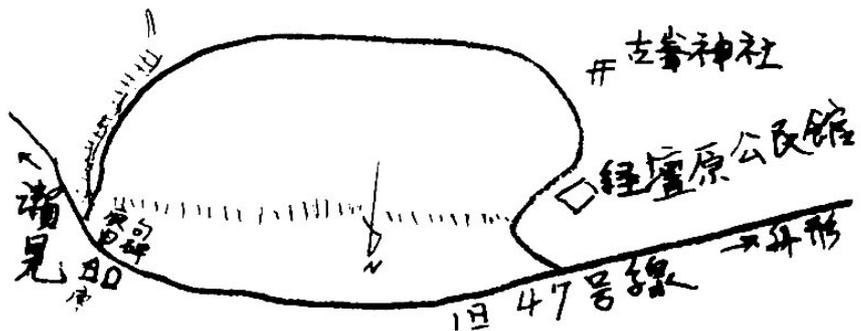
経壇原の古峯神社

【所在地】 経壇原

堂舎は、間口2 m、奥行24cm、トタン葺。御神体は古峯神社の石碑（高1.2m、幅78cm）

「大正五年丙辰年、藤原祐□謹書」とある。

経壇原の氏神様で、祭りは6月13日である。



一の関の古峯碑

【所在地】 一の関

一の関地藏堂境内にある10基の碑のうちの1基である。古峯神社は、栃木県鹿沼市の西部古峯原の村に祀られているのが本社で、農業、防火の神として、特に東北地方の信仰を集めている。『新庄の石仏』によれば、新庄市内の石仏の建立年月日を見ると、秋葉山はほとんど幕末であるのに対し、古峯山は明治末期以降であると記されている。この古峯碑も明治20年亥8月13日、沼沢喜平治と刻されている。



平成5年12月1日撮影

位置図は一の関の栃の木の見参照

紫山の古峯神社

【所在地】 紫山



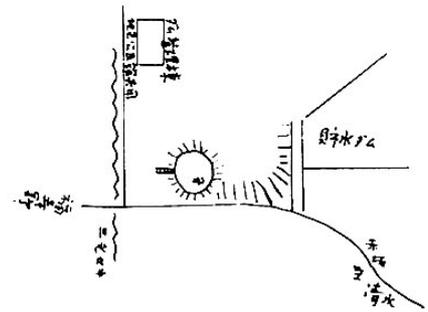
平成11年10月撮影

位置図は紫山の太平山三吉大神の頁参照

福寿野の秋葉神社

【所在地】 福寿野

秋葉神は、村西端の小高い丘の上に、安政元年の開墾碑と並び祀られている。祈祷札に「奉斎祀秋葉神社廣前 火災消滅 村中安全 家運栄久祈 祭主義高豊美 大世話人奥山与市 明治三十三年旧四月十八日」と記してある。当初はこの様にして祀ったと思われる。其の後明治44年旧4月18日に石碑が建立された。碑の高さは46cmと小さい。碑面に秋葉神社と陰刻し、文字を朱に染めている。堂は小さいが、彫刻が施した宮造りの立派なものである（左と中写真参照）。この堂は新庄方面から貰ってきたものという。また昭和8年7月13日建立の古峯神社も側に祀られている（右下写真）。



平成7年6月10日撮影

猿羽根の秋葉山

【所在地】 富田 八幡神社境内

ローソクの長さから見てもわかるように、比較的小さい自然石の碑である。これには秋葉大神と陰刻され、山神、象頭山と共に堂内に祀られている。建立年は不明である。



平成7年8月9日撮影

位置図は猿羽根八幡神社の頁参照

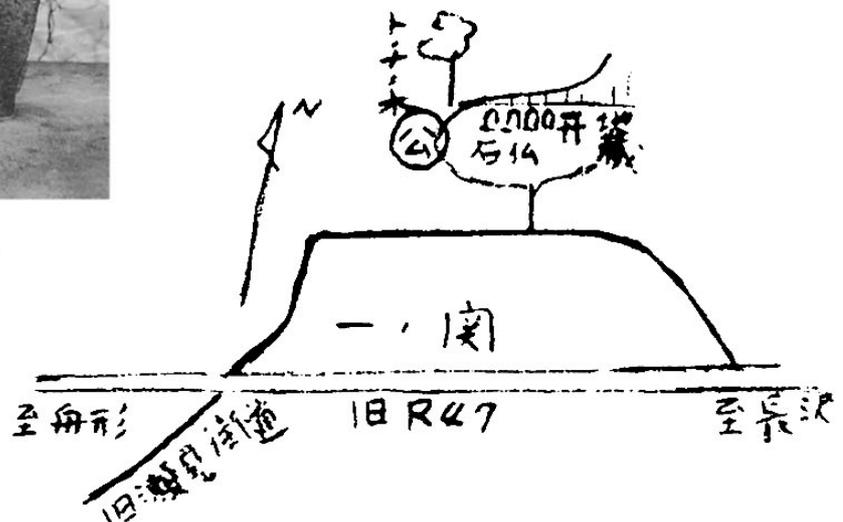
一の関の象頭山

【所在地】 一の関地蔵堂境内

地蔵堂境内地に庚申塔、馬頭観世音等とともにコンクリート台に10基1列に並んでいる。平成3年11月19日移し祀った碑である。一の関地区は、川向かいに水田があるため、舟によって川越えして、耕作しなければならなかったという。川越えの安全を祈り、航海の安全の神である象頭山を祀ったと考えられる。明治2年の建立である。



平成5年12月1日撮影



猿羽根の象頭山

【所在地】 富田 八幡神社境内

1棟の堂内に象頭山、秋葉山、山神の3体が祀られている。象頭山については前項に詳細に述べたので省略する。象頭山は、当地区ではこの碑と長沢新山神社境内に1基、一の関地藏堂に1基、堀内伊豆神社側に1基の4基しか見当たらない。



左下の石造物は男根である
平成7年8月9日撮影

位置図は猿羽根の八幡神社の頁参照

堀内の象頭山

【所在地】 堀内

堀内伊豆神社近くに石仏が10基建っている。この象頭山は高さ2m、幅1.4mの巨大なる自然石に堂々たる文字が陰刻されている。碑には「願主 舟村 中安全文化拾四年（1817）集龍一玄祀五月二十五日建□」と刻まれている。いうまでもなく、金毘羅大権現の本山は四国讃岐の象頭山に祀られているが、海の神、航海安全の神として厚く信仰されている。最上川舟運制度が整えられるのは江戸時代である。江戸時代に入ると、幕府は内陸地方の年貢米を安全に安く大阪、江戸に運送するため、寛文12年（1672）、川村端軒ズイケンに命じ最上川の舟運を調査させた。「最上郡年代記」に「延宝元年川村端軒の廻米350艘最上川を下る。2月12日より4月16日迄堀内村通過」とある。舟運の安全を祈らずにられない。それを象徴するかのような碑である。



平成7年4月25日撮影

位置図は伊豆神社の頁参照

大谷の馬頭観世音、庚申塔

【所在地】 幅（大谷）

熊野神社参道左側に建っている。庚申塔は天保14年（1843）2月19日の建立であり、馬頭観世音は弘化4年（1847）に建立されたものである。馬頭観世音は、宝冠に馬頭をいただく3面8臂^ヒの仏像で、宝馬が馳せるような勢いで、一切の悪霊^{アクリョウ}や煩惱^{ボンノウ}を駆逐^{クチク}する仏であるという。また妙見様^{ミョウケンサマ}は、元来北斗星の神であるが、相馬地方では、領主の転封の折に氏神の妙見様を移したところ、たまたまこの地方が馬産の土地であったために、いつしか馬の神になったということである。



平成5年5月8日撮影



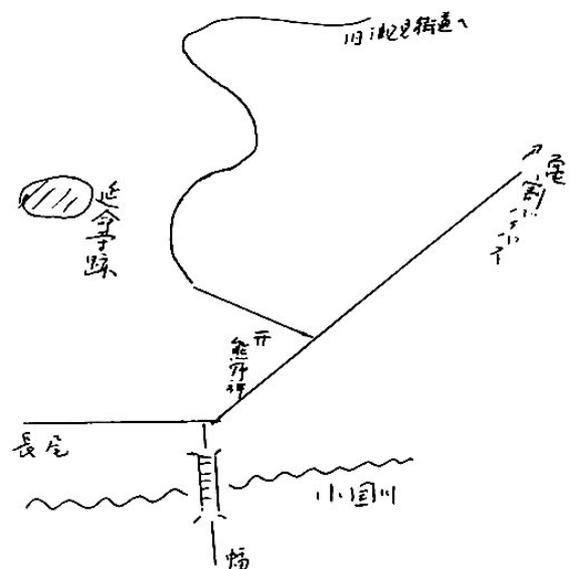
長尾の馬頭観世音

【所在地】 長尾（延命寺跡）

長尾集落裏手の延命寺跡と伝えられる場所に建っている。建立年次は文久3亥年（1863）7月17日とあり、陰刻に朱を用いている。同所には、このほかに最上三十三観世音菩薩、庚申塔、不明の石碑の4基が建っている。



平成7年3月30日撮影



長沢の馬頭観世音

【所在地】 長沢 太平山中腹

高さ70cm、巾35cm。明治34年7月吉日。願主叶内庄吉。



平成11年10月撮影

位置図は長沢太平山の頁参照

一の関の馬頭観世音（2体）

【所在地】 一の関 地藏堂境内

同所には10基の石仏がある。そのうちの1つ（左写真）に、「大正三年四月十七日 村内安全」と陰刻されている。『新庄の石仏』によれば、馬頭観音は一切の悪霊アクリョウと煩惱ボンノウを駆逐クチクする仏様と記されている。馬の神であると同時に村内安全を祈ったものであろう。もう1基は右写真で分かるように頭部が破損しているが、一部が読みとれるので、馬頭観世音であることが分かる。建立年月日は不明である。



平成5年12月1日撮影

位置図は一の関の柵の木の頁参照

舟形の馬頭観世音

【所在地】 舟形八幡神社境内

碑は、境内の急斜面にもたれて建っているのので、裏面に記されている建立年は判読出来ない。



平成5年5月5日撮影

位置図は舟形八幡神社の頁参照

長者原の馬頭観音

【所在地】 長者原

以前は叶内氏屋敷にあったが、後、現在地へ移転されたものである。勧請年は不明であるが、お堂の中に「馬頭観音」と記されたお札が納められている。まだそう古くないものと思われる。当町で古い馬頭観音碑は幅の弘化4年（1843）、長尾の文久3年（1863）で、このほかは明治以降と思われる。



平成6年4月撮影

位置図はこぶしの木の頁参照

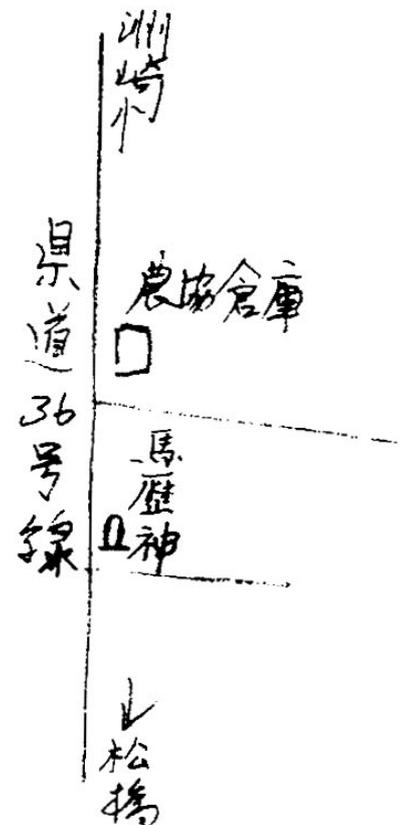
馬 歴 神

【所在地】 真木野開墾碑広場

開墾碑広場の入口左隅に建っている。大石田の高桑勇蔵は真木野開田に成功し、地主となった。そのほか牧場を経営し馬喰^{バクワツ}もやったが、どれも失敗したという。彼は、国有林野内に無願放牧したなどで告訴され、大正元年8月14日に係官の取り調べを受けている。また、高桑は、堀ノ内村井上外蒲沢の国有林内の一部に堤防を築いて、その中に自分所有の牛と、委託された牛を、子牛を除いて80頭以上も放牧した。こうしたことから牛馬の神として、「馬歴神」を建立し祀ったものでなかろうか、この碑は大正14年7月17日建てたものであるから、高桑頌徳碑建立後に建てられたものである。



昭和55年4月29日撮影



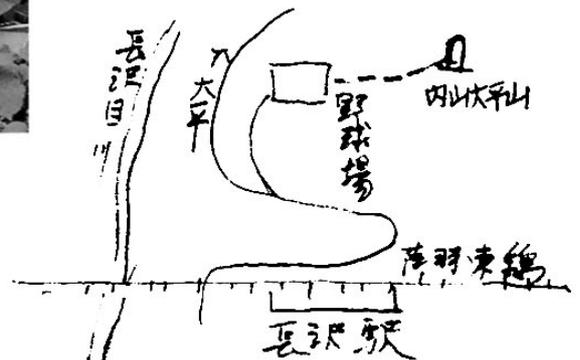
内山の太平山

【所在地】 内山

高さ1 m 55cm、巾60cm。「明治貳年己巳年四月吉日。施主当番者七兵衛」と刻まれている。



昭和62年撮影



長沢の太平山

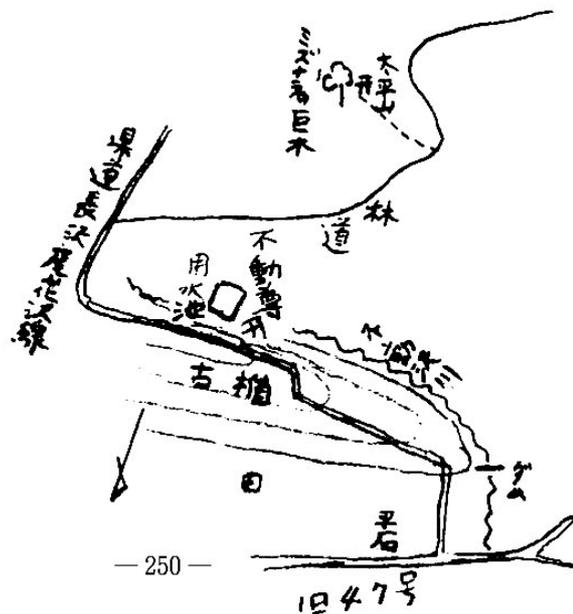
【所在地】 長沢

地元の人々から「三^ミ吉^{ヨシ}様」と呼ばれている。山の頂上に祀られている。

高さ45cm、巾35cm。安政6末年。世話人は大場和助、沼沢民蔵の2人。屋根だけのお堂に納まっている。



平成11年10月撮影



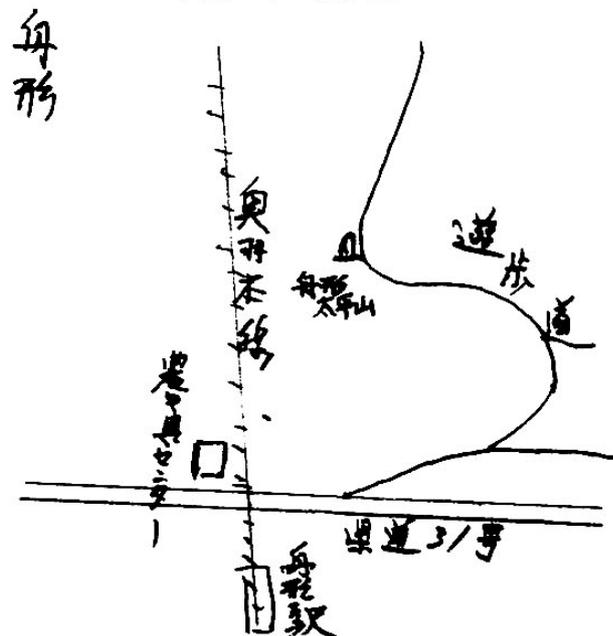
舟形の太平山

【所在地】 舟形

高さ85cm、巾45cm。「干時明治三庚午年八月八日建之」と刻んである。傍に猿羽根山遊歩道が通っている。



平成11年10月撮影



野の太平山三吉神社

【所在地】 野

高さ1 m、巾70cm。「明治二十五年丑八月八日。村中安全 世話人 岸又七、石川五郎助」
と刻んである。



昭和62年撮影



長尾の太平山三吉大神

【所在地】 長尾

碑には明治27年4月8日と刻まれている。亀割バイパス開通により、この地に移されたものである。「秋田の三吉様」は、秋田市郊外の太平山に祀られている。三吉大神は、開運の神、福の神として厚く信仰されているがそれ程信仰範囲は広くないらしい。秋田市を中心とした地方神とも云えそうである。最上地方では、ひとつの村にひとつの太平山が祀られているといってもよい位分布している（『新庄の石仏』）。この石仏はひときわ高い山で村が一望できる所に建っている。



平成5年7月撮影



移転前の写真（昭和62年）



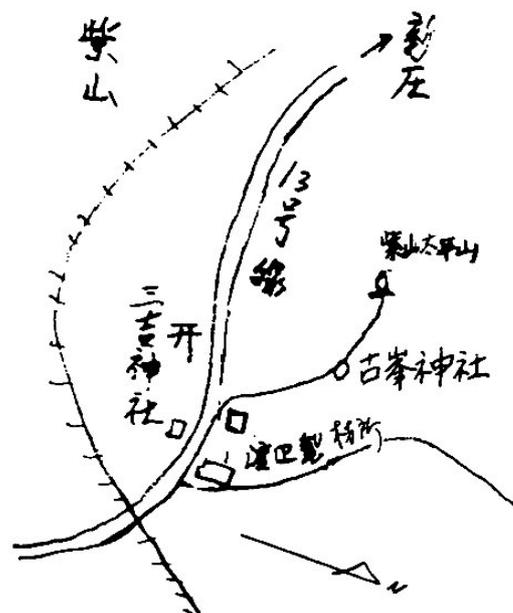
紫山の太平山三吉大神

【所在地】 紫山

高さ60cm、巾45cm。「明治二十四年八月十七日建之。願主渡部金助」と刻まれている。



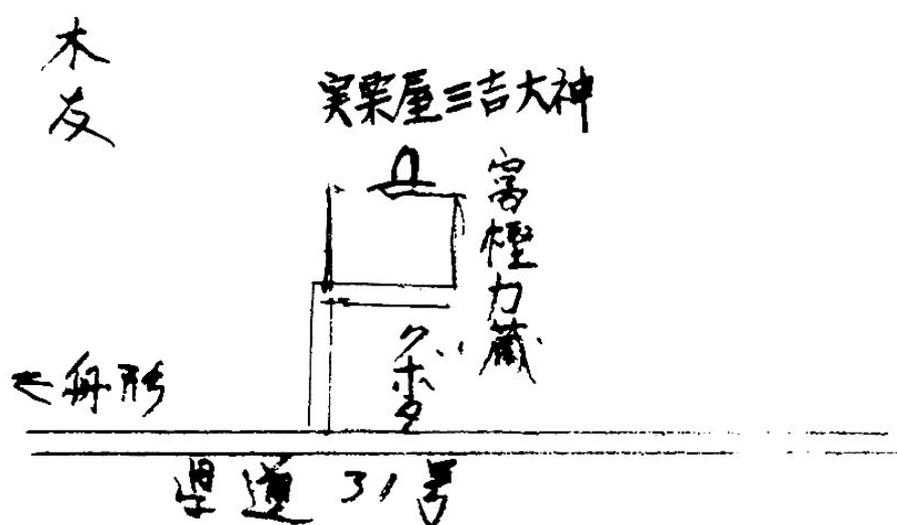
昭和62年撮影



木友の太平山三吉大神（実栗屋より移転）

【所在地】 木友

「明治廿三寅年八月十七日 東海林仁七 富樫三七 東海林乙吉 東海林万治 富樫助治郎」と記してある。元は実栗屋に建っていたが、地すべり対策により全戸移転した時、富樫さんは木友に移り、其の時現在の所に建てたものである。



昭和62年撮影

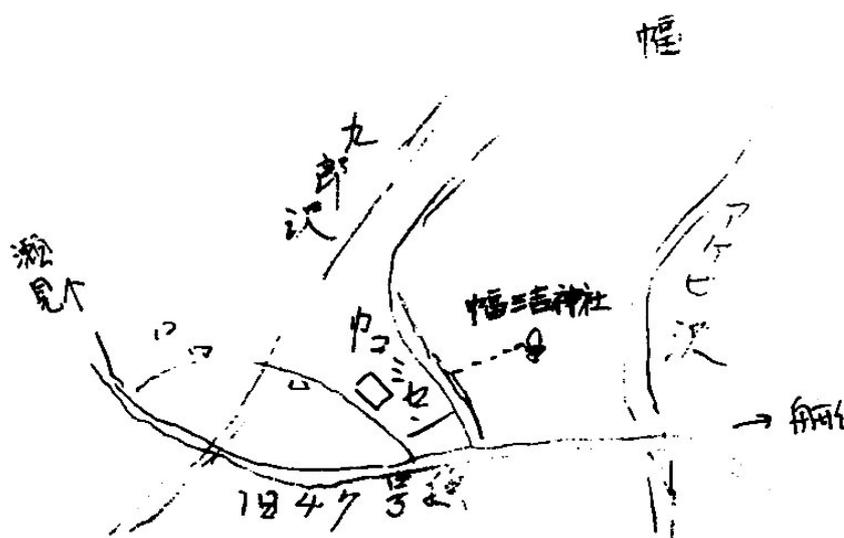
幅の三吉神社

【所在地】 幅

高さ75cm、巾40cm。「明治四十四年四月八日建之」と刻まれている。伊藤三作と云う人が背負って運んだと云われている。



昭和62年撮影



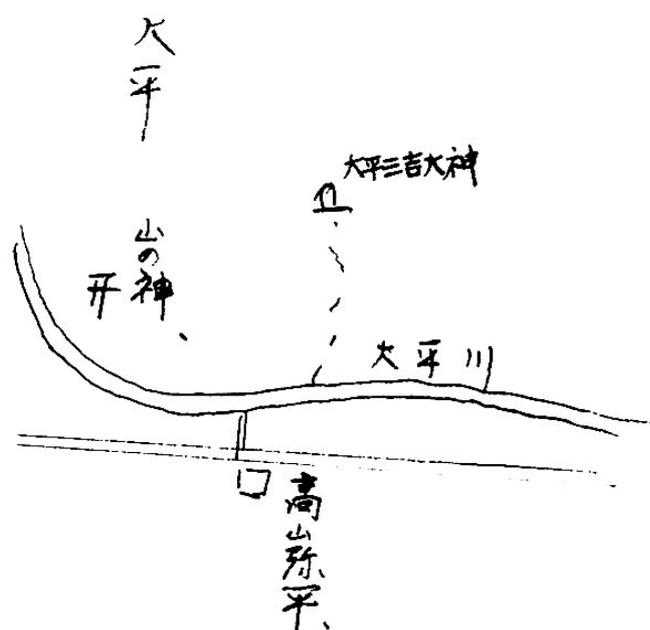
大平の三吉大神

【所在地】 大平

高さ70cm、巾50cm。「明治三十三年四月八日。伊藤伴兵衛」と刻まれている。



平成11年10月撮影



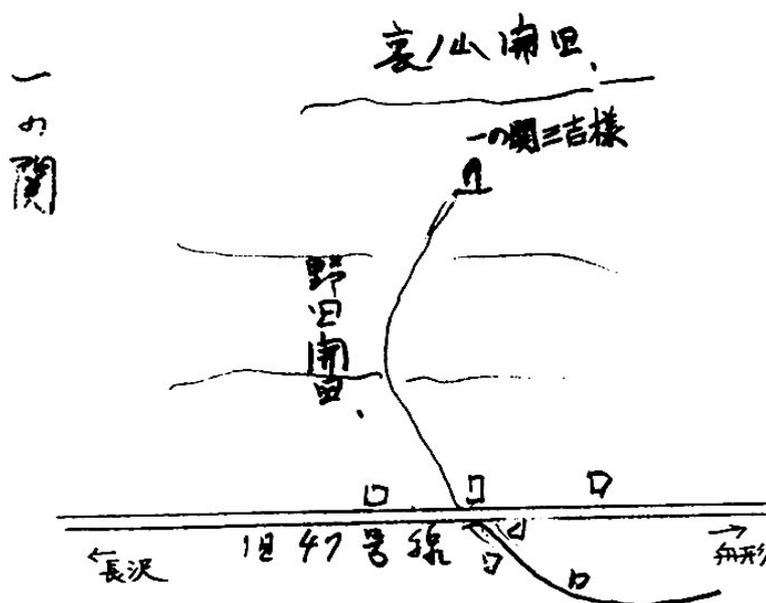
一の関の三吉様

【所在地】 一の関

文字は何も記していない。三吉様と云っている。沼沢正重氏の話によれば、昔は相撲等も行われていたそうである。荷渡権現に通じる道形が傍に残っている。



昭和62年撮影



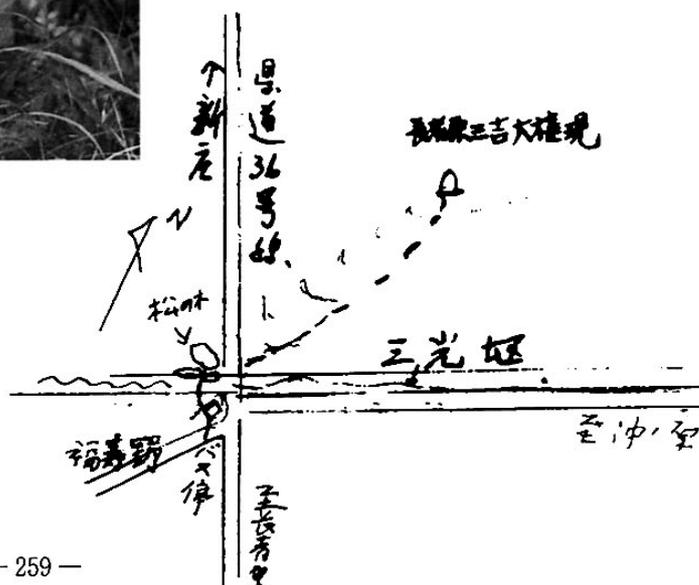
長者原の三吉大権現

【所在地】 長者原

高さ 1 m 17cm、巾 45cm。「明治十四年四月八日。小関吉右エ門」と刻まれている。



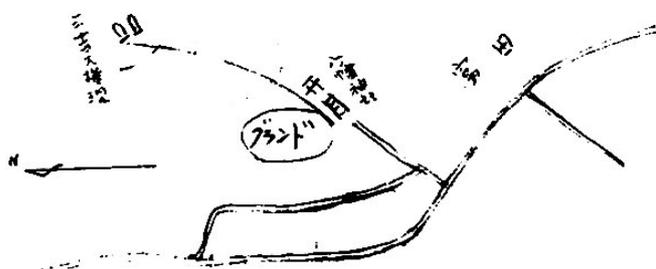
昭和62年撮影



猿羽根の三吉大権現、神明宮

【所在地】 富田

太平山、三吉神社が当町の方々に祀られている。三吉権現はひときわ高い山に建てられ、開運の神、福の神として厚く信仰されている。三吉大権現と並んで神明宮が祀られている。神明神社は天照皇大神が祭神である。神明社は、当町ではこの社と長者原相馬家の守り神として祀られている神明宮と2カ所だけである。



平成7年8月9日撮影

瀬脇の三吉大明神

【所在地】 瀬脇

高さ55cm、幅40cm。「安政三年七月吉祥日。願主因敬 諸後子孫繁栄可」とある。



昭和62年撮影



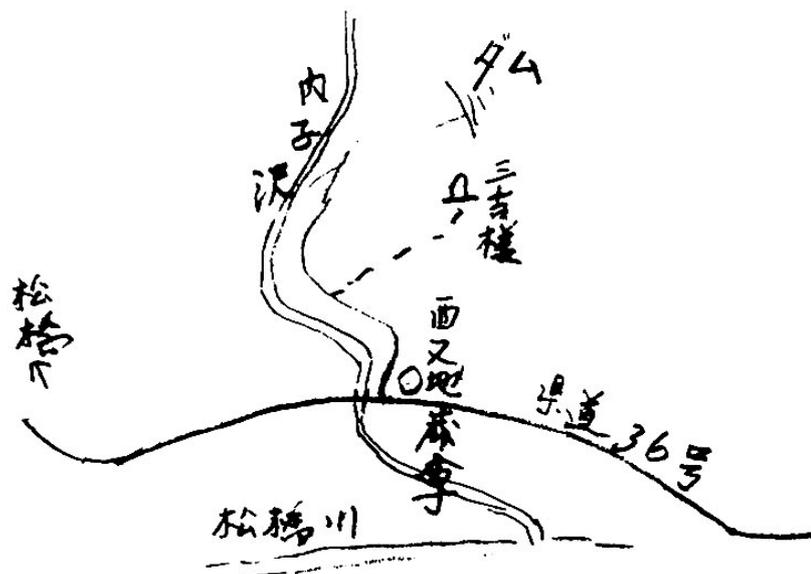
西又の三吉様

【所在地】 西の又

三吉と読めるだけである。元は朱書であったそう。左脇の「富樫丹□郎」は、地元の人に聞いたところ「富樫丹次郎」だという。



昭和62年撮影



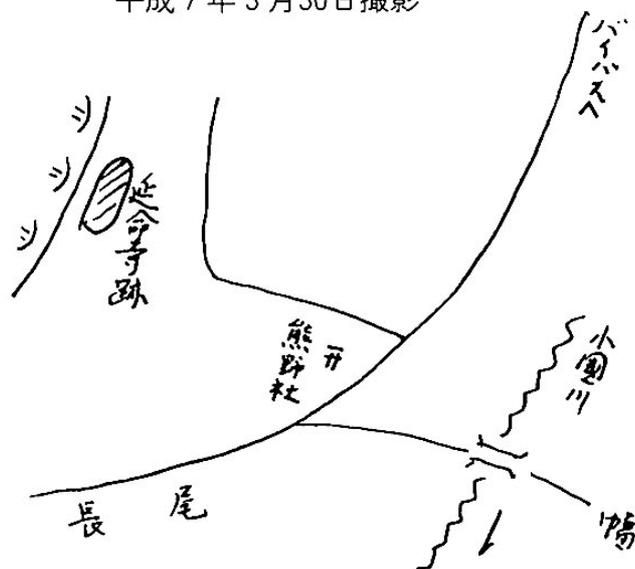
長尾の最上三十三観世音菩薩塔

【所在地】 長尾延命寺跡

長尾集落裏手延命寺跡と伝えられる所に建っている。「最上三十三観世音菩薩塔 大正九年二月十七日 世話人伊藤庄蔵」と陰刻されている。長尾山延命寺跡には中央付近に胸高周囲3mの老杉がそびえ、その根元に南に面して4基の石仏が建っている。古老によれば、長沢楯主が平石に地藏尊と延命寺を移したという。



平成7年3月30日撮影



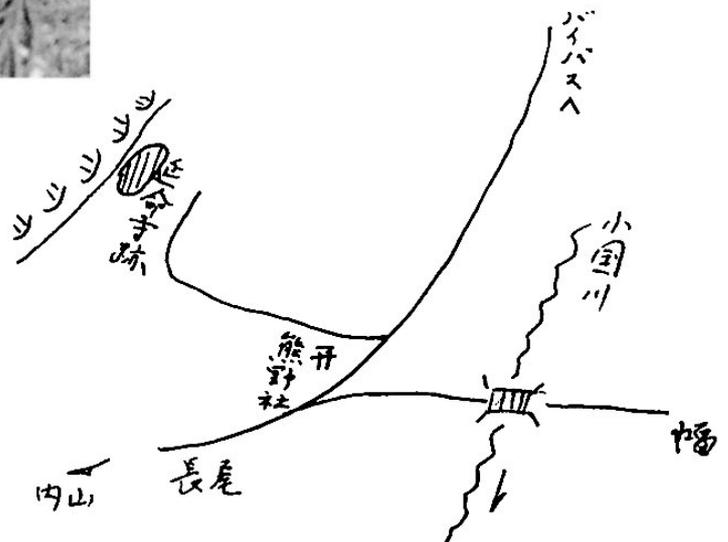
長尾の不明石碑

【所在地】 長尾

長尾集落裏手延命寺跡と伝えられている所にある石碑4基の内の1基である。文字がなく不明の石仏である。地元の古老は、無縁仏もあるということからすると、あるいは墓印に建てられたものであろうか。



平成7年3月30日撮影



内山の山神

【所在地】 内山鹿島神社境内

内山集落の鹿島神社の右側に建っている。大正10年10月16日建立されたものである。地形が高く盛り上がった所、山、そこは神霊が籠る^{コモ}聖地として原始時代から崇拝の対象となってきた。山には食料となる鳥獣や草木の実も豊富にある他、水の源泉であり、その信仰は農耕社会になってからも変わることがなかった。山を支配するのは山の神であるという観念から山神信仰が始まった。農村には昔から春に山の神が里に降りてきて田の神となり、秋には田の神が山へ帰って山の神になるという「田の神の^{コウリン}降臨」の観念が伝わっている。山の神は女神で醜女^{シコメ}であると信じられ、それで以前は女人禁制であった。



平成7年4月27日撮影

位置図は内山鹿島神社境内の頁参照

タテ
楯

ミョウ
明

ジン
神

【所在地】 長沢（楯）

長沢楯の南に大規模な土塁の一部が残っている。後年、楯集落が形成され、この土塁の一角を掘りきって道を作った。この部分を「掘切り」と呼んでいる。掘り切りの上に小さな祠が祀られている。この祠が楯明神である。祠の後ろにセンの木（ヘヌキ）の老木が生えており、楯明神の年代の古さを思わせる。



平成7年4月7日撮影

位置図は長沢楯の頁参照

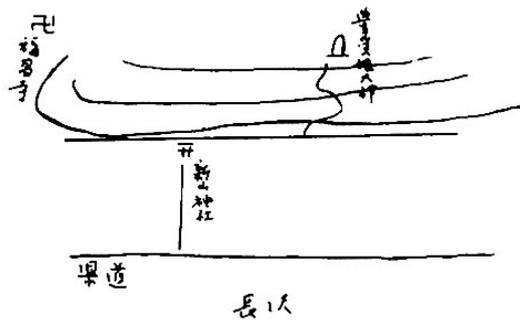
豊受姫大神

【所在地】 長沢（新山神社裏手山）

新山神社裏手の山の崖縁^{ガケヅチ}を削り取り、この碑を建てている。当町ではここだけにみる石碑である。豊受大神は伊勢神宮外宮に祀られている豊作の神。



平成7年4月27日撮影



法華塔

【所在地】 経壇原

経壇原古峯神社境内地にある。左1基は、三吉神であり、その右にあるのが法華塔である。
法華塔は当町にはただ1基だけである。建立年月日は風化して不明である。



平成5年4月5日撮影

位置図は経壇原の古峯神社の頁参照

日本大小神

【所在地】 一の関

当町にこの様な碑はただ1基あるだけである。「日本大小神」即ち八百万ヤマトヨロズの神として祀ったものではなかろうか。建立年は不明である。建立者は、郷内沼沢喜平治と記している。



平成5年12月1日撮影

位置図は一の関の柵の木の頁参照

廿六夜様

【所在地】 一の関

一の関地藏堂境内地にある。建立年は文化4年（1807）卯7月26日。塔の天部に㊦の梵字が陰刻されている。愛染明王の種子である。愛染明王は恋愛の神であり、また、婦人科の病の神でもある。「お六夜様」といって女人の神である。『新庄の石仏』によると、愛染の愛は、藍に染まるに通じる。そこでとりわけ染物業者がこれを祀った。愛染信仰は、染物業者を通じて全国的に広がったと記してある。当地方の場合は、前者であろうと思われる。平成3年11月19日、コンクリート台座に一行に10基の石仏を並べ移し祀ったと書かれている。



平成5年12月1日撮影 位置図は一の関の柝の木の頁参照

一の関の不明石碑（2基）

【所在地】 一の関

一の関地蔵堂境内にある10基の石仏の中の2基であるが、文字は不明である。



平成5年12月1日撮影

位置図は一の関の栃の木のパージ参照



足尾神社

【所在地】 舟形八幡神社境内

足尾神社碑は当町でただ1基だけである。建立年次は、明治34年6月19日と刻まれている。



平成5年5月5日撮影

位置図は舟形八幡神社の頁参照

津 嶋 大 神

【所在地】 福寿野

福寿野東入口にある。祠の中に祀ってある碑面に「津嶋大神 明治二十年六月二日建立」と陰刻されている。



平成4年12月6日撮影

位置図は追分石の頁参照

アオ 青 麻 大 神

【所在地】 福寿野

福寿野東入口に津嶋大神と並んで建っているが、建立年は不明である。中風の神様として祀ったものであるという。



平成4年12月6日撮影

位置図は追分石の頁参照

富田の不明石碑

【所在地】 富田

富田北入口にある10基の石仏の内の1基である。文字はないので何仏の碑か不明である。



平成7年3月29日撮影

位置図は猿羽根の庚申塔の頁参照

西國三十三所

【所在地】 瀬脇（黒森山）

高さ1 m、巾45cm。「安政三辰年二月吉祥日 願主 因敬」と刻まれている。



昭和62年撮影

位置図は瀬脇の三吉大明神の頁参照

ミ マチトウ
巳待塔

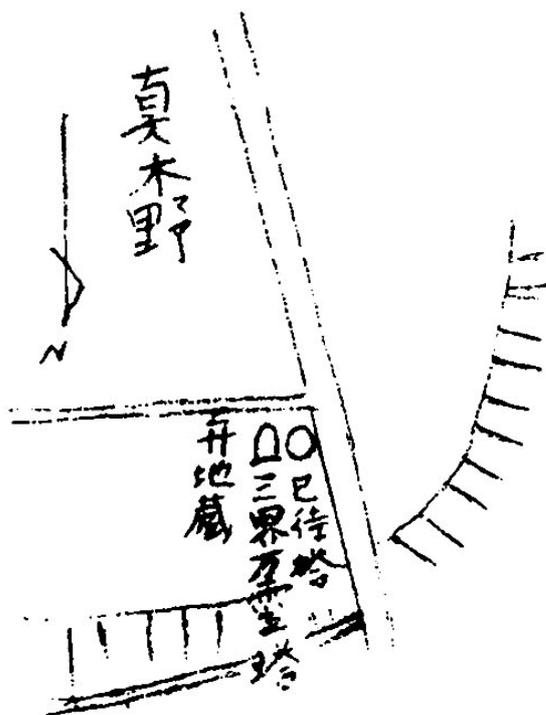
サンカイバンレイトウ
三界万靈等

【所在地】 真木野

真木野北入口の地藏堂境内にある。1基は巳待塔、1基は三界万靈等である。巳待塔は当町でただ1基の石仏である。建立年は、明和8年辛卯3月（1771）。三界万靈等も同年同月に建てられたものである。巳待講は、若衆の講であるといわれ、旧10月17日若者が集まってご馳走を食べあったという。日待の一つであったのだろう（『新庄の石仏』）。弁財天を拝む巳待講の弁財天は、古代インドに発生した水の神である。河の流れの優美さと優しい水音、そして河が人に与えてくれる恩恵に感謝し、河を神格化して美しい女神として祀ったことから始まっている。又河の流れは蛇のように曲がりくねって流れるので、十二支の巳をあてた。弁財天が主尊として祀られるようになったのは平安時代頃からと推測され、穀神である宇賀御魂神や海上の神である市杵嶋姫命と習合し、神道系、仏教系の信仰が合体したので、にわかには弁財天信仰が盛んになっていった。弁財天は、弁舌、音楽、学問、除災、幸福を与える神である（『弁財天信仰と俗信』）。三界万靈等の三界とは、一切の人々が生死を輪廻する3つの世界のことで、欲界、色界、無色界をさすと仏教でいっている。また、過去・現在・未来の三世だともいう。餓死した人々や無実の罪で亡くなった人の怨霊は、この世にとどまって人々に祟りをなすという。これらの人々の霊を弔うため建てられたものと思われる。



平成4年12月6日撮影



野の板碑

【所在地】 野

『舟形町史』によれば、長沢野部落矢野六助氏屋敷外にある巨石は中世の供養碑である。これには「慶長拾^{四カ}年やの五郎左衛門」と刻んである。佛の種子も記されているであろうが、倒れていて調査することは困難であるとしている。高さ2.3m幅99cm、厚さ26cmの大きさ。「やの五郎左衛門」は同村矢野一夫氏の先祖といわれる。

この碑は、平成7年8月初旬に野部落の北方ゲートボールコート向いに移され、コンクリートを土台にして再建された。現在では文字らしいものは認められるが、判然としない。



平成7年8月11日撮影

位置図は野の庚申塔の頁参照

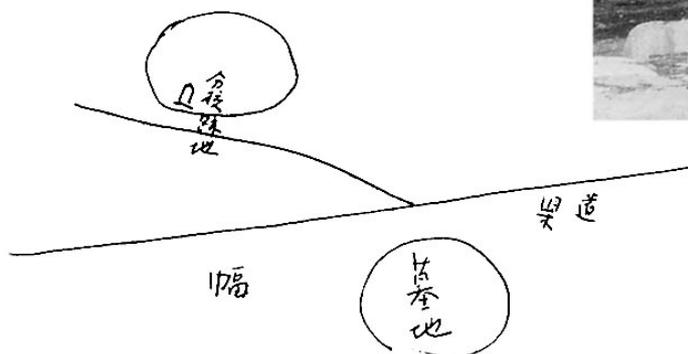
幅分校記念碑

【所在地】 幅

碑文によると、明治18年に和風平屋建の長沢小学校幅分校が開校された。しかし、近年になって過疎化が進み、それともなって学童も激減し、昭和63年3月、幅分校は長沢小学校に統合されて、閉校となった。時代の波とは云え、この分校に学んだ多くの人々にとってはさびしさも、ひとしおのものがあった。この記念碑は、このような人々の思い、そして、新しい時代の教育の振興を願いながら建立されたものである。



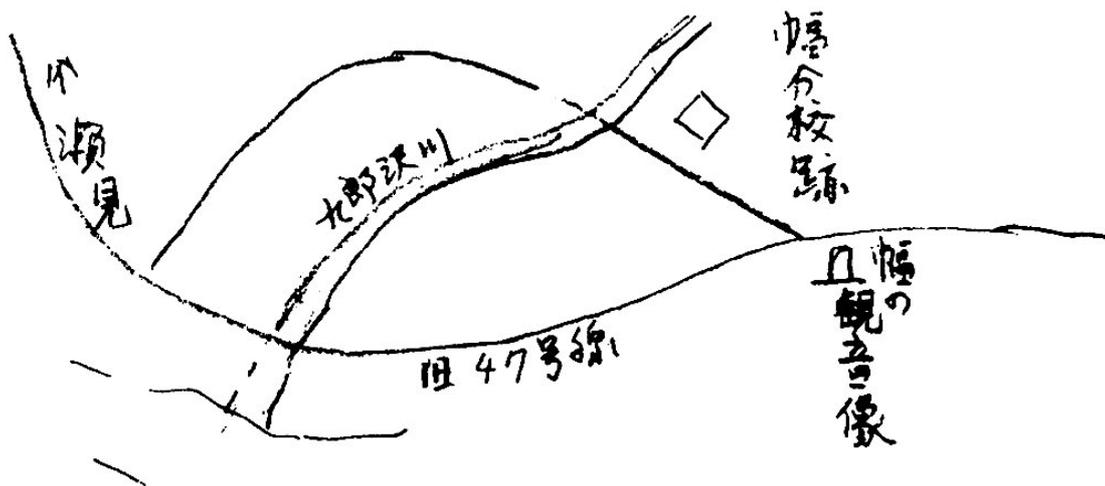
平成7年4月5日撮影



幅の慰霊碑（観音像）

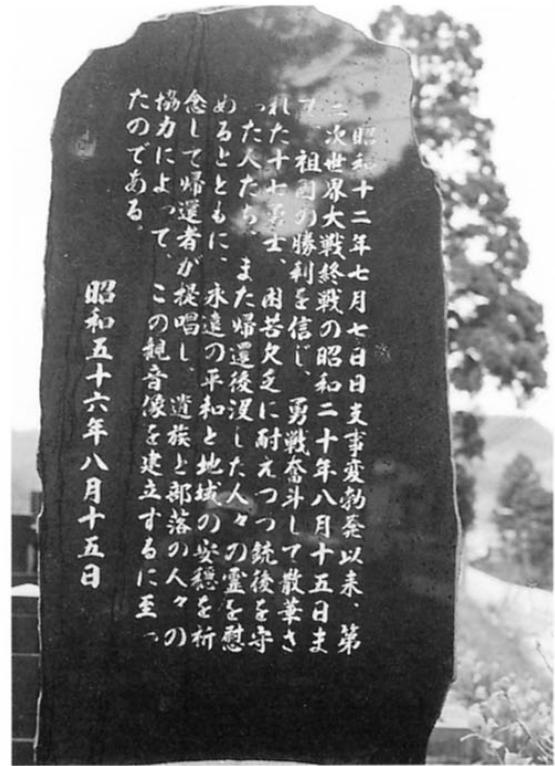
【所在地】 幅（墓地内）

幅の墓地入口に観音像と石ぶみが建っている。碑には「昭和12年7月7日日支事変勃発以来、第二次大戦終戦の昭和20年8月15日まで祖国の勝利を信じ勇戦奮闘して散華された17勇士、困苦欠乏に耐えつつ銃後を守った人たち、また帰還後没した人々の霊を慰めるとともに永遠の平和と地域の安穩を祈念して、帰還者が提唱し、遺族と部落の人々の協力によって、この観音像を建立するに至ったのである。昭和五十六年八月十五日」と刻まれている。又、観音像の台に戦没者の氏名を記している。





平成7年4月27日撮影



碑文である

長 沢 中 学 校 記 念 碑

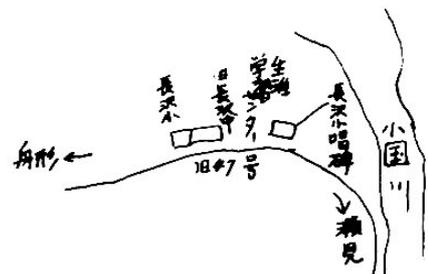
【所在地】 長沢小学校前

昭和22年、「新制中学校」の制度により、舟形村立長沢中学校が「東部小学校（長沢小学校の当時の名称）」に併設の形で、設置された。校舎は、その後、昭和23年に木造で4教室だけ新築し、同25年に増築があり、体育館は、同28年に新築された。

平成10年3月31日を以て、長年の教育的課題であった「一町一中学校」による舟形中学校との対等合同のため閉校した。

長沢中学校は創立されてから51年、この半世紀の間、地域の文化の中核として大きな役割を果たし、この学び舎から、2,357人の若人が巣立った。その閉校の証として後世に伝えるため、平成10年10月、地区民により記念碑が建立された。

平成11年3月 長沢中学校閉校記念誌発刊（長沢中学校閉校記念事業実行委員会）



長沢中学校校歌

しと いち 作詞
完 戸 一 郎
く 藤 八 郎 作曲

一 水すみとおる 小国川
早瀬におどる 鮎のごと
まなぶ われらの 長沢中
知識をここに 求めては
ああ 究明のよろこびに
真理のとびら ひらくもの
かがやけ かがやけ

そのゆくて

二 丘に川べに 校庭に
希望語らい むつましく
つどう われらの 長沢中
心身ここに きたえては
ああ 勤労のよろこびに
めぐみの町を おこすもの
かがやけ かがやけ

そのゆくて

三 四季うるわしき ふるさとの
花を紅葉を かざしもち
かよう われらの 長沢中
徳義をここに みがきては
ああ 友愛のよろこびに
自治の校風 きずくもの
かがやけ かがやけ

そのゆくて



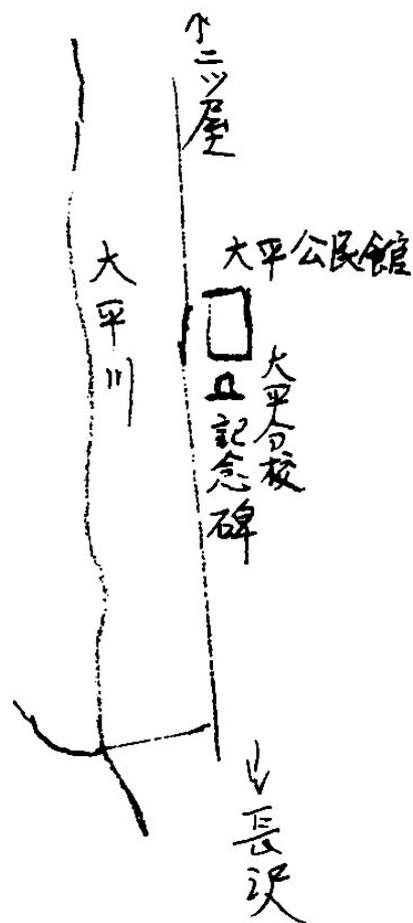
大平分校記念碑

【所在地】 大平

昭和60年3月、大平分校は、舟形小学校に統合されて廃校となった。地区の人々は深い思いを込めて立派な記念碑2基を建立した。碑には「分校六十有余年の歴史を思いつつ、想いを部落の未来に馳せる」、「長沢小学校大平分校跡地 昭和六十年三月三十一日」と刻まれている。



平成5年5月5日撮影





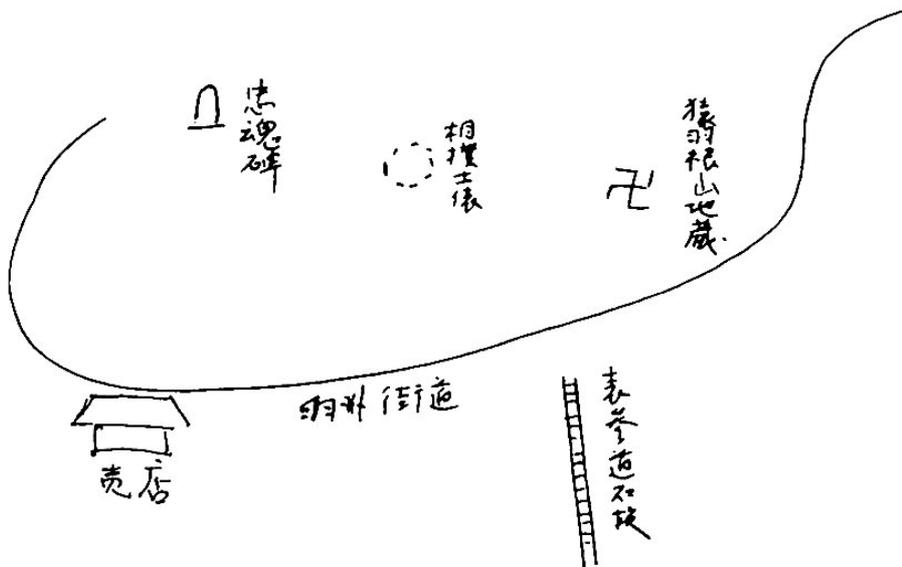
猿羽根山の忠魂碑

【所在地】 猿羽根山山頂

猿羽根山山頂に堂々たる忠魂碑が建っている。揮毫^{キゴウ}は元帥子爵川村景明で、大正10年10月31日帝國在郷軍人会舟形分会有志一同によって建立されたものである。この碑は日清戦争の町内戦死者3名、日露戦争の戦死者7名の英霊の鎮魂碑である。更に今時大戦迄の戦死者を加え約300名の英霊が合祀されている。その後、傷みも激しくなったので、補修工事委員会を発足させて寄付を募り、募金額30万円をもって補修工事を施し、昭和42年6月23日定泉寺梅津和尚の読経のもとに落慶式を行った。かくして立派に衣替えしたのである。(広報『ふながた』)



平成7年3月29日



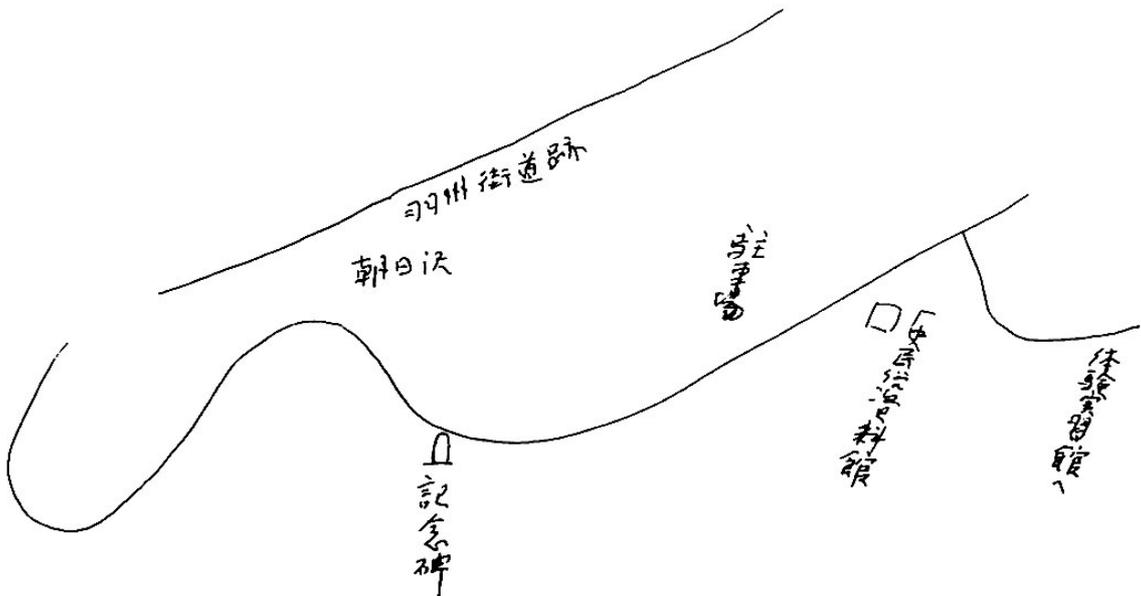
猿羽根山の明治天皇御巡幸記念碑

【所在地】 猿羽根山

山形教育会編『明治天皇最上郡御巡幸記』には「舟形町村朝日沢に御召換所あり。此より一路^{ウキョフ}紆曲して登る。土^{アカ}赭く樹稀なり。これを猿羽根峠という。御板輿に召して渡御し給ふ」とあるが、この記述は正確とはいえないようである。当日巡幸の光景を見た舟形小学校訓導中野豊政や舟形村の星川某という老人の記憶によれば、天皇の乗物は板輿でなく馬車であったという。「予が当時の彼の他にありて見聞するところによれば、御板輿は御用いなく、舟形の若者20人^{モモヒキ}股引、草鞋^{ワラジ}に白襪^{クスキ}をかけ、御馬車に長き綱をつけ之を引きて御馬を助け供申上げ、朝日沢の御召換所は御用いなかりしという」と中野豊政は記している。三島県令によって開削された猿羽根新道は天皇巡幸のためのものであったので、この記事は本当であろう（『舟形町史』による）。



平成 5 年 11 月 25 日 撮影



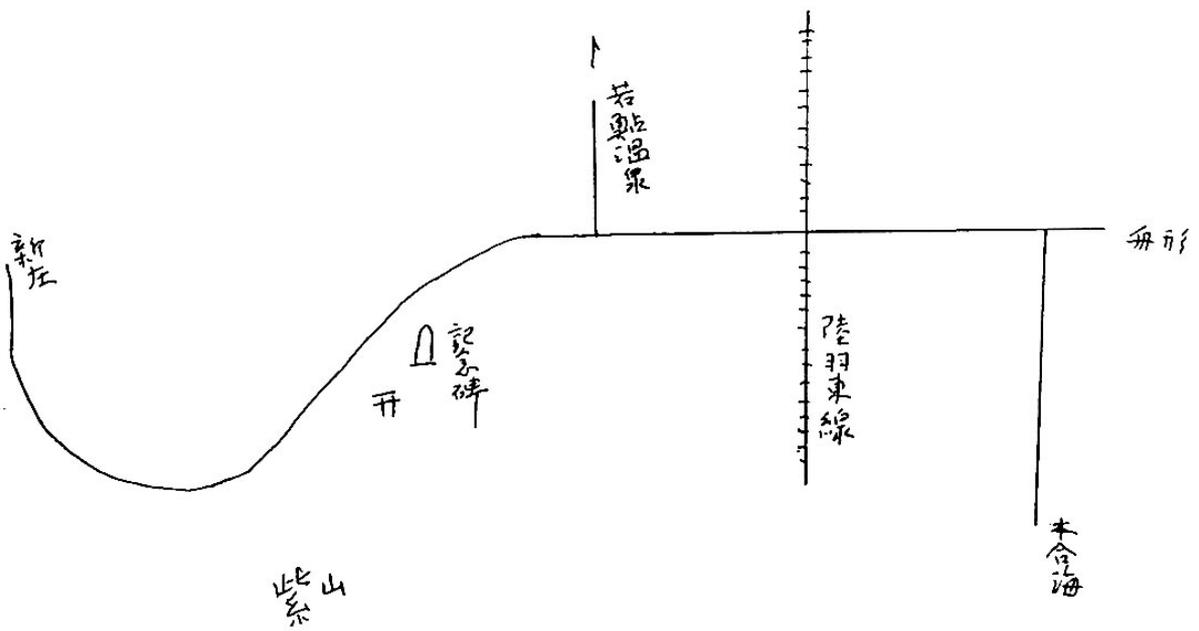
紫山の明治天皇御巡幸記念碑

【所在地】 紫山

紫山国道脇に建っている。明治10年代に集中的に行われた明治天皇の巡幸の目的は、天皇の「地方民情視察」であるが、真実は國家の威容を人民にじかに示すことにあった。この年7月に東京を出発した天皇一行は、福島・岩手・青森を経て北海道に渡り、その後、再び青森に戻り、秋田から及位・金山を経て新庄に入った。9月22日、新庄で1泊して翌日庄内に向かう。27日、庄内から再び新庄に帰り、翌28日山形へ向かって出発した。午前7時10分、新庄行在所を出発。途中、最初に立ち寄った所は、舟形村四ツ屋細梅九左衛門の開墾場であった。この日は残暑が厳しい日であった。ここで天皇は西瓜を召し上がったという。細梅開墾場は、楯岡の細梅九左衛門の養子寛六が開いたものである。寛六は明治12年東京駒場農学校を卒業した人で、舟形村の官有原野を払下げ、実兄原田吉衛門と共同で開墾を始めたと言われる。当時としては最新の農業技術である洋式農具プラオの実演をして、天覧に供したという。この時細梅は「農事の改良進歩を計れり」と、天皇から木盃及び金帛（こがねと絹）が下賜された。記念碑には「明治天皇御小休憩所」と揮毫されている。昭和5年9月子爵正己の書である。



平成5年5月10日撮影



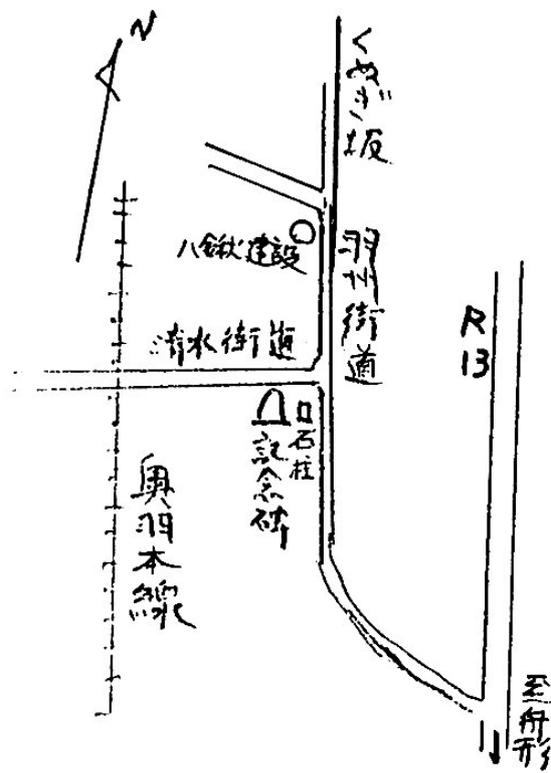
戊辰戦争舟形口合戦記念碑

【所在地】 紫山

紫山は、戊辰戦争舟形口合戦で7名の戦死者を出した激戦地であった。紫山町内会 有志一同は、地域づくりの一環として後世に伝えようと基金をきょ出して、昭和61年11月に羽州街道と清水街道の接する所へこの記念碑を建立した。また、これより約50m舟形寄りの路傍に「是ヨリ一丁奥官軍長州藩 大野坂次郎戦死之墓有 正七位安村^{不明}□□建、右側面に明治十七年八月十九日」と陰刻されている石柱があった。これもここに移した。

碑の全文を掲げると「戊辰戦争舟形口合戦古戦場 慶応4年（1868年）7月13日この地で薩長、新庄藩を主力とする新政府軍と庄内藩を中心とする奥羽同盟軍の激しい戦いが行われた。密かに小国川を渡った庄内勢は、北岸に布陣した政府軍を急襲した。白刃を交えての激戦数刻、政府軍は大敗、新庄に退いた。この戦いで新庄藩士6名、長州藩士1名が戦死した。うち4名の墓がこの奥地にある。」

裏面に「この碑は地域づくり事業の一環として、ふるさと紫山の歴史を広く後世に伝え、地域づくりの象徴として建立する 昭和61年11月吉日 紫山部落会 地域づくり」



三光堰記念碑

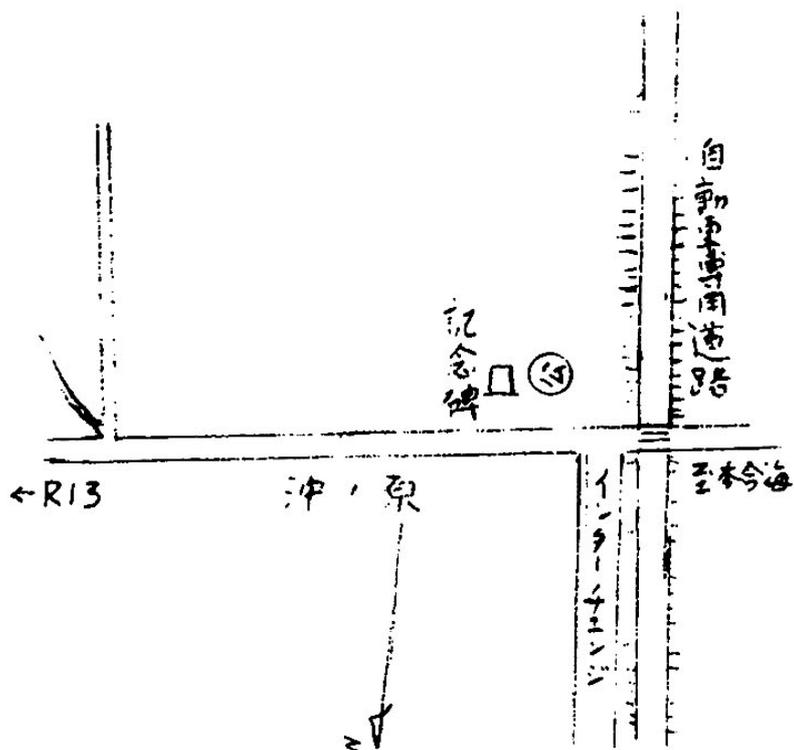
【所在地】 沖の原

三光堰が走る小国川右岸の開拓の歴史は藩政時代にさかのぼる。すなわち、藩政時代^{カエイ}嘉永の改革の一環としてこの地の開発が計画され、米沢藩より遠藤仁左衛門を招き開墾に着手した。安政2年、遠藤^{ショウレイ}の奨励により、紫山^{ウルシ}に漆、楮^{コウゾ}、桑等植え立てた。一方藩は、福寿野開拓を計画した。嘉永の改革の中心人物吉高勘解由は腹臣の郡奉行佐久間浅右衛門、平賀庄右衛門、小野十左衛門^{ツカフ}を遣し、安政元年、村山郡藤助新田、岩木沢、台村等無高の百姓13人を入植させ開拓に当たらせた。当初、長沢地区道袋からの通水を試みたが失敗したので、次いで長者原地区七折沢奥^{タメ}に溜池を築き、福寿野へ通水しようとしたが、これも十分でなかった。しかし、福寿野より海拔が低い長者原字日金への通水に成功し、開田することができた。現在もその水路跡が残っている。その後、明治10年頃、小沢善政という人が開田を試みたが失敗した。また、明治23年、秋田県平賀郡増田村の豪農石田幸之助が大規模な水田計画をたて、同25年^{ショカツカンガ}所轄管衙に予約開墾を出願した。彼は県技手佐藤昇を招き測量したが、大規模な幹線水路工事迄には至らなかった。予約年限の同39年開拓はようやく完成し、宮城大林区署へ払下げ願いを提出、同41年11月許可になった。かくして、この地は石田の所有地になったのである。

翌42年、東京芝白金三光町の堀卯三郎は、石田の所有地の一部を購入し、石田の親族である杓沢との共同所有地とした。堀は東京福沢諭吉家の出資を得て三光合資会社を創設して長大な三光堰を開削し、開墾事業に着手した。堰の名は氏の住所の名をとったものである。大正2年度から耕地整理法によって工事をすすめ、大正6年に至り沖ノ原の一部に通水開田した。その後、小作料金納反当30円となったので三光会社は維持困難となった。太平洋戦争後は、三光堰改修工事は、地元の熱意によって昭和22年度から県営事業として採択され今日に至っている。(『三光堰史』・『舟形町史』)



三光堰土地改良区設立30周年記念碑
 自治大臣 安孫子藤吉書 昭和56年 9月12日建立
 平成 7年 3月29日撮影



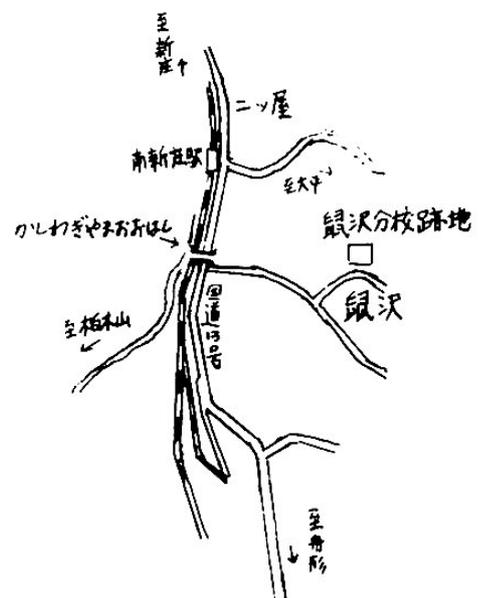
鼠 沢 分 校 跡 地

【所在地】 鼠 沢

鼠沢分校は、昭和21年に、当時この地区で採炭をしていた、中山炭坑の事務所の一部を借用し、舟形小学校の分教場として開校したものである。

その頃は亜炭産業の最盛期で、この地区にもたくさんの住居が立ち並び採炭にあっていた。この地の子供たちは、山奥の悪路を4kmも歩き舟形小学校まで通学していた。冬季間の通学は低学年の子供にとっては、特に厳しかった。そこで地元住民の強い要望で、1年生から3年生までの複々式の1学級の分校を設置する運びになったという。また、冬季間は6年生まで全員分校に通学し、学習するようになった。その後、児童数も増え、昭和34年には、校舎の増改築などもおこなわれている。昭和35年の記録によると、その年の在籍数は、男12名、女14名、計26名となっている。ちなみにその時の舟形小学校、本校在籍数は517名で学級数16、太郎野分校、児童数は46名、学級数2（6年生まで）と記されている。

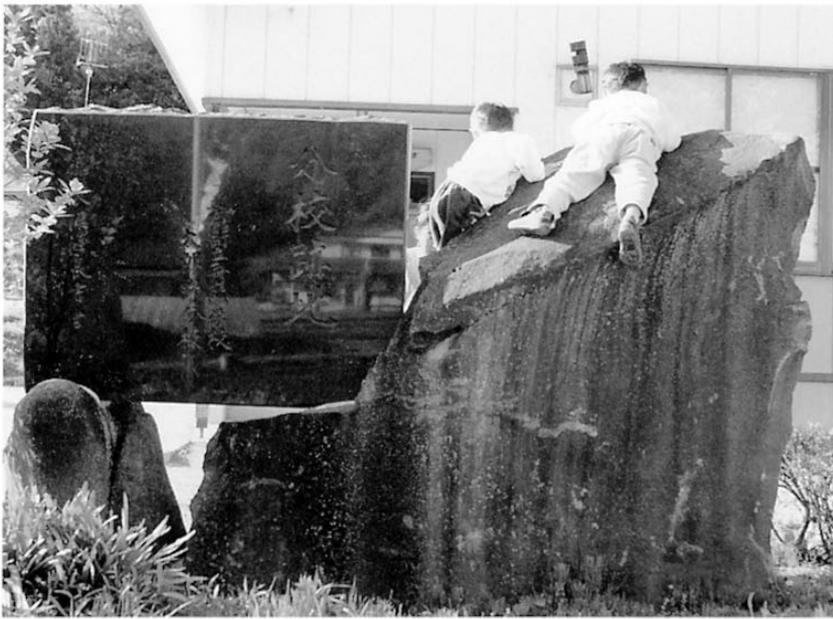
しかし、その後の燃料革命により、採炭夫の減少にともない児童数も激減したため舟形小へのバス通学となり、昭和39年3月28日をもって閉校した。



太郎野分校記念碑

【所在地】 太郎野

昭和60年に閉校された太郎野分校の跡地に、当時の町長の筆による「分校跡地 舟形町立舟形小学校太郎野分校」の記念碑がある。裏面に「昭和六十年三月三十一日、八十五年の歴史を閉ず。平成元年十一月吉日建立 太郎野町内会」とある。太郎野地区も亜炭産業が盛んであった頃は生徒数も多く賑やかであったが、時代の変遷によって廃校のやむなきに至ったものである。



平成7年5月7日撮影



太郎野の記念碑（開田、鉾害復旧）

【所在地】 太郎野

昭和33年4月、最上川からの揚水による開田事業が施行された。事業費1,650万円、総面積23ha、同年6月完成。その後、同じく最上川より揚水し、檜原地区の開田に着手、開田面積23ha、合わせて46haとなり、一戸当たり平均耕作面積は、2.5ha余となり、町内随一の耕地を有するに至った。太郎野地区一帯は亜炭の豊富な埋蔵量を有し、これが採掘され、燃料として各地に供給された。しかし、燃料は、その後程なくエネルギー革命により亜炭から石油へ変わり、亜炭山は閉山された。これにより採掘跡地の耕地に陥没或いは地盤沈下、水田の漏水等の被害が続発した。昭和50年、通産省は鉾害地区と認定し、同年8月国及び県補助による鉾害復旧事業に着工し、総工費2億4600万円の巨費を投じ、昭和54年3月、23.6haの水田が復旧された。地元佐藤伊松氏の歌碑が添えられてある。歌碑には「最上川 清き流れを汲み入れて 開田廣く黄金波打つ」とある。

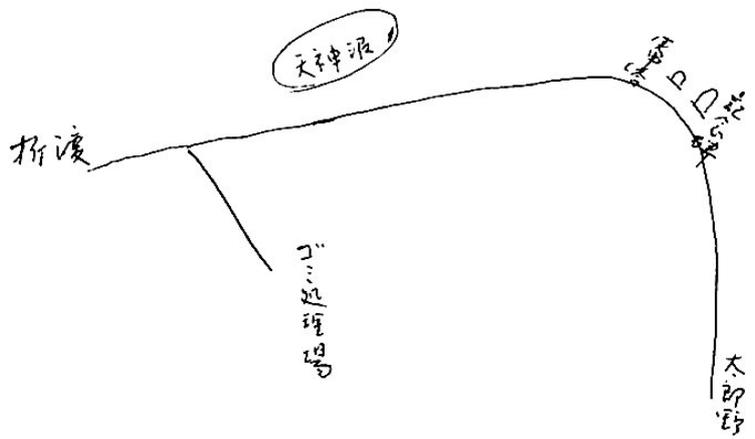
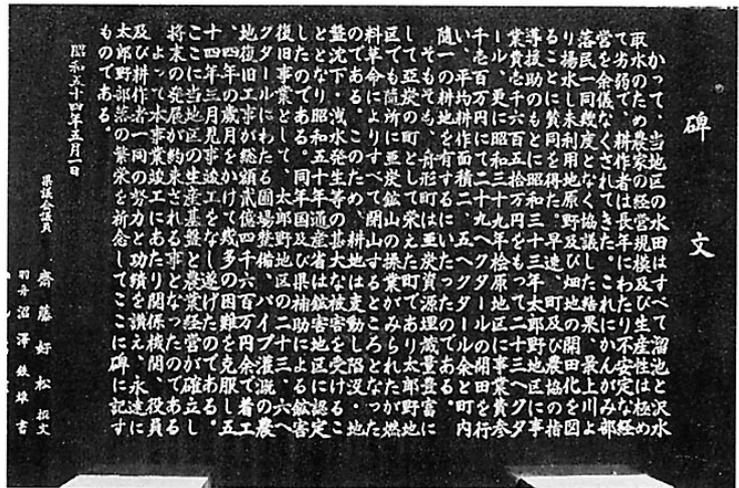


平成7年5月7日撮影



歌碑

最上川清き流れを汲み入れて
開田廣く黄金波打つ



福寿野開基記念碑

【所在地】 福寿野

福寿野西方村はずれの小高い丘の上にこの碑が建っている。碑面には「平賀庄右衛門種祐
佐久間浅右衛門藤原定恒 小野十右衛門平親豊」と刻まれ、その右側面には「福寿野村開
基安政元寅年（1854）七月廿日」、左側面には「原田喜三郎、奥山惣助」と刻まれている。
福寿野へ移住した人たちは、村山郡藤助新田、岩木村、台村の無高の人達12～13人だった。
当初、福寿野の人たちは長者原村日金地区を開田した。また、長者原村小国久右衛門、その
子政吉も、福寿野開拓で親子2代にわたって尽力し、その褒賞として藩から戸ノ字朱盃と帯
刀免許状が与えられた。しかしこれも、筆舌に尽くし難い生活苦のため手離してしまったと
いう。この開墾碑は当時を物語る歴史資料として貴重である。

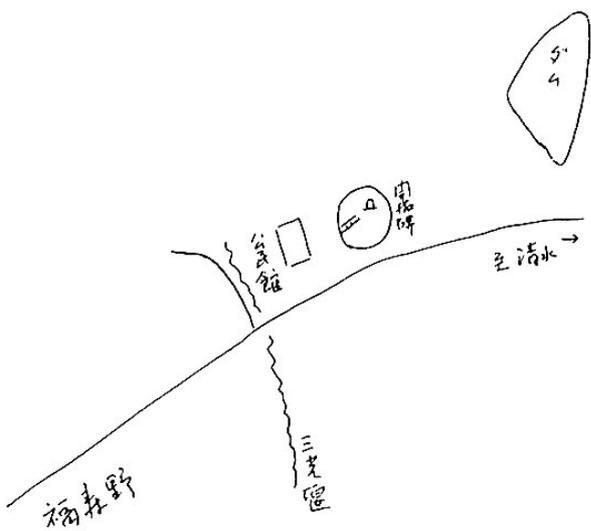
〔『舟形町史』、『三光堰史』に詳しい。〕



昭和62年 4月28日撮影



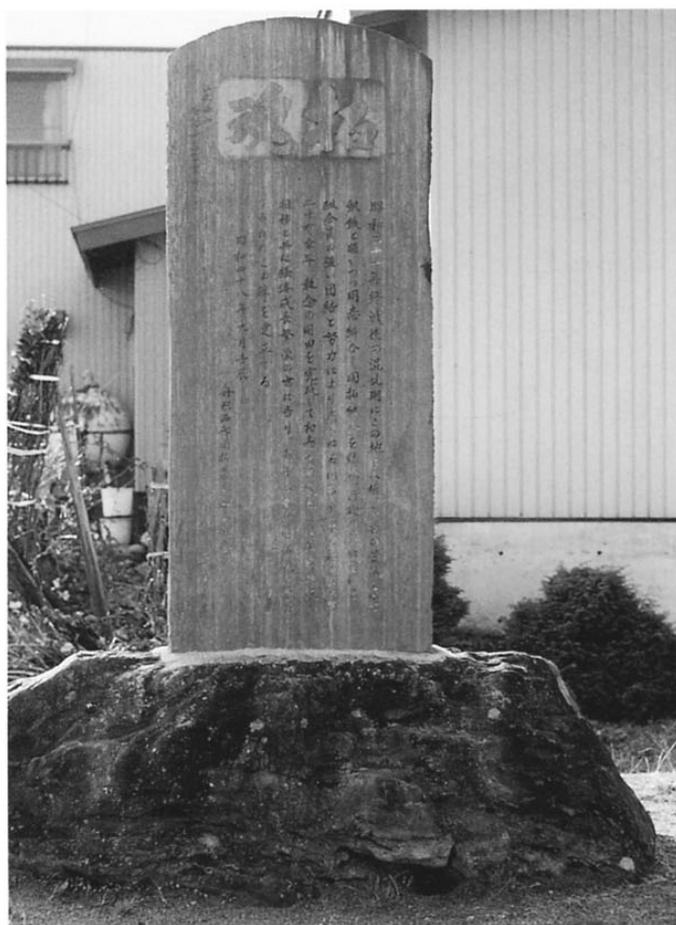
碑面に「福壽野村開基安政元寅年七月廿日」とあるのが微かに読める。



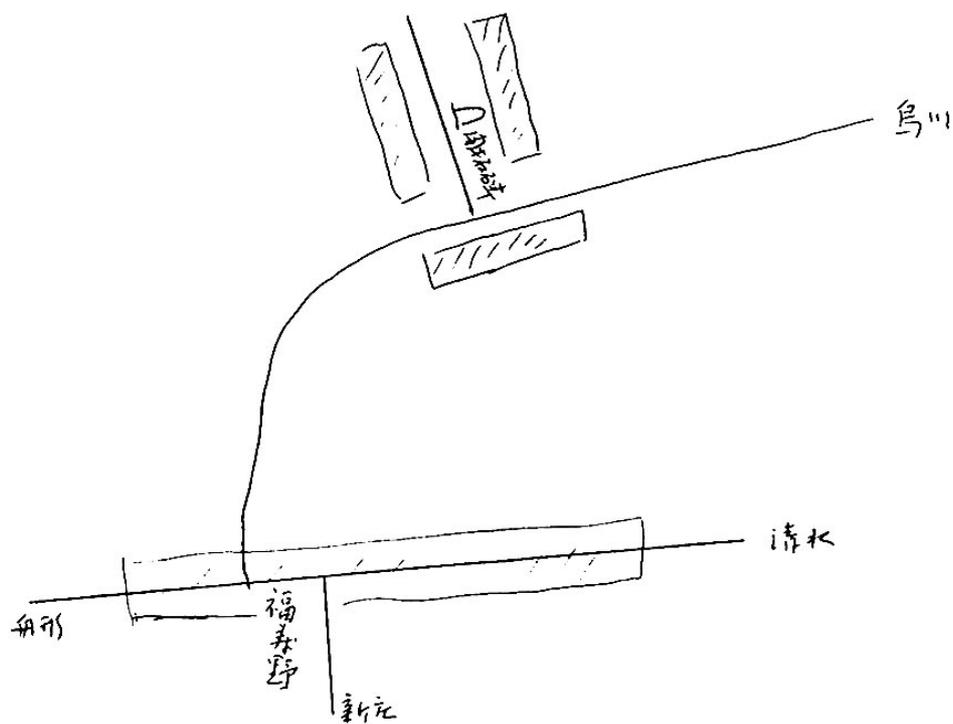
福寿野の開墾碑

【所在地】 福寿野

福寿野と馬形部落の間ほどに集落がある。当初は福寿野開拓と呼ばれていた。現在福寿野集落に包含されている。戦後食糧増産が叫ばれ、当初より開田を目的として開かれた集落である。第1回入植者は昭和21年4月15戸、翌22年は10戸計25戸が入植した。佐藤清志氏の「思い出」によれば「食料難に追われ、山又山を歩き廻り、山菜の恩恵に浴したことも忘れられないその頃の思い出である。」と記しているように、当初はどの家も苦難の道を歩んだ。福寿野開墾は、舟形西部開拓農業協同組合を組織し、昭和26年9月30日に三光堰水利権利用協定書を結び、本格的に水田化に着手した。昭和50年4月20日、同組合は所期の目的を果たし得たので27年の歳月を経て解放した。昭和48年9月に建立した「拓魂」の碑は、まさにこの苦闘の歴史を子々孫々まで語り継ぐであろう。



平成4年12月6日撮影



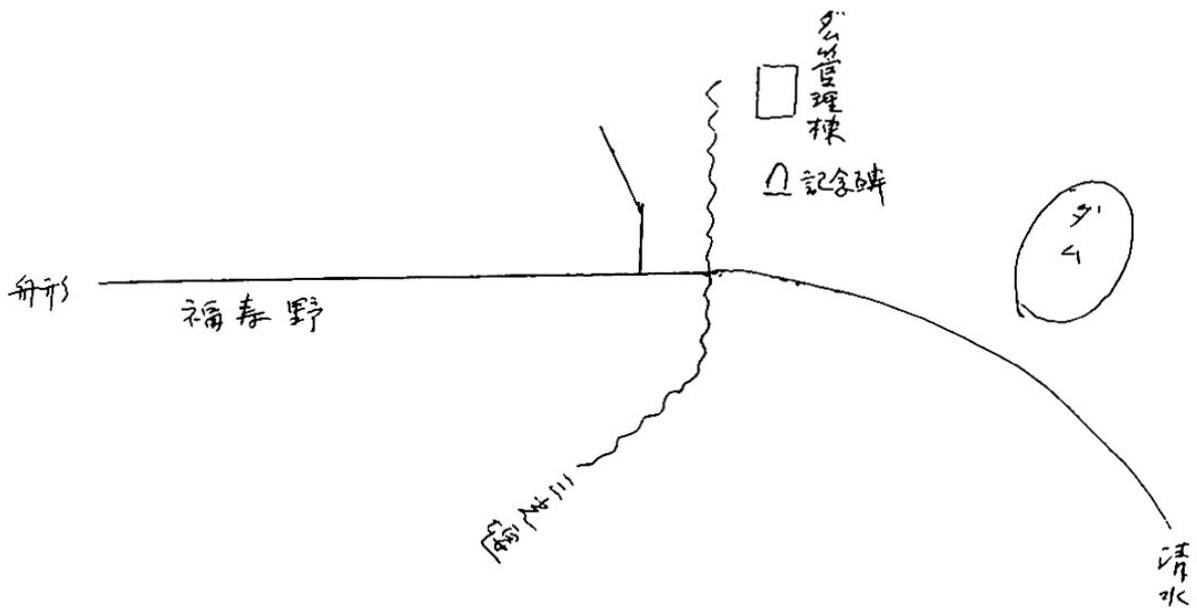
三光堰土地改良竣工記念碑

【所在地】 福寿野

本用水路は、大部分山腹や盛土上に築造されたため、地盤不等沈下、土砂崩壊等により、漏水^{ロウスイ}や機能低下をきたしていた。また、漏水などによって下流部の農地、農業施設、公共施設、人家等に多大の被害を及ぼすようになったので、これを防止するため、昭和53年度より用排水施設整備事業が、県営事業として着手され、その後13年の歳月を費やして約17kmの内主要区間の改修を完成した。事業の経緯と完成を記念してこの碑が建立された。



揮毫 山形県知事 板垣清一郎 平成7年4月6日撮影



富田圃場整備記念碑

【所在地】 富田 祈祷塚

碑の上部に圃場整備、ホーヤ沢開田と記されている。この圃場整備事業は、最上川の氾濫^{ハンラン}によって、毎年のように悩まされていた富田地区水田の整備をねらいとした事業である。地元民の陳情によって小国川は富長橋下流より建設省直轄^{チョウカフ}1級河川に昇格した。しかし護岸堤防築堤に際し、堤敷で大面積の水田が潰^{ツブ}れるため、反対農民も出、その代替地としてホーヤ沢総面積50haの地が当てられた。この地の開田は揚水機による開拓パイロット事業として行われることになり、増反開田事業に着手された。これによって、ようやく小国川左岸堤防が築堤されたのである。この堤防完成後、堤内の圃場整備事業に着手し完成したのである。堤防完成後も最上川の氾濫^{ハンラン}による堤内の溜^タまり水の排水される場がなく、冠水の被害が出た。この対策として、排水ポンプを施設したので、富田の水田の水害は全くなくなった。この大事業を後世に伝えるべく碑が建てられた（ホーヤ沢の受益者60名である）。



記念碑には、国務大臣 松沢雄蔵氏の揮毫で「竣功記念碑 昭和51年9月吉日
富田土地改良区」と記されている。 平成7年3月29日撮影

位置図は祈祷塚一般杉の頁参照

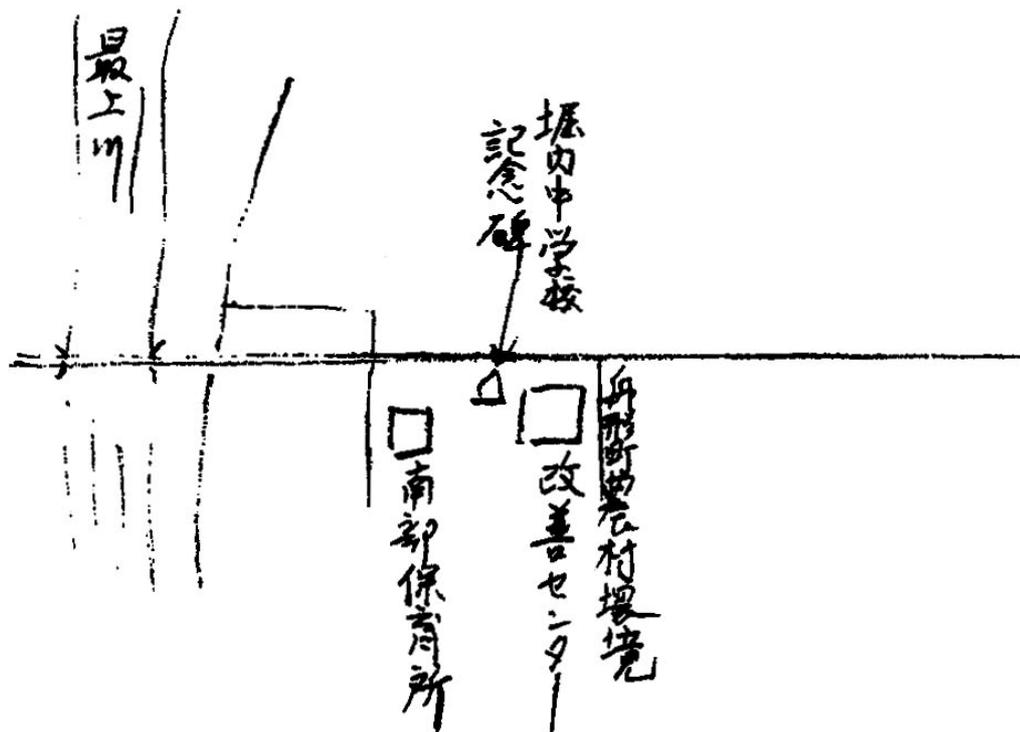
堀内中学校記念碑

【所在地】 町農村環境改善センター敷地内

元町立堀内中学校校庭道路際に同校の閉校記念碑と同校の校歌を陰刻した碑がある。碑文は、同校の歩みを次のように記している。学制改革によって義務制の中学校が堀内小学校に併設されてから14年の星霜を経て、独立校舎がこの地に建てられた。以来22年、堀内中学校は創立以来36年間営々として歴史を刻み、1,544名の若人が巣立った。しかし、生徒数の減少と時代の変遷に如何ともなし得ざる状況となり、昭和58年3月31日、同校は舟形中学校と統合することとなり、閉校することになった。

堀内中学校閉校記念文集発刊（堀内中学校閉校実行委員会・堀内中学校同窓会）

次ページに堀内中学校の校歌を記して置いた。





校 歌

作 詞 結 城 哀 草 果

作 曲 山 口 の ぶ

1. 瑞山のめぐる堀内 鳥海山遠くに聳え

すこやかにわれらは育ち 中学につどい学べば

真理の蕾ふくらみ うつくしき花は開かん

2. 最上川ひかる堀内 その流れ浄化はげみて

すこやかにわれらは育ち 中学につどい学べば

正義の幹は真直に 歴史の空に立たなん

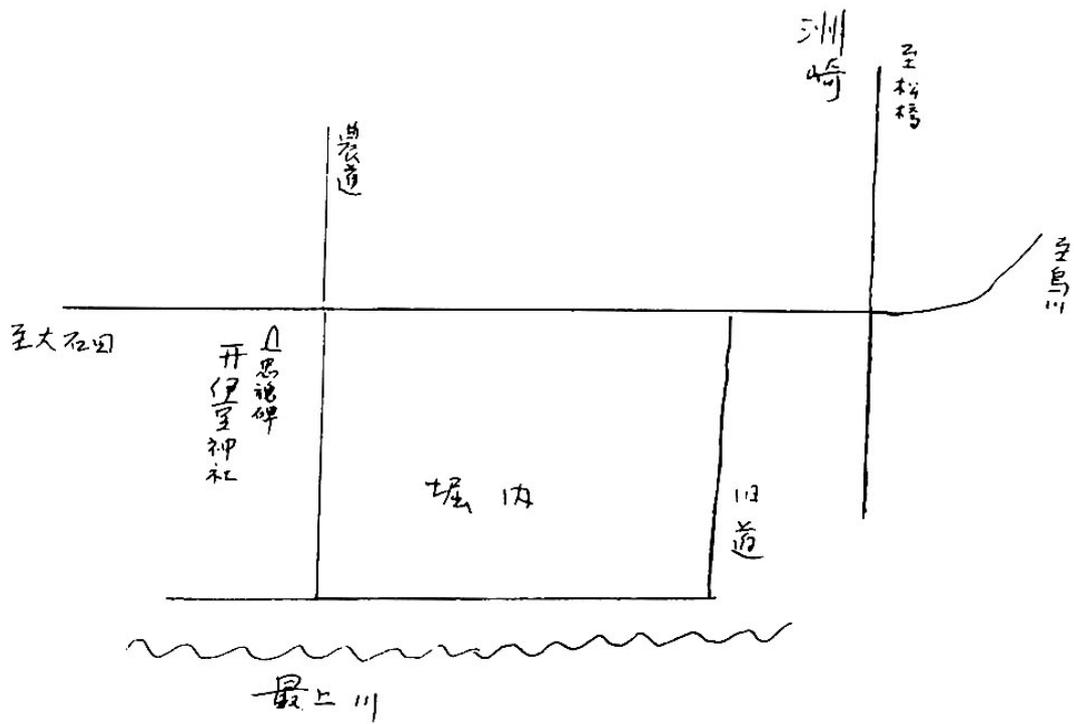
堀内の忠魂碑

【所在地】 堀内

堀内伊豆神社境内地側に建っている。碑には、「忠魂碑 陸軍中将正四位勲二等功三級内藤新一郎謹書」と刻まれている。大正3年建立とあるが奉祀されている戦没者は不明である。



平成7年4月25日撮影



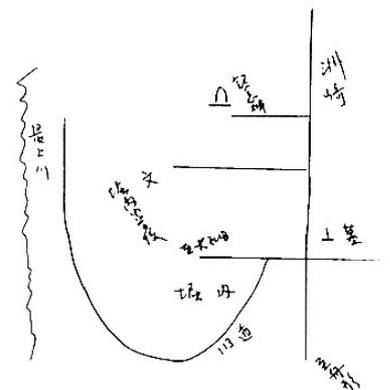
洲崎圃場整備記念碑

【所在地】 洲崎

洲崎東側の農道の一角に建っている。記念碑の碑文によれば、地区の農民たちは昭和48年6月26日、圃場整備組合を設立し、耕地26.6ha、農道総延長3,938m、水路総延長1,023mの整備事業を計画し、翌49年7月通年施行で着工、同53年総工費10,700万円の巨費を費やして、事業が竣工した。さらに同49年8月4日、洲崎堰、車堰の両水利組合を解散して、圃場整備組合を結成、この事業を継承した。組合はこの後土地改良組合と改称し、両堰の改修と揚水機の更新、これによる灌排水事業の推進を決め、関係耕地28.1ha、水路総延長1,170mの整備及び、揚水機1基の設置の事業を計画し、翌50年に着工、同54年に総額3,444万円を費やして、完成したという。



碑面に 圃場整備灌排水事業 竣工記念碑 堀内土地改良組合
山形県知事 板垣清一郎書 昭和54年9月吉日建立
平成7年3月29日撮影

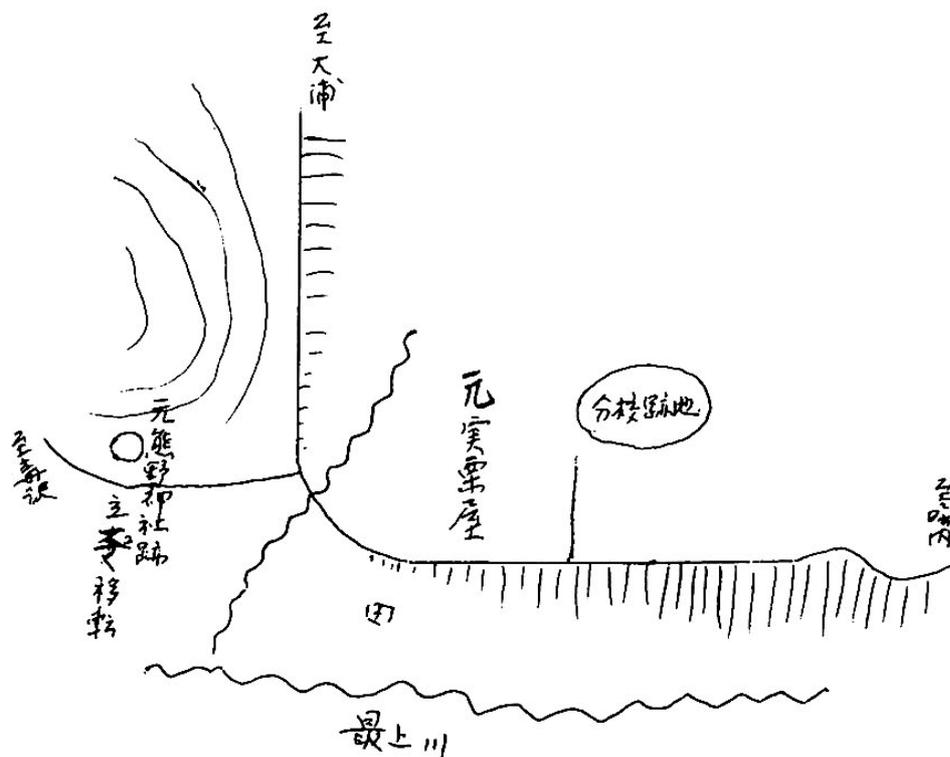


実栗屋分校跡地

【所在地】 元実栗屋集落跡

堀内小学校は老朽化が甚だしくなったため、新校舎建築計画がたてられ、昭和45年着工、翌46年11月1期工事が完成し、12月上旬より使用された。同47年2期工事の体育館が完成し、11月2日に盛大な落成式を行い、竣工を祝った。総工費1億円余。

実栗屋分校は、堀内小学校の建築計画と同時に統合について話し合いが行われ、これが実現して、46年4月、堀内小学校に統合された。同分校は、明治29年、堀内小学校の分教場として開設されたが、時代の変遷に伴い、昭和46年3月31日を以て74年の歴史を閉じた。実栗屋地区は地滑りの危険地帯であったので、昭和51年までに全戸数30戸が立子地内に住宅移転となった。（『町報』昭和46年4月、同47年11月参照）

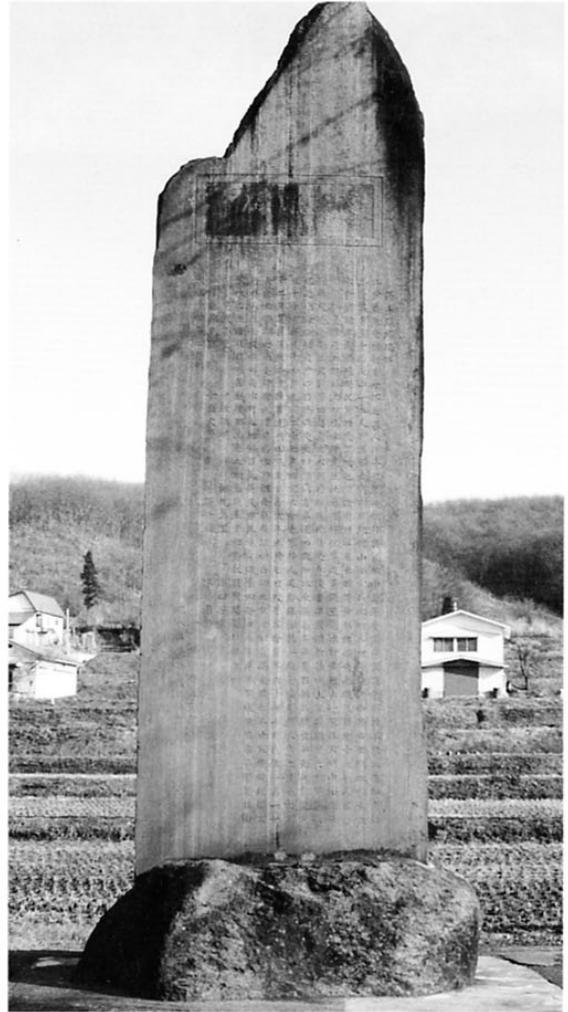


真木野開墾碑

【所在地】 真木野

真木野も古い歴史を有する集落である。集落名は馬喰野、牧野原、また、真鬼野などの字が当てられた。『堀内村勢要覧』によれば、藩制初期には3～4戸の集落であったという。寛文4年（1664）頃まで付近一帯雑木林であったが、野火のため、ことごとく焼野原となった。その後、岩木善四郎と吉蔵とが開田を企画し、数年のうちに、10数町歩を開墾した。天明3年（1783）、深刻な凶作に見舞われ、加えて用水路が欠壊するなどして困窮した農民は離散してしまった。また、一説には同村は彦作林というところにあり、戸数33戸もあったが、文政年間に集落内で火災が発生し、全滅したという。明治31年、大石田の高桑勇蔵が荒廃した真木野の開墾を思い立った。国有林の払下げをうけ、民有地を買収し、西又の松橋川より取水、開田に着手した。それ以前に、袖崎の草刈直之助が松橋川から取水して開拓を試みたが失敗した。高桑が草刈から水利権を譲り受けて、開田に着手した。明治31年より開田事業に専念、30町歩余の水田を完成した。其の後、同村、他村からの移住者が相次ぎ、昭和2年には17戸に達し、共に安定した生計を保つまでになった。高桑は大正12年病になり、翌13年5月7日没、享年60歳であった。彼は牧場経営もしていたが、不認可牧場経営で告訴されたり、彼の放牧による西又地区農作物の被害がひどく、「善行認ムベキモノナシ」とまで書かれたりした。しかし、彼が没した翌年4月、真木野、堀内の人々はその功績を称えて「高桑君頌徳碑」を建てた。

位置図は真木野の馬暦神の頁参照



高桑君頌徳碑

年少氣鋭奮噴起業世不乏其人而一旦蹶跌則神喪氣沮中道而廢者何限其能百折不撓以遂初心者高桑君者蓋千萬人中一二人耳君名勇藏羽前北村山郡大石町人世家尚考曰甚右衛門妣鈴木氏君幼警敏年甫弱冠助父業往來京阪之間販賣村山產米頗博奇利既而失商機耗資金十之七八君乃振業為農購最上郡堀内村真木野荒蕪地單身移住專從事開墾真木野者往古一聚落天明中凶歎邑民離散遂為荒蕪君謂墾田莫急於水利乃視察地勢夷丘陟壑草湖松橋川上流疏而通之所謂高桑堰是也募集佃夫戶口日滋偶失火財貨蕩盡尋逢凶歲加以米價暴落窮甚君餓衣租食率先執業墾田三十余町移民十四戶凡閱二十七年始定云今也家給人足隣保相扶一境安堵居然太古之民也大正十二年某月罹疾浴干陸前過刈田溫泉不癒次年五月七日没于客舍享年六十配小野氏生一男一女長祐太郎嗣女適小野房丸頃者真木野組合員曾議曰吾鄉之有今日矣高桑君之齊也宜建碑以伝不朽介人乞余文嗚呼真木之地滿日荒蕪久委孤免今則原田每々人家連櫛擊壤鼓腹皆業雖由照代之余沢非君刻苦勩精排万難之功烏能至于此乃叙其梗概繫以銘々曰

見幾善爰 才敏識明 拓荒為里 百口安生
 者孤兎窟 今難大聲 遺沢千秋 不朽者名
 大正十四年四月 正八位 西川豊太郎 撰
 高桑喜之助 書

真木野開墾取水口



→揚水路

写真右中央の堰が揚水路
 松橋集落の下手、松橋川をせき止め、真木野開墾へ揚水している 平成7年7月28日撮影

左上部の建物が松橋の牛舎

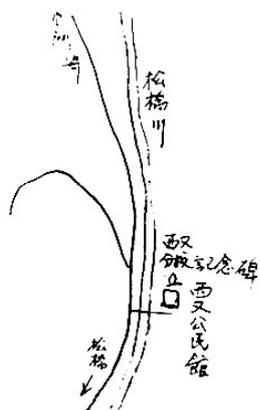
西又分校記念碑

【所在地】 西又

碑に西又分校設立から閉校までの年表が刻まれている。「舟形町立 堀内小学校西又分校
跡地 明治16年堀内村松橋教員派出所、明治28年堀内村西又分教場設置、昭和15年3月堀内
小学校西又分校閉校 舟形町長」。碑の裏面には、西又斉藤清一他17名、松橋松井隆徳他15
名の名前が刻まれている。児童数は昭和37年に79名いたが、年毎に減少し、同50年に39名、
同56年には8名まで激減、理想的な教育は不可能となり、また、校舎も老朽化していたこと
から、教育委員会と地元民と話し合いにより、昭和56年度をもって閉校することとなった。
その時西又分校では“さようなら分校”の特集号として「かんじき」第16号を発行した。
(町報『ふながた』昭和57年4月)



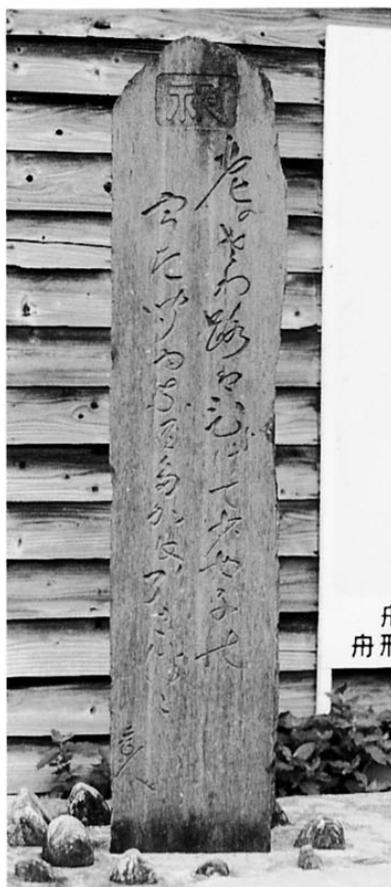
平成7年6月10日撮影



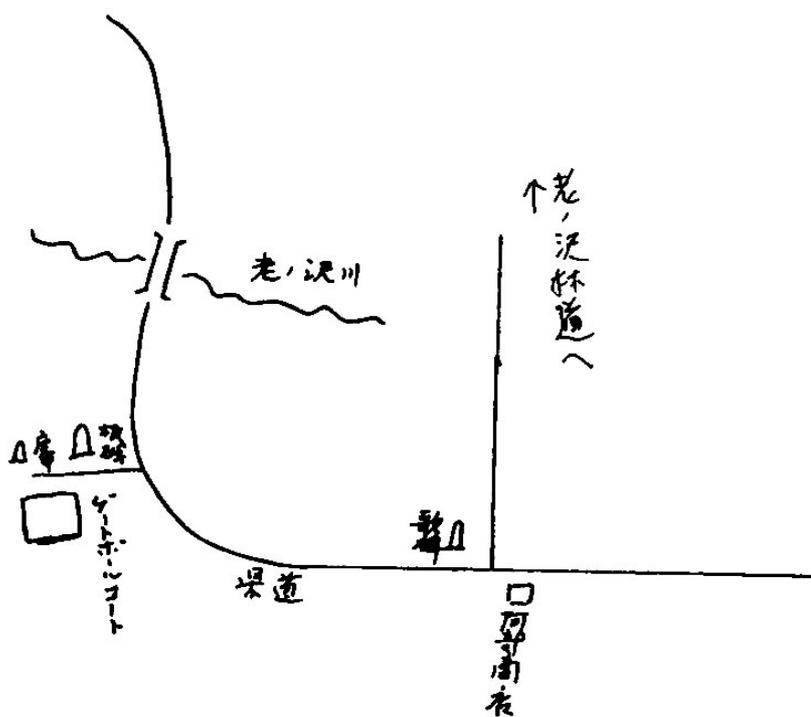
老の沢林道竣工記念碑 (歌碑)

【所在地】 野

老の沢は、野集落の北東にあたる地区であるが、ここには奥羽山脈を源とする老ノ沢川の水を利用して広い田圃が開かれている。しかし、道らしき道がなかったため、営林署が地元との協力を得て、林道の整備事業に着手、昭和16年に完成した。この碑はその完成記念として建立されたものである。碑には当時の営林署員丸山助吉氏の歌が刻まれているが、これによっても、当時の人々の喜びの大きさが偲ばれる。歌碑側面に協賛山林組合長伊藤兵治、町内会長らが名を連ね、裏面に地元の人たちの多数の名が刻まれている。碑は、昭和16年11月3日建立された。碑には、「祝 老のさわ 路はひらけて 少女^{オトメ}子のうた聞ゆなり たから引きつつ 岳人」の短歌が記されている。



平成7年8月11日撮影



長 沢 小 唄 碑

【所在地】 町生涯学習センター敷地内

この記念碑は、当時の『広報ふながた』によれば、東京朋の会寄贈によって、平成5年10月4日完成したものである。長沢小唄は、長沢地区の自然の美しさを歌ったもので、昭和53年にレコードにもなった。記念碑は重さ3トンの御影石である。除幕式には、鈴木舟形町長、東京朋の会顧問大場啓二、世田谷区長、同会長の大場啓氏、ミス世田谷区倉持さんらが列席し、花を添えたとも記されている。井沢正夫作詞 小林亜星作曲である。この長沢小唄も地元の人たちによって長く歌い継がれることであろう。

(長沢小学校校庭から、平成10年に町生涯学習センター玄関脇に移設された)





平成7年4月28日撮影

長沢小唄

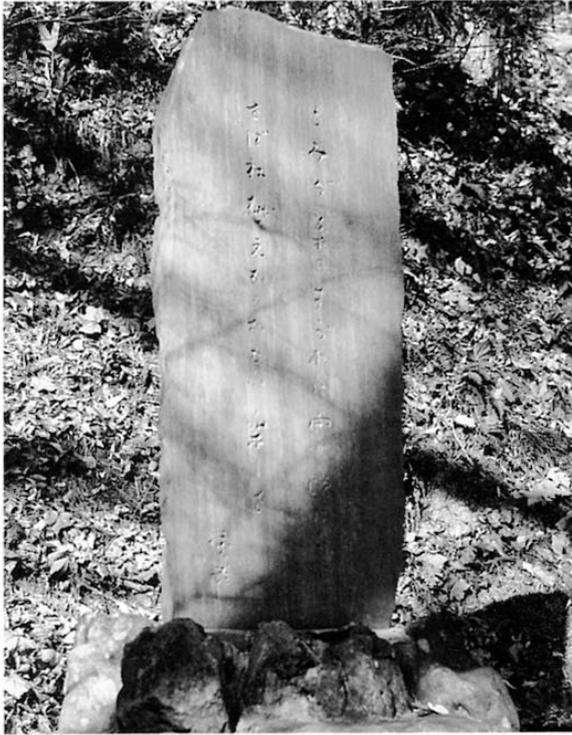
井沢正夫 作詞
大場啓 補作詞
小林亜星 作曲

1. ハアソレ
権現さまから鶴楯かけて
山の桜が照り映える
ホンによいとこ長沢は
こころのおくの ふるさとよ
2. ハアソレ
松原こえて岩渕あたり
小国川には鮎はしる
ホンによいとこ長沢は
思い出清しいふるさとよ
3. ハアソレ
秋には栗の実御所柿みのる
大焼黒から月のぼる
ホンによいとこ長沢は
自然のたからのふるさとよ
4. ハアソレ
吹雪の夜はいろりの端に
もちを焼いたり甘酒汲んで
ホンによいとこ長沢は
なつかし恋しいふるさとよ
5. ハアソレ
雪の月山間近に見えて
瀬々の音きく橋の上
ホンによいとこ長沢は
永遠の姿のふるさとよ

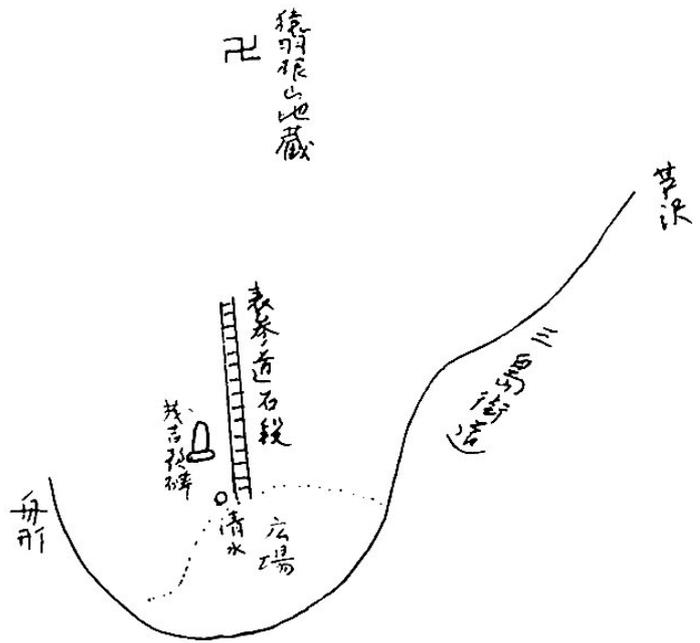
齊藤茂吉歌碑

【所在地】 猿羽根山 参道階段下

猿羽根地蔵表参道の石段下方左側に歌碑が建っている。昭和31年5月31日の町報によれば、且つて茂吉は猿羽根山に足をとどめ、数々の秀歌を残した。茂吉逝きて3年、輝子未亡人が茂吉墓参のため来県されたのを機会に、5月12日午後1時より関係者70余人が集まって歌碑の除幕式が行われた。^{シュウバツ}修葺の後、齊藤未亡人の手により除幕されたということである。歌碑には「もみぢ葉の すがれに向う頃ほいに さばね越えむとおもう楽しさ 茂吉」と刻まれている。



平成5年11月25日撮影



「白き山」猿羽根峠

昭和22年5月29日

名木沢を入り口としてのぼるときちかく飛びつつ啼くほととぎす
 谷うつぎむらがり咲きて山越ゆるわれに見しむと言へるに似たり
 明治14年9月28日天皇ここを越えたまひにき
 郭公と杜鵑と啼きてこの山のみづ葉ととのふ春ゆかむとす
 あさき峡とふかき峡とのまじわれる猿羽根の山に飛ぶほととぎす
 笹の葉を敷きていこへるたうげ路ゆ南のかたをふりさけるたり
 こほしたる道とおもひて居たりしさばねの山をけふ越えむとす
 猿羽根峠のぼりきはめしひと時を汗はながれていにしへ思ほゆ
 おのづから北へむかはむ最上川大きくうねるわが眼下に
 元禄のときの山道も最上川ここに見さけておどろきけむか
 雪しろき月読の山横たふをあなうつくしと互に言ひつ
 たうげにはいづる水あり既にして微かなれども分水界をなす
 舟形にくだり来れば小国川ながれの岸にねむりもよほす
 年老いて猿羽根のたうげ越えつるを今ゆ幾とせわれおもはむか
 山岸に走井ありて人ら飲む心はすがしいにしへおもひて
 したしくも海苔につつましにぎり飯さばね越えきて取りいだすなり
 小国川宮城ざかひゆ流れきて川瀬川瀬に河鹿鳴かしむ
 もみち葉のすがれに向ふ頃ほひにさばね越えむとおもふ楽しさ

この歌は昭和21年10月13日聴禽書屋歌会での作である。

斉藤 勇 歌碑

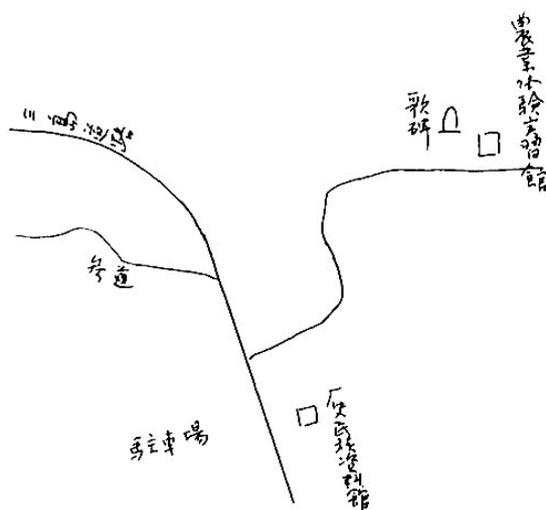
【所在地】 農業体験実習館敷地内

斉藤勇氏の歌碑で「とほき山に 雪残りゐて たどりゆく 猿羽根峠ハ 万緑の中 勇」と研磨された黒御影石に陰刻され、自然石に嵌めこまれている。この碑の裏面に由緒が記されているので、これを引用する。「短歌結社『黄鷄』の主宰」斉藤勇先生は昭和59年5月26日猿羽根山に於いて催された庄内・最上合同歌会に講師として来山され、つづら折りの峠路に古人の足跡を偲んで一首を詠み、郷土が誇る旧蹟に文化の灯を掲げられた。この秀歌を石に刻んで舟形久遠の繁栄を祈念し、月山葉山を遠く望み、最上川を足下に俯瞰するこの丘をトとして1基を建てるものである。

昭和61年5月舟形町観光協会会長 佐藤 充夫



平成7年3月29日撮影



長沢八景句碑 ①

【所在地】 長沢楯 楯稲荷

「舟形町長沢をふるさととする多勢の人達で、自分の育ったそれぞれの場所のなかから八景を選んで、ふるさとの人達と一緒にいつまでも心にとどめ、大切に守り継いで、村を愛する象徴の場所としたいということで、長沢八景を選定することになりました。

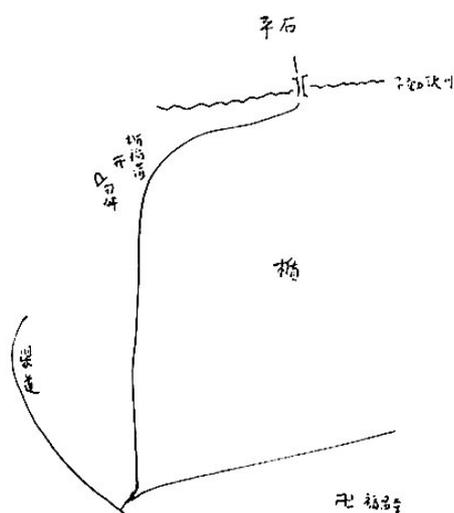
八景を選定したことがいかに意義あることか、毎日そこを通っていてもごくありふれた風景であれば、人間の目に映らないもので見ても何も感じません。ところが、たまたまそこが八景であるということと、尚そこに文字なり句などを掘り込んだ碑などがあればとたんに、ああ、これはそういう趣をもっているものなのかとか、ああ確かにここの風景はいいなあと思うものです。」『ふるさと長沢八景』より

東京長沢朋の会（会長大場啓氏）では長沢の景色を思い浮かべながら「長沢八景」を選んだ。これは在京役員会の慎重な審査の結果、決まったものである。平成3年9月23日長沢小学校体育館で完成祝賀会が催された。

碑には、「神々や ^{ツルクテジョウシ} 鶴楯城址 ^{カゼカオ} 風薫る 啓」の句が刻まれている。



平成7年4月5日撮影



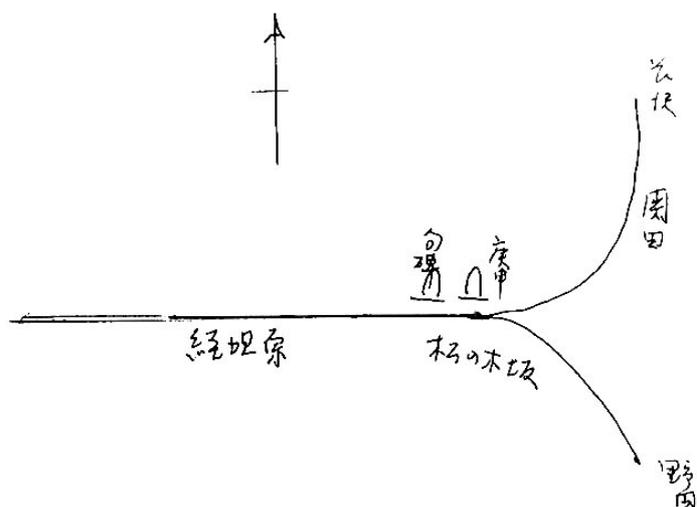
長沢八景句碑 ②

【所在地】 経壇原松の木坂 庚申塚側

碑には「狐狸も友 祭りの包み 取られけり 啓二」と刻まれている。以前は、よく狐にだまされた話を古老から聞かせられたものである。舟形張世の夫婦橋の夫婦狐とか、おさんこ狐などの有名な狐がいた。或る時（一ノ関カ、経壇原カ）稲架（ハセ）の上段に跨いで、三味線を引いている人を、朝仕事に出た人が見つけ、声をかけたら慌てて降りて来たという実話を聞いたことがある。東京長沢朋の会の人たちも狐にだまされた昔話を聞いていたのではなかろうか。興味をそそる一句である。



平成7年4月5日撮影



長 沢 八 景 句 碑 ③

【所在地】 長沢橋 左岸橋脚

「長沢の景勝也としては、やはりこの長沢橋は欠かせないものでしょう。橋のない頃は舟で渡っていたといえますから、今でも舟場の呼び名とその跡が残っています。

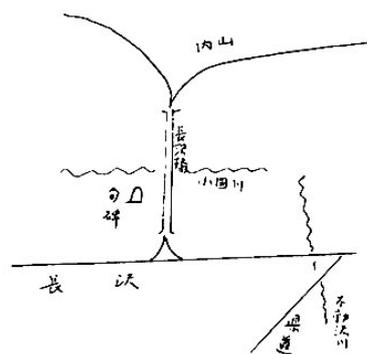
.....

両岸に突き出た岩石を橋脚としたこの美しい橋（旧）は、下に大堰の堰堤が出来ると青い水を堪えた小国川にその姿を写し、亀の子石などとの調和した美しさは、正に長沢の人びとにとって自慢のできる風景といって良いでしょう。㊦山形新聞社の『やまがた百景』にもこの付近が選ばれております。『ふるさと長沢八景』より

碑には、「瀬にひびく 長沢橋の ^{ユウカジカ}夕河鹿 啓」と刻まれている。大場啓氏は、俳界の大御所中村汀女に師事した方である。句碑は、元長沢橋の橋脚脇に平成元年8月に建立された。



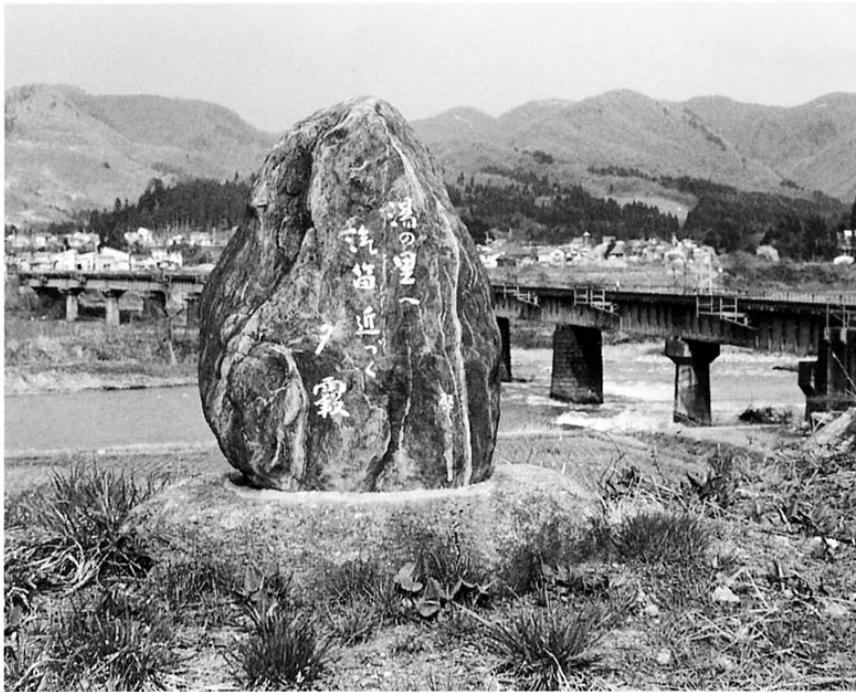
平成7年4月28日撮影



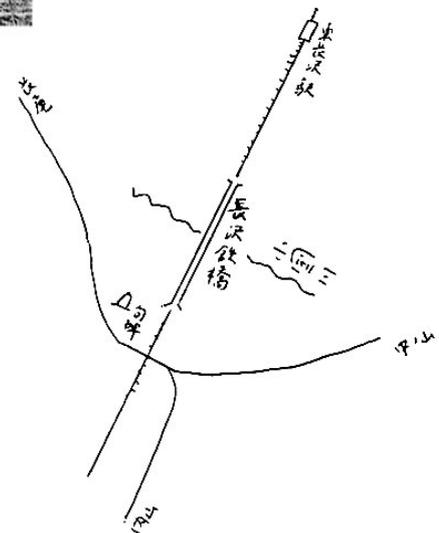
長沢八景句碑 ④

【所在地】 長尾鉄橋 西袂

句碑には、「湯の里へ 汽笛近づく ^{ユウガスミ}夕霞 啓」と刻まれている。長尾鉄橋を渡れば程なく湯の里瀬見である。また、この地点から見る、奥羽山脈、大焼黒山、熊返し山や小国川の眺望は正に絶景である。長沢で生まれ育った人たちにとっては忘れ得ない景色であろう。



平成7年4月28日撮影



長沢八景句碑 ⑤

【所在地】 福昌寺境内

「福昌寺の境内にそびえる^{イチョウ}銀杏の大木は何ととっても寺を象徴しています。樹令推定200年といわれていますが、福昌寺の開基は長享元年^{ヒツジ}末（西暦1487）9月24日となっているので、お寺よりは新しいこととなります。」『ふるさと長沢八景』より

福昌寺の銀杏樹の下に建てられた句碑である。碑には「秋の^{セミイッシ}蟬一史をなせる^{オオイチョウ}大銀杏 啓」と陰刻されている。



平成7年4月27日撮影

位置図は福昌寺の頁参照

長沢八景句碑 ⑥

【所在地】 大平

「大平の入口（西）にある庚申碑は老杉に囲まれていて、八景に選ばれたこともうなずける場所です。

この庚申碑は安永9年（1781）庚子4月12日の建立となっていますから、約2百年前に建てられたものです。庚申信仰は中国から我が国へ渡ってきたものといわれその普及の盛んだったことがわかります。」『ふるさと長沢八景』より

句碑に「秋の風 庚申塚の 幾年ぞ」と刻まれている。長沢八景の句碑を歴訪して、「故郷は遠くにありて思うもの」の言葉をしみじみ味わった。



平成7年5月7日撮影

位置図は大平新庄口の庚申塔の頁参照

長沢八景句碑 ⑦

【所在地】 長沢塞ノ神

「長沢小学校から旧47号線を大谷^{ダイヤ}に向う辺り、小国川が崖地に迫った場所を塞^{サエ}の神と呼んでいます。

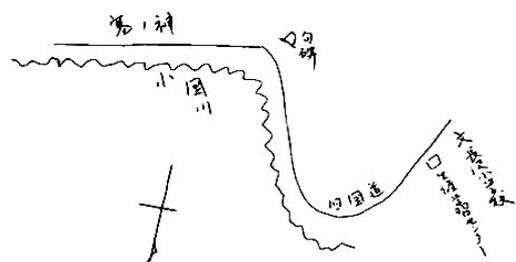
塞の神の塞とはとりでのことであり、長沢橋の上の方であるので塞の上のことではないかと思えます。

昔、サエノカミは交通の難所で、馬車やバスがよく転落することもあったのですが、今では旧47号線の名所となり、茶店なども出るようになりました。」『ふるさと長沢八景』より

平成3年建立。碑には「鶯^{トビ}の笛 緑^{シクク}滴る 塞^{サイ}の神」と刻まれている。



平成7年4月5日撮影



長沢八景句碑 ⑧ 鮎塚

【所在地】 野 松原

「野から瀬見へ入る峡谷の辺りを松原と呼んでおり、陸羽東線と国道47号線、それに清流小国川がほとんど平行して走り、観光的な面でも山水の美しい場所といえます。

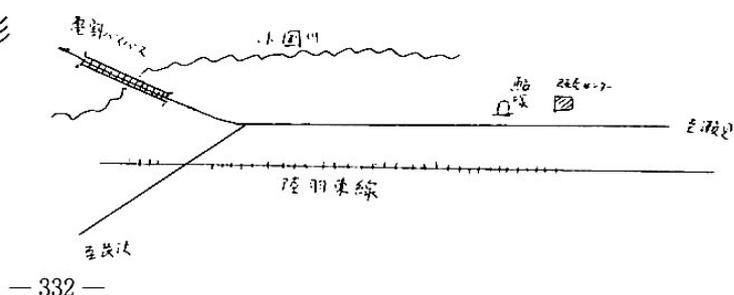
比の辺りの小国川は水の清いところからアユの育ちがよく、松原アユといって藩政時代から新庄領内の名物として名高いものでした。

昭和58年8月17日、この松原に全国初の鮎塚が建立されました。」(『ふるさと長沢八景』より)

碑には大場啓氏の句が刻まれている。「鮎の里 母なる川の 清らかに」大場 啓 句
戸澤 毅 書



平成7年4月28日撮影



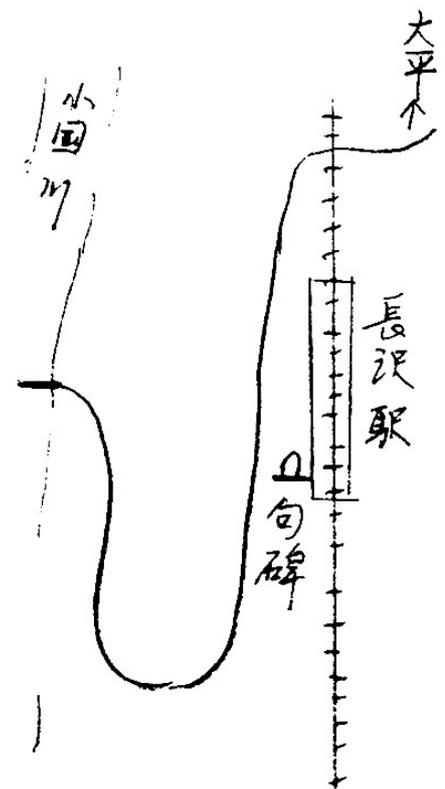
長沢八景句碑 (番外)

【所在地】 長沢駅前

東京長沢朋の会が選んだ長沢八景の番外として長沢駅が選ばれた。平成元年8月、駅前広場にこの句碑が建てられた。故郷を離れた人々にとっては、ここで逢う誰でもが限りなく懐かしい人々なのであろう。碑には「停車場や知るも知らぬも春の顔 啓二」と刻まれている。



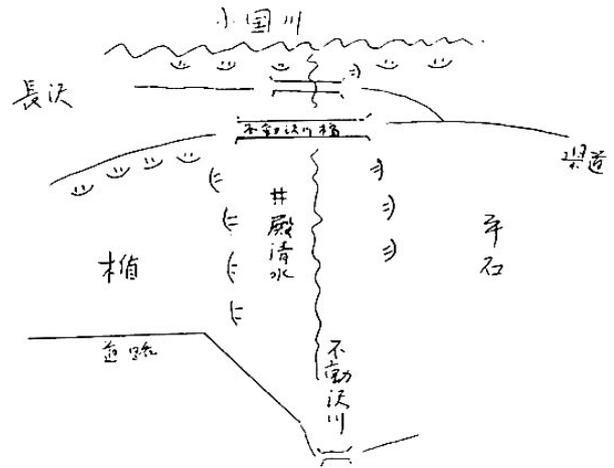
平成7年4月27日撮影



殿 清 水

【所在地】 長沢楯（北東崖下）

不動沢川に架けられた県道不動沢川橋の上流、楯の麓にある湧水である。殿清水と呼んでいる。現在はコンクリートできれいに整備されている。昔、楯主が名水として利用されたことから殿清水と呼ぶようになったという。昔は水量が豊富だったというが、昭和39年6月16日の新潟地震によって湧出量が少なくなってきている。しかし、今なおこんこんと湧き出ている。昔、楯集落の人たちは、この水を飲料水として利用したというが、今は利用する人がいない。この清水にまつわる伝説として、昔、楯主長沢仁兵衛尉の守り刀が時折り蛇の姿に変えて殿清水の水を飲みに行ったということが語られている。この守り刀は長沢家（甚左衛門）に伝えられていたという（昭和34.11. 『町報』）殿清水は現在、楯の伊藤氏が管理している。



昔は石枠だったというが崩れたので
コンクリート枠になっている。



平成7年4月7日撮影

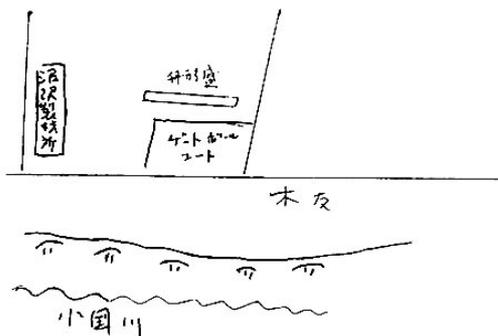
舟形盛

【所在地】 木友

木友県道沿いの南側にゲートボールコートがある。その背後に小高い丘が（東西27m、幅6m、高さ1.1m）ある。これが「舟形」の名称の発祥として伝えられている丘である。真疑は論外として、その昔、最上川と小国川の川水が満々として溢⁷⁷れていた。折から川を下ってきた陶器を積んだ1艘の舟が難風⁷に遭い、トモの坂へ衝突して逆行し、この地に転覆して埋もれたまま丘になったという。以来舟の形をしている丘を舟形と呼ぶようになったという。今でもこの丘を掘ると祟りがあるといわれ、この戒めはいまも固く守られている。丘の上に老木が生え荒れ放題になっている（昭和32.12『町報舟形』より抜粋）。また、『新庄領村鑑』によれば「往古は鮒方と書、鮒の形有し石出る故に名とす。和漢三才図絵に有り」と記されている。



舟形盛りの南より望む。写真中央の丘が舟形盛である。
平成7年3月29日撮影



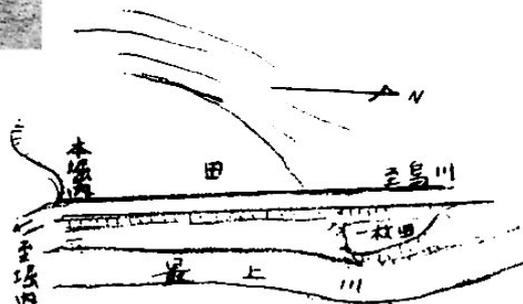
一枚田

【所在地】 本堀内

白岩一揆^キは百姓一揆として余りにも有名であるが、最上郡内でも、百姓騒動はしばしばあった。享保6年（1721）、本合海村の百姓達が庄屋に不正ありとして郷倉に集合し、庄屋の判形をとって役所に訴えたが、取調べの結果無実となり、百姓らは死罪、入墨、追放の刑に処せられた。文化12年（1815）、再び本合海村に同様の村騒動があり、首謀者祐之助、佐之吉の若者が福田原の刑場で処刑された。積雲寺に2人の墓がある。村の人たちは兩人を義人としてあがめ、本合海上野公園に祐佐神社として祀っている。堀内でも、大きな百姓騒動があった。同村百姓弥助、山守孫十郎が庄屋加藤佐治兵衛を排斥、高山与左衛門をこれに代えようとしたが、受け入れられなかった。弥助らは一揆のものと語らって寄合を開いた。これが藩に聞え、翌年孫十郎は村払いとなり、弥助は牢舎の上、宝暦6年（1756）、本堀内下手一枚田で断罪に処された。数人の農民が追放、牢舎入となり、庄屋も罷免^{リメン}された。



一枚田遠方に見えるのは烏川大橋である
平成7年4月25日撮影



茂吉の詠める清水

【所在地】 猿羽根山 表参道石段下

猿羽根地藏堂表参道石段下にある。墨痕鮮やかに「たうげにはいづる水あり既にして 微かなれども分水界をなす 茂吉」とかかれた標柱が建っている。ここに細い湧水がある。この地点から南側を眺めれば、最上川、毒沢村が見下ろされ、遠くに葉山を仰ぎ、まさに絶景である。猿羽根山には往時のままの羽州街道があり、また、三島県令が開削した猿羽根新道がある。この道は明治10年1月上旬測量を始め、同年6月起工、同年10月、僅か5カ月間で竣功という急ぎの工事であった。これも明治天皇御巡幸に間に合わせるためのものであった。猿羽根山はまさに歴史の峠である。



平成5年11月25日撮影

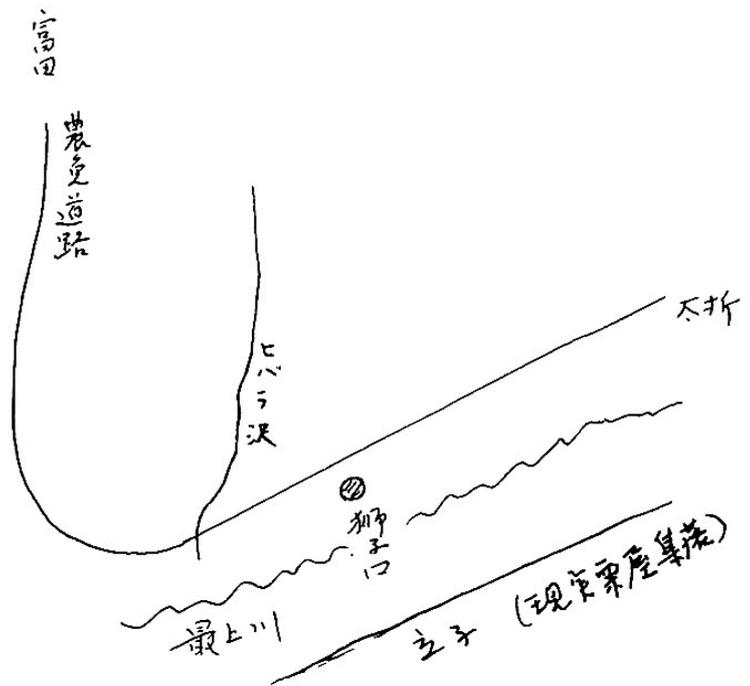
獅子口

【所在地】 太郎野

立子村（現・実栗屋）の最上川対岸に獅子が咆哮ホウゴウしているような奇岩がある。これを獅子口とっている。以前2つあったといわれるが、いまは崩落して1つしかない。延享3年（1746）に描かれた最上川の絵図面には、最上川流域の村の名、神社、舟運の難所などの総てが描かれているが、その中に「ひばら沢」の落ち合いに「獅子岩」と記されている。堀内象頭山と共に舟乗りたちが舟運の安全を祈願したものと思われる。最上川の舟運には『大石田町誌』（長井政太郎著）によれば、全盛期である元禄16年（1703）には大石田船290隻、また、享保6年（1721）には酒田船240隻があったと記されている。上り船、下り船の往来が盛んであったことが容易に想像できる。前記延享3年の絵図には根渡、猿羽根、沢口村、絹縫村熊野堂、獅子岩などの村や堂舎が記され、その上流に折渡村、墨染ノ桜、天満宮が記されているが、太郎野は記されていない。絹縫の人たちが太郎野へ移住したのはその後と考えられる。この獅子岩は獅子口様と呼ばれ、近年まで作神として信仰され、太郎野の村人達は旧6月15日に祭礼を行なってきた。



平成 5 年 11 月 25 日 撮影



念 佛 の 松

舟形町指定文化財（平成10年4月24日指定）

【所在地】 長尾 裏手山

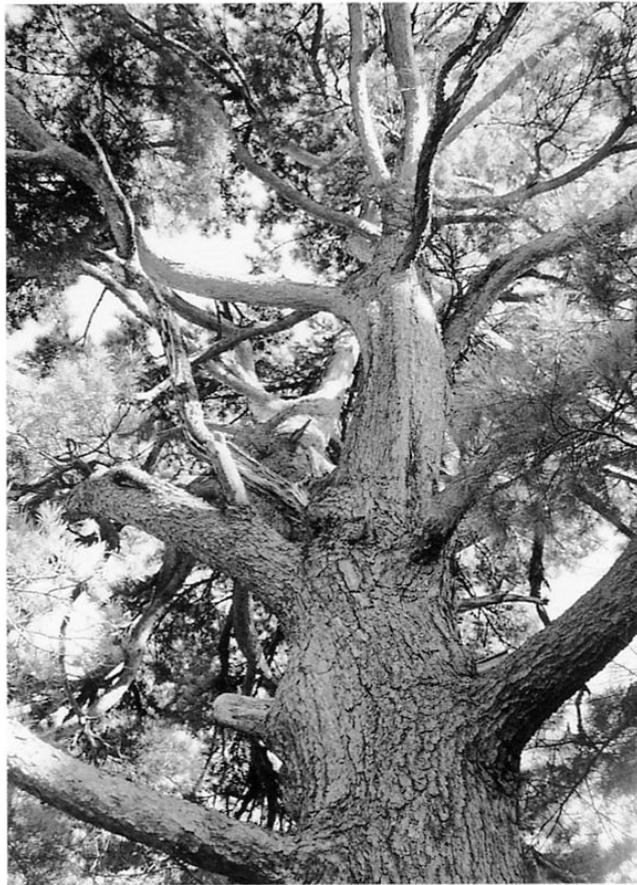
長尾集落裏手、旧瀬見街道の傍にある。平成4年9月24日、亀割バイパス開通によって、この街道が分断されてしまった。念仏の松は根元の囲り4m、樹高約15m、この大きさからかなりの年数を経ていることがわかる。昔、出羽三山参りの宮城・岩手方面からの道者達は、この松の下に来て初めて、霊峰月山を仰ぎ、思わず念佛を唱えたという。この瀬見街道は休場へ出る道である。「本合海小屋家文書」に岩手の道者が休場より荷物を馬で運び福田で中継ぎした所、荷物1個なくなったということで、藩に紛失届をし、藩で弁償して事なきを得た文書がある。

樹医大津正英氏はこの松の樹令を500年弱と推定している。





(雑木の葉が出ない内にと) 雪のある内に撮影したものである 平成7年4月5日撮影



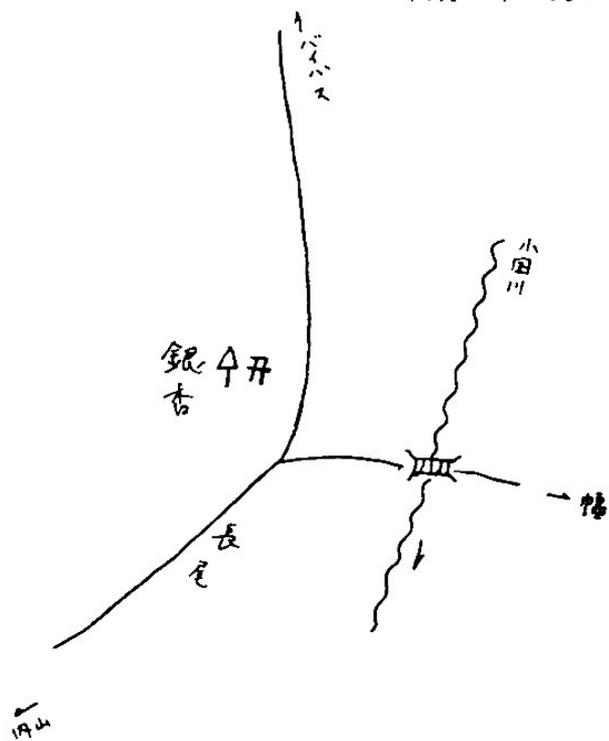
長尾の銀杏

【所在地】 長尾（熊野神社境内）

熊野神社境内に立っている銀杏樹である。胸高周囲3.7m、樹高約30m、根元から幹が2本になっている。長沢楯主仁兵衛尉の重臣伊藤武七という武士が、長沢氏滅亡後、この地に下り、村を開いたと伝えられる。堂内には稚拙^{チセツ}な作りではあるが、ほぼ等身大の仏像がまつられている。堂内には貞享元年（1684）ほか3枚の棟札がある。貞享元年の棟札によれば、この度の堂宇造立は「再建」とある。また裏に記された墨書名によれば、この地に勧請したのは、貞享度再興の開基伊藤作太夫（当時の庄屋）の先祖道哲居士なる人で、深く熊野権現を信仰し、3度までも彼の地に参り、熊野神社を勧請したという。道哲居士は作太夫の18代の祖とあるから時代は南北朝時代にさかのぼるものであろうか。



平成7年3月30日撮影 左写真の枝分かれ最下位より上部



長沢楯のセンの木

【所在地】 長沢

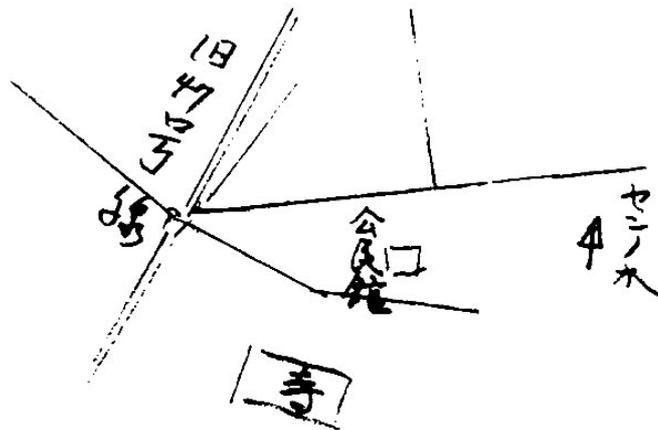
長沢楯明神の社の側に生えている。胸高囲4.5m、樹高約25mの巨木である。楯明神と共
にかなりの年代を経ているものと考えられる。



平成7年3月30日撮影



平成7年5月24日撮影 長沢楯センの木



長沢太平山のミズナラ

【所在地】 長沢（太平山山頂）

樹木の種類 ミズナラ

太 さ 周囲6.6m（地面から1.3～1.5mの高さ） なお主幹の太さは3.03m

高 さ 約18m（目測）

最上郡で最も太いミズナラである（調査者 大類貞夫）。

長沢集落の中心部付近にある標高293mの長沢太平山の頂上に、この大ミズナラはある。

長沢太平山は、地元の人々には「三吉様」と呼ばれており、秋田市太平山三吉神社の三吉権現を請け申し祀ったものである。

山頂には、林道沿の登り口から入り、急な上り坂を進み、20分ほどで着く。登山道とまではいかないが、古くから地元で親しまれてきた山なので、はっきりした山道があり、道に沿って大きなアカマツが頂上まで数本続く。頂上から少し下ったところには、見事な枝振りの大アカマツがある。

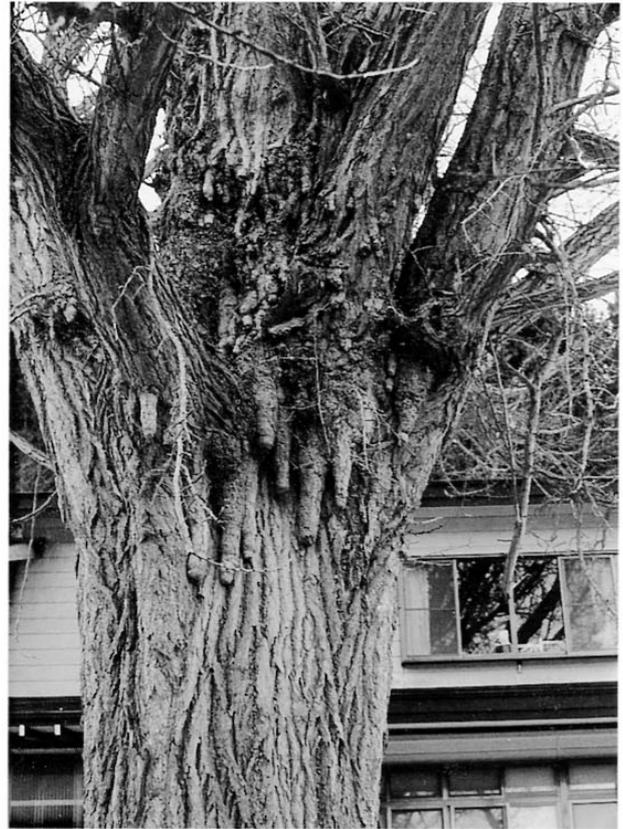


位置図は長沢の太平山の頁参照

福昌寺の大銀杏 ^{イチョウ} (乳銀杏)

【所在地】 長沢 福昌寺

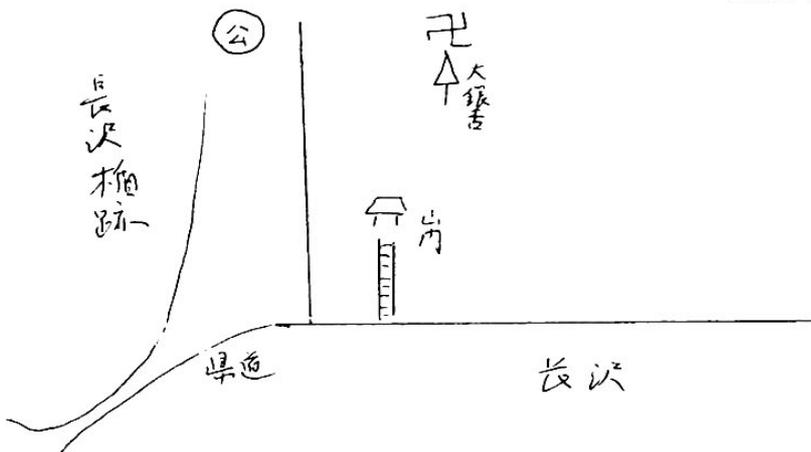
この大銀杏は胸高周囲4.66m、樹高約32mである。樹齡は約200年ともいわれ、現在の本堂建立した折りに、長尾の安兵衛という人が大平から苗木を持ってきて植えたものであるという。今では、大木となり、枝からたくさんの気根が垂れ下がっためずらしい乳銀杏となっている。



平成7年3月30日撮影

乳 銀 杏

山形大学名誉教授生物学 中沢 信平



銀杏の老樹に、しばしば枝から下へ向けて垂直に伸びる気根が出る。その最たるのが仙台のJR宮城野原駅の近くにある乳銀杏である。樹齢千年以上のこの樹には実に大小無数の気根がまるで乳房のような形をとって生じ、大正15年に国の天然記念物に指定され、今日に至っている。

仙台の乳銀杏は日本一すばらしいものだろうが。国内にはほかにもそちこちに大小の乳銀杏がある。青森県七戸町の五庵川原にあるのは樹齢700余年、京都の北部、夜久野町の大歳神社、舞鶴市の東方松尾寺、その他にも乳銀杏が有名である。銀杏は中国の原産で古くから日本に移入された。銀杏の気根は雌林と雄林とどちらでも生ずる。

以上は、平成7年6月13日夕刊山形新聞に掲載されたものを原文のまま抜粋したものである。

福昌寺の大銀杏は乳銀杏である。乳銀杏は、町内には中ノ山佐藤氏宅の銀杏と2本だけである。

大平の山神神社のアカシデ

【所在地】 大平（山神神社境内）

アカシデはカバノキ科クマシデ属の落葉高木である。若葉は赤色でよく目立つ。大平山神神社境内に、幹回り2.4m、樹高10～15m、樹齢200年以上と思われるアカシデの巨木がある。北日本に幹回り3 m以上のアカシデは唯一1本、福島県三春町の中町（3 m）にあるだけである。とすると、大平のアカシデは東北有数の太さと言ってもよいのではなかろうか。

アカシデの名木としては、東京都日の出町の幸神神社のシダレアカシデがある。お椀をふせたようなしだれた枝振りが素晴らしいが、幹回りは2 mにすぎない（最上広域市町村圏事務組合企画調整課課長 坂本俊亮 談）。



位置図は大平の山神神社の頁参照

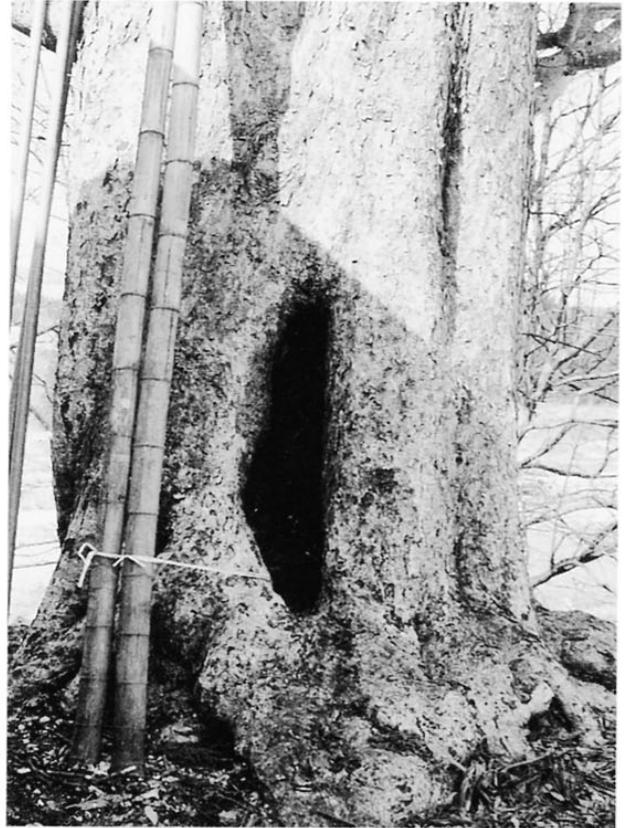
一の関の^{トチ}枌の木

【所在地】 一の関公民館側

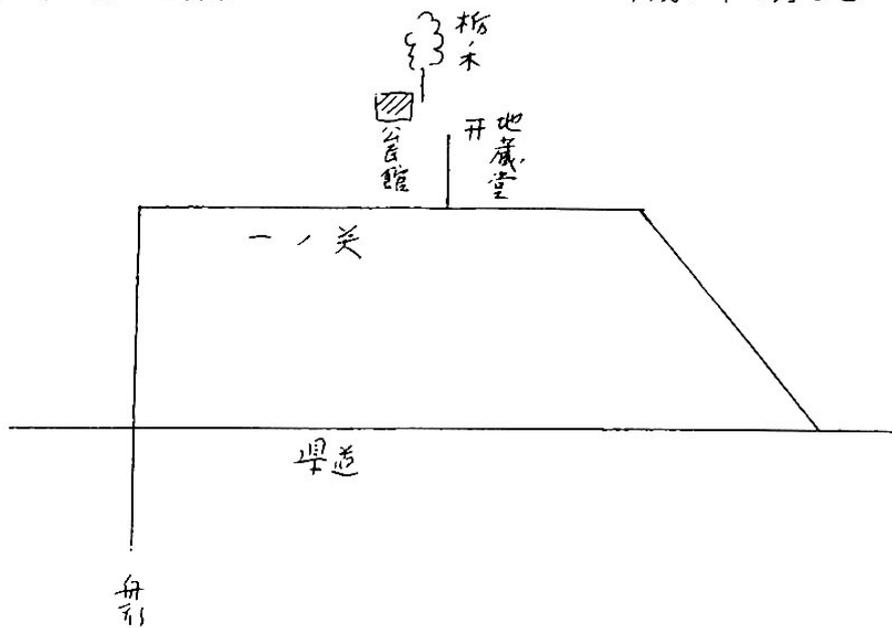
一の関公民館入口の^{ガケギワ}崖際にある。以前は根元に大きな穴があいていて、人がもぐれるほどであったが、最近その穴が小さくなったという。樹齢400年以上は経ているだろう。枌の木の胸高囲5.2m、樹高約20mで樹勢がよい。この地に地藏堂と石仏10基がまつられている。その神木として植えられたものではなかろうか。枌の木の東側一帯が^{キツツ}舗装されているが、崖際なので水はけや、酸欠の心配はないと思われる。一の関集落は、昔、一の関7軒といわれ、古くから開けた村と考えられる。また、文治元年（1183）、兄頼朝に追われて、奥州平泉に逃れようとした義経が、前途に一の関のあることを聞いて進路を変え、鳥越から休場を通り、亀割峠を越して、瀬見へ出たと伝えられている。この枌の木の西方に村が開けた。長次郎、与兵衛、長七、四五右衛門、長右衛門、長左衛門、不明1軒の7軒が集落の草分けと伝えられている。



平成 5 年 12 月 1 日 撮影



平成 7 年 4 月 5 日



定泉寺のエゾエノキ

【所在地】 舟形 定泉寺

定泉寺のエゾエノキの幹回りは415cmで山形県3位の太さ。道路ぞいにある。

順位の公表されていないエゾエノキで太いものはないものかと、環境庁の『巨樹・巨木林調査北海道・東北版』をみてみたら、山形県で幹回り3m以上のエゾエノキは4本しかないことがわかった。

その序列は、米沢市春日 500

山形市霞城公園 480

舟形町定泉寺 415

山形市天神前 370

舟形町のエゾエノキは山形県3位である。



位置図は定泉寺の頁参照

舟形古峯の老杉

【所在地】 舟形八幡山々頂（古峯神社境内）

胸高周囲は4.33m、樹高約20mである。また、地上約14mの部分から1本の枝が分かれ、更に幹中程から3本の芯が立っている。雪害のため芯が折れてこの様になったと思われる。4本の芯がほぼ平均に、^{ナリ}錐状に伸び、樹勢旺盛である。猿羽根楯親杉より年代は新しいと思われる。



平成7年4月6日撮影



三つ又枝とその右に幹途中から出た枝で芯の高低差が若干あるもの、平均的に生育している。

コブシの木

舟形町指定文化財（昭和50年3月1日指定）

【所在地】 長者原

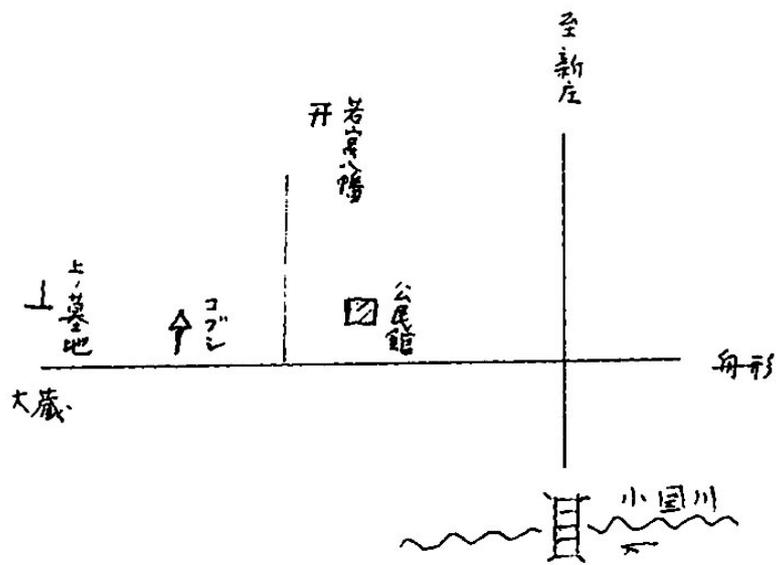
長者原公民館近くにある。代表者鈴木八重子となっているのは、通称上の墓の敷地になっているからである。樹齢800年とも云われ、日本ではこの様な大コブシの木はないと云う（樹医大津正英氏）。近年、道路が拡幅舗装された、環境の激変のためか、平成元年頃から樹勢が衰えて、枝が枯れ始めた。大津氏の指導により、町当局に願い、蘇生ソセイの対策を講じたが、次頁左写真のような姿を見ることができなくなったことは惜まれる。これより西方に猿羽根家家臣赤城新左衛門の墓地と伝えられる赤城壇がある。下底14m×10m、上底10m×7.5mの台形の壇である。また、これより東に直径約4mの丸い塚がある。古老はこの2つを比翼塚といっている。また、コブシの下に貧しい老女を哀れみ祀ったという女地蔵おなごがある。この地蔵に願をかけると不思議に願が叶うという。



昭和62年 4月28日撮影



平成 6年撮影



万年杉（変わらないの杉）

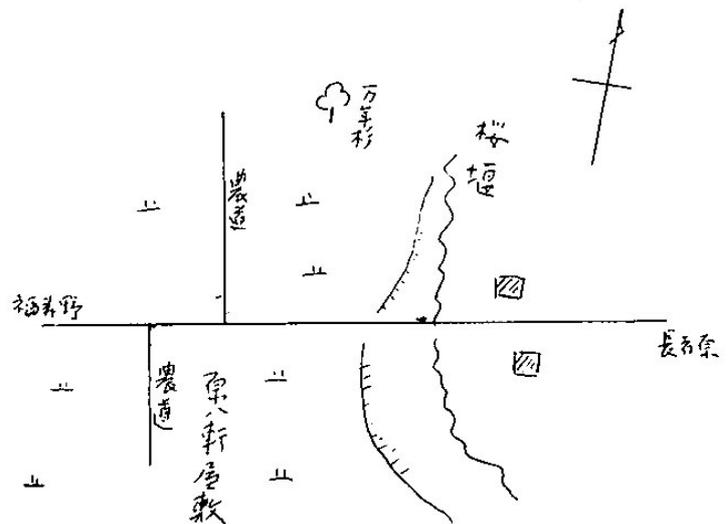
【所在地】 長者原（ヒガネ）

長者原集落西外れの田の中に樹齢500年は経ているであろうと思われる杉がある。近年倒伏を恐れてか、南に伸びている枝を伐ってしまった。この万年杉は、根の廻り1.7m、胸高囲1.5m、樹高約8mで、昔から樹高も変わらず、今なお生きづいている。『新庄領村鑑』に長者原村、枝郷日金村、芦沢村と記されている。この近くに原8軒の集落があった。これらの家は、その後年代は不明だが、長者原村、富田村へ移住してしまった。この地は富田から新庄へ、また、清水から舟形へ行く道が交叉する所であった。往来する人達は、万年杉の下で湧き水を汲みながら休んだことであろう。

〔保存対策の要あり〕



昭和62年 4月28日撮影



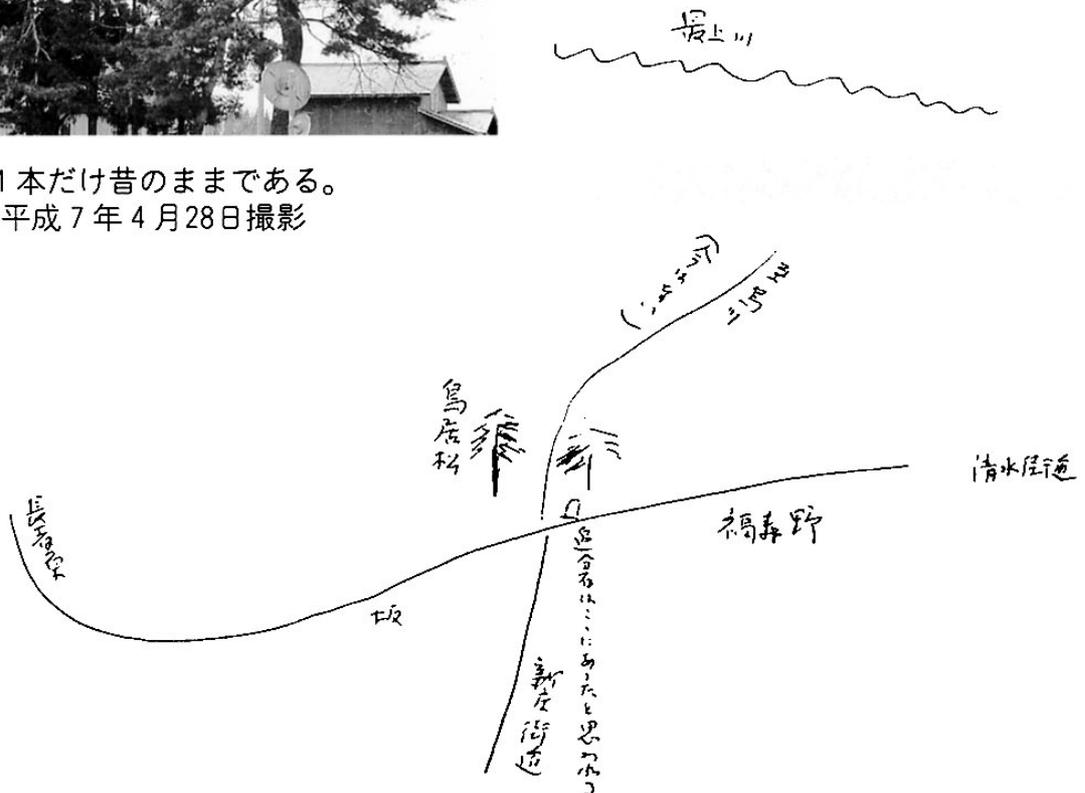
福寿野の鳥居松

【所在地】 福寿野

福寿野東入口に2本の松がある。これを鳥居松とっている。昔この鳥居松を潜^{カグ}って月山参りに行ったものであるという。現在「向左湯殿山肘折口・・・」の追分石^{オキワケ}が松の下に立っているが、この地点は舟形～清水街道と新庄～鳥川の交叉する所であった。これより馬形集落を経て、最上川渡船で鳥川へ渡り、ここからは肘折口別当^{アウシイン}の阿咩院（片見家）の先達によって出羽三山参りをしたのである。



左1本だけ昔のままである。
平成7年4月28日撮影



タネマ 福寿野の種播き桜

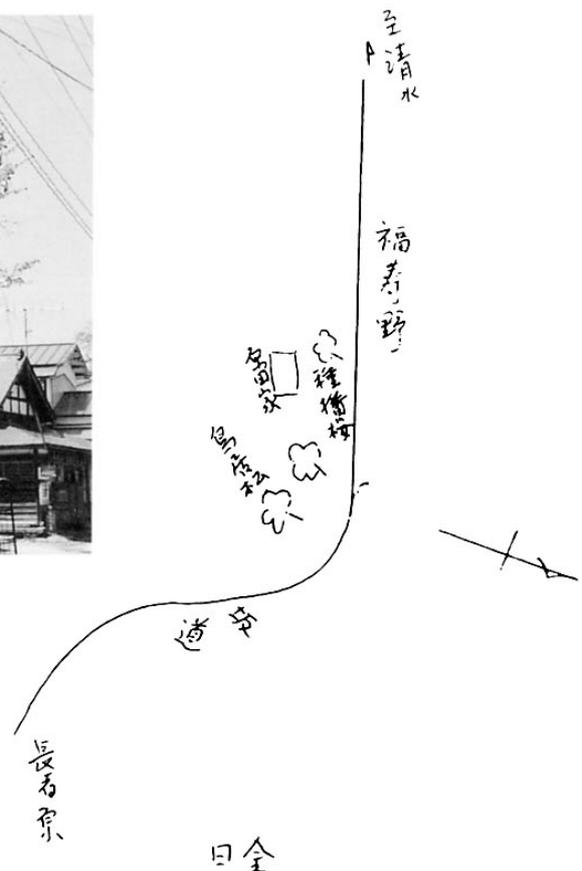
【所在地】 福寿野

原田家屋敷の道路側にある。当地方では、昔からこの桜の開花を目安にして、苗代の種を播いた。それで種播桜と呼ぶようになった。原田家は、藩政改革の一環として行われた福寿野村開拓に当たって、安政元年（1854）、村山地方岩木村から入植した家で、他の藤助新田、台村からの入植者たちの組頭を勤めた家柄である。この種播桜は、庄内藩の代官某が仙台の帰り、原田家に置いて行ったものという。一行が帰った後、1本の桜苗木を家人がを見つけ、後を追ったが追いつけず、それを今の場所へ仮植したという。これが種播桜である。今も見事な花が咲くが、これはひこばえであると云われる。

種名は「オオヤマザクラ」である。別名「ベニヤマザクラ」「エゾヤマザクラ」とも言われる。



昭和62年 4月28日撮影



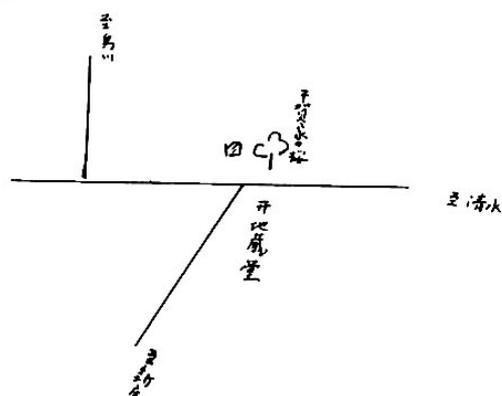
平賀家の桜

【所在地】 福寿野

平賀家にある老木の桜である。戸沢藩家臣平賀庄右衛門は、嘉永の改革に際し、家老吉高勘解由の腹心の部下、郡奉行佐久間浅右衛門、普請奉行小野十右衛門と共に、地方奉行として福寿野開発に従った侍である。安政元年（1854）、村山の藤助新田村、岩木村、台村から農民を移住させて開拓に従わせた。当時を記録した長者原村庄屋「小国家文書」によれば、初め、長者原村日金地区の開田を企てたが、生活には随分苦労した様である。庄右衛門は福寿野村に永住した。この際、新庄城の桜の苗木を植えたといわれる。庄右衛門は絵を嗜み、彼の書いた絵がたくさん現存している。この桜は原田家の種播桜と共に村開発の謂れを伝える桜である。



平成7年4月28日撮影



猿羽根楯のサイカチの木

【所在地】 富田（猿羽根楯）

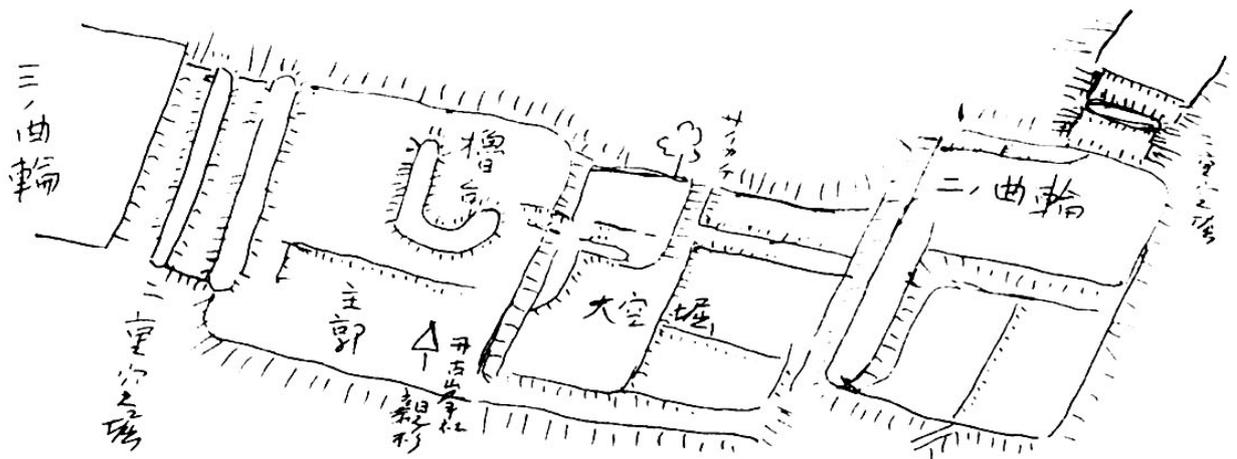
このサイカチの木は樹齢600余年は経たであろう。猿羽根楯主源次郎義高は、貞治元年（1362）、轟楯よりこの地へ移り猿羽根楯を築いたと伝えている。以前はサイカチの木が2本あったといい、その1本は楯西北端の曲輪にあったというが、倒れて今はない。サイカチは、豆科で、落葉喬木^{キョウボク}であり、種は、漢方薬、又は洗剤として用いられるなど利用価値のある木である。鬼門^{エンジュ}に槐^{ヤクヨ}を植え、厄除けするように、再勝（サイカチ）という語呂から連勝を祈り植えたものではなかろうか。このサイカチの現状は根元は枯れ、幹上部は枯れ落ち、南に張り出している枝の樹勢で辛うじて生命を保っている感がある。

〔天然記念物親杉同様貴重なものであり、蘇生対策が望まれる。〕



昭和63年7月撮影

猿羽根櫛



親 杉

舟形町指定文化財（昭和50年3月1日指定）

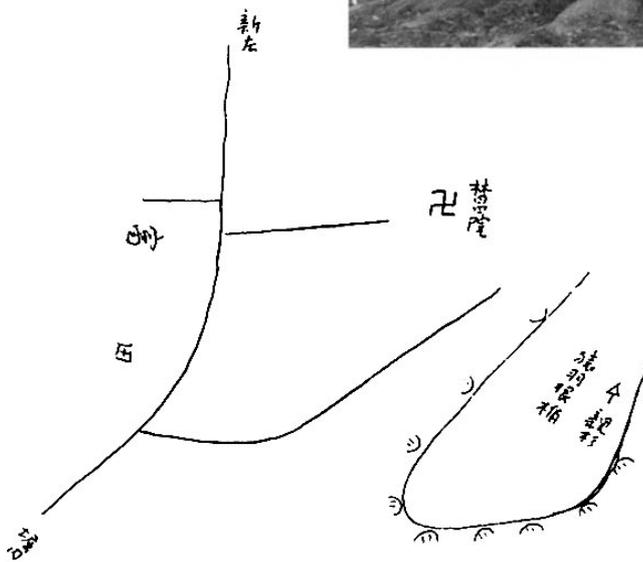
【所在地】 富田（猿羽根楯主郭北端）

猿羽根楯主郭北端にあるこの老杉は楯主お手植えと伝えられ、通称 親杉と呼ばれている。
胸高周囲約7m、樹齢約800年と伝えられている。今以て樹勢旺盛である。

昭和50年3月1日、町の天然記念物として指定された。



平成5年4月撮影



キ トウツカ 祈禱塚 一本杉

舟形町指定文化財（昭和50年3月1日指定）

【所在地】 富田

富田と根渡の間、県道脇にある。幹の途中より二又になっている老杉で、祈禱壇の上に植えられている。これを一本杉と呼んでいる。伝えによれば、昔度重なる最上川の氾濫に村人は悩まされた。それで、村人たちは、富田不動院（羽黒派）に依頼し、これを防ぐこととした。不動院は葉山から1本の杉苗木を持ってきて現在地に植え、これより東方山手の方の水田に水害が及ばないように祈禱した。これが一本杉であると伝えられている。この壇の上に2基の庚申塔が建っている。1基に「明和二乙酉（1765）稔連衆8月吉辰 敬白」とあり、大日如来の梵字が陰刻されている。



平成 5 年 12 月 6 日 撮影

